断片

二〇二三

u_

（に、向きの兆しを…）

に、向きの兆しを兆し抜けた徴の兆すのを、先へな先の失いのその内を向く程に外へ剥き出されようかに、な失いを失う失せられ無さが失せられ無さに溺れ戯れ直し倦ねれば、繋がり無さでな距たりの蟠りが何の向きにも背かれ固め延ばされ崩れながらも距たりを架け渡させられる儘に腐るかに失せ、失せ痕が距たりを埋め隠らせ損ない、な隠らせ損ないに隠る遅れの前のめりに細まる引き延ばされに蹲く遅れへの遅れが知らず凍り付き、先への先の失せるも失せないも無くに内とも外とも係われ無くにな、それでも向きを向けるか、には内をも外をも逸れるなら向きかともまるで知れない、に投げ出された冷た過ぎるのか震えも忘れ身動ぎ一つ出来ない距たりが、距たりなどただ鈍（のろ）過ぎて冷たくしか有り得ない上っ面に差す有りもしない遅れた冷たさの蕩けるように固まるばかりなり影かも知れなくに、距たり拒んで拒んだ距たりを暗い真下へでも徧わせようかと見ず知らずならさぞ嘘にしろ構うものかと何の向きをも揺らし撓らせるかに、それ限りに勢い付き已み懸かって鈍くになら撥ねたげな円み

を驕るかに唯一つ撓らない向きを透かせ際立ち挫ける、な挫けに惨めに混じっ
て反り返る輝きさえ劣らせよう、拒まれた距たりは、距たり異なろうかに円み
の驕りが撥ね除けた向きに準えられるなら準えられる向きの欺きに舌舐めずり
するかに欺かれ捩れては距たり異なれず、凍り付く遅れに惨めに棄てられるか
に、な異なれずに、な距たりとは異なる違う異なれずに、が、な異なれずに順
うかに静静と揃えば前へた圧される頑なに縦な輪を描きたげに誘き寄せられ、
遠巻き様も束ねられ損ねて塵の舞い回り続けるかに散り散りに先へとばかり弾
かれる距もその先な向きに欺かれ捩れようか、とその後追いで捩れをなぞれな
いかと距たり異なれない距たりの、捩れに順うばかりな強かめいた色めきをさ
も響き出すかにぼんやり表したげなこれ見よがしな弱さを滲ませる、その滲ま
せからして捩れて戻れないようでは、距たりは距たりの外の狭さに潰されるか
に距たりな儘に潰れ、距たり異なれないもその潰れた脇へ見窄らしげに圧し出
さるに違いなく、にしろ潰れた距たりの、どう潰れようと距たりなら拒まれ
る儘で、な儘な拒まれが独り、遅れが凍り付かせた遅れの凍り付きへ、独りな
ら独りに息付くしかない息への真つ直ぐな眼差しを差し延べてそうで、差し延
べてそうなら差し延べてないかも知れない疑いなどが、眼差しより更に真つ直
ぐに眼差しを刺し貫くかに突き通され、な疑いも疑いな儘では頽れるように直
ぐに掻き消され、消され痕に疑いな儘に凍り付くなら凍り付きから距たつて、

さも疑いなどとの異なりで、に絡むかに絡み損ね鈍るかに、な、それとも、な、とも知れず、驕る円みが、それとも、驕りに準えられて距たり拒まれの奥からその独りを破って真上へそして真上から真上の先へ浮き尖って直ぐ様距たり拒まれを鋭く削ぐように斥ける構えの円みなら円みが、何の円みの徴も無く、な徴の無さだけをまた驕るかに底抜けに虚ろに違いない円みに滲ませて円みを装うかな、にしろ装われた円みは紛れもなく円みだろうと驕り重ねの重なりに、また何の円みもその徴も無く、脅すかに、なそれ自らに却って脅されるかに、驕り脅す円みな自らから逃れたいかに逃れようもなくに円みで円みが、それは疾っくに円み異なりではと疑い損なうしかないにしろ疑われる円みから身を逸らし損なう振りで円みの裏へ滑り込み裏の奥へと舐め拡がるかに円みを窪ませ磨き掛かって窪まりに没み果て掛けて磨かれるばかりなら、それで磨かれ円まるかに円ませ、な円みの裏で磨かれた円まされではきっと只では済まず裏返らされようにと思えてならない、な只で済まなげな兆しが必ず見付からなければならない、なんて思ってはいけなかったかな斜めな憂いに狂わされるかな兆しへの望みは、何の望みとも無しに、円みからも円まされからも嫌われるように弾かれて望みの徴さえ奪われれば凍り付くしか無かろうかに、な望みに自ら叛き、円みの外の円まされのその外を遠巻きに巡るように、ようになだけで外など有りもしないと分かりながらに、高高と果ても無さそうに果ての無さそうに

の行き果て直ぐに果てれば重く伸し掛かるかな低過ぎる高みを仰け反り返るかに、ならきっと一回り捩れてようかに撫で回りたげに墜ちて、っ何処へ？も無さそうなら墜ち間違える振りを頼みに斜めな憂いに狂わされ直されたとか、にしろ狂わされ直されなんて何の事でも無いさと墜ち間違え振りを遇（あしら）えば、な墜ち間違えの見当たらない、さも墜ちられそうかな有りもしない外との隙にでも、横向きでは尖ってとしか差し込まれない円まされの影でも映ってそうに何の事でも無い辺りが賑わい燻って重そうに平たく沈めば跳ね返るかに沈み痕も賑わい直され、にしてもそれ限りに冷たく固まり暈けて匂うかに硬過ぎて硬さばかりで粘粘と、な辺りへとまで墜ち懸かろうかに傾く、な傾きならその儘に傾き延び已み縮み鈍ろう、尖って差し込まれる円まされの影を幾らか向きを丸めて改めて映しずれ、ずれはまたずれを映しずれ、少しでも円みの兆しでも棄てられたかにでも滲ませられないか、が望みなら望めようけれど望まれただけの望みでは何の望みも懸けようもなく、唯望みが望む望みにしろ、で却って何を望んでも何の障りにもなりそうにないならと望み直し挫ければ望みは失せ、な晴れやかな汚れを薄っすら纏う失せ痕に、さも切り取られ抛り出されたかに、にしろ少しも切り取られてなどない丸丸その姿と直ぐに分かる、円みの裏で磨かれた円まされが抛り出され、な抛り出されへの抛り出されに依って円みの裏で磨かれた円まされに抛り出されたに違いないのを証すかなその徴

が、望みの失せ痕に突き刺さるなら失せ痕を失せさせ、望み失せを深い奥に覗
けよう斜めに鋭い裂け口が閉じ損なう損ない痕は、覗けたかも知れない望み失
せを見知らぬ遠い先の痕の痕かに、なのに切り断たれたばかりかにも如何に失
古びて腥い暗みの落ちる直ぐ手前へ引き延ばして已まない、に、予め晒され果
て何の姿も色も失ったのを隠らせ鈍らせ鈍り果てた姿と色の酷く深そうに重そ
うに褪せ沈ませ、沈ませられず翳される、な翳しの低い拡がりの僅かな先への
円みを帯び損ねて撃たれ撃ち返したように細まり尖って弛く艶めく、う艶めき
こそ予め狙い撃ちされたかに艶めきの底を光らせたげに褪せ失せてよう、に円
みを硬く静かに狭く縮めてその円みの見窄らしさをなぞるかに苛んで、手前へ
の引き延ばしを更に手前の奥深くへ抛り墜としたげに埋め込んで已まない、に
しろそんな已まなさは直に已み已んで、失せ褪せた艶めきは艶めきで無いなら
無いにしろ、な無さなら恨めしげに艶めかせられようかと、苛まれ遠ざかり過
ぎて円みさえ拒むような円みへ、無さなだけならさぞ汚れ濁ってよう艶めきを
丸ごと預け傾け懸けようと、懸け損なうしかないのを押し通してあからさまに
懸け頽れ、な頽れ痕なら手前への引き延ばしを押し戻す勢いを細細とも冷んや
りと長く余らせ更に先へ引き延ばし尖らせ、な尖らせなど無かったかに有り過
ぎたかにあからさまに剥き出されるなら有り過ぎが徒で失せれば、見知らぬ遠
い先の痕の痕かに、にその懸け頽れ痕を準えられるなら準えられようかに、と

却って何の痕も残せそうも無くに深そうに重そうに沈み奥まって奥まり翳せば、深そうと重そうはそうして棄てられた手前の奥へずり落ちてやっとそんな儘なら自らを棄て、浅さや軽ささえも棄てるしか無く、疾っくに済まされた事とも微かに輝く薄いだけ薄く浮き晒された白をその白に暗く舐めさせる白を纏う姿を柔らかな斜めへ甦らせながらに、柔らか過ぎて姿は白の暗さに呑まれたともなしに呑まれて白は逆さの斜めへでも磨り潰され見失われたろうか、始めからその積もりかに楽しげに、な失われた白が、疾っくに済まされた事などはその疾っくより前から疾っくに何も無いのを証したげに、失われた儘に色も無く延び掛けて白を白白と翳し早まり、で遅れるのは何、とその何を顧みる何はその顧みの虚ろに惨めに墜ちるかに、早まり翳された白へ滑り込んで滑り込み已めば白を剥がされ裸な白で、な裸は、滑り込み早まって裸なのか滑り込み遅れて裸なのか、が揺れるしかなく定まらなくて裸なら、その裸の内へもその裸を覆う外へも、白を剥がされ白とも無くに透けた白の柔らかに延びる暗い限りに暗い光りを白白と映せそうで、映せそうなら映せてよう、にしろ何処へ、と追っても、硬く肉付きを増して色を拒む石のような薄汚れた白い裸の何処にも何も映らない、な映らなさでしかない裸の白の薄汚れが、な汚れが汚れに追われて汚さ盛るかに、な白を汚すのは失われるしか無さげな白の先の、白とは異なる、白より汚れてるか白より汚れてないかどちらかの、その白との汚れのずれに因

る微かな輝きなら輝きで、で無いなら輝きとの異なりで、それとも輝きと輝きとの異なりとの異ならなさかも知れなくて、なそんなそれがそんなそれで有るしか無くに有り急ぎ過ぎてその有り得なさに磨り潰され、潰され痕の有り有りと磨き出されるそんなそれのそれでしか有り得ない儘な、な儘な儘で、な儘なだけが居丈高にも、な儘な虚ろさ丸出しの輝きへ前のめりに倒れ過ぎたか倒れ異なってようか、な、ようか、が指し示す先しか先で無さそうに、な見るからに見窄らしげにしろ何が見えるでも無くになにな事でも無かろうか、に無くにと見尽くすしかなさげにさも惨めにも、なさも惨めだけがこっそり浮き浮きと事もなさげに色付くかにふわりと柔らかい望みの、必ずそれが先では無い徴につるりと覆われて先な、な何が見えるでも無くな見通しの有り得なさを有り得なくさせているに違いない、さも高くに奥へ向けて高いからには奥まってよう向こうからか真っ直ぐ真向かいに円みを晒して下る斜めな光りと見えるでも無い光りとも知れないなら光りが、必ずそれが先では無い徴のつるりな覆われを滑り降りながらつるりにだけは逆らいたいかにつるりを舐めては近寄り、その光りとも知れない光りがそれだけを含む湿りを圧し拡げ、乾いた高い向こうよりも遠い思いを遂げたかに自ら消え去るようなら消え去りよう痕は、さも見えて来そうなさもそれを光りと知れて来そうな光りの兆しだけを浮かすようにふわりと小さく尖らせ押し約め、なのできっと小さいだけ小さな未だ柔らか過ぎて羽

搏き一つ夢見るのさえ出来ない翼でも隠し生やしてなければそこから墜ちて仕舞いそうな、その直ぐに何とも見えなくなり知れなくなると分かり切った、敢えて見るなら狭過ぎて空っぽとも見え難い空っぽな兆しを、先は真っ直ぐにしか無い真っ直ぐ先へと真っ直ぐに沿えば抛り棄てられようかと何の斜めも捩れも斥け、に斥けたか斥け損なったか、に、兆しの空っぽが湿りの暗みだけを含んで滑り鈍り、な滑り鈍りが孕む重みが真っ直ぐにしか無い先を破って先を先で無くし遅れる、に翳されるが遅れに伸し掛かる滑り鈍りが孕む重みは、透け爆ぜて爆ぜ痕が痕を爆ぜさせ直そうなら、その失われたかな重みを何の先へも振り向け損ない損なって、な振り向け先では捩向けられるしかない先の先異なりが失われたかな重みの障りだろう、に重みは失われたかな儘にまるで失われて無くに、先異なりとぴたり重なるしかない、な始めから痩せ細ったかな望みにも重みは失われたかな儘に、に失われる筈も無くに圧し重なって望みを蝕み衰えさせれば、切り離されたかに重みだけが傾き、な傾きへ傾れながらに、な傾れを疎むかに傾きの狭い内を覗いて覗かれる反り返りの上っ面へ奥まれようか、に、そうでしか居られなかったか奥まれば概ねそこは閉ざされ渡された窪みで、唯一つ開かれた辺りはそこだけ色付き誤り色褪せ挫けるかに窪み異なり、にしろ尖りも捩れも暈けもせず窪みの縁なら縁をそこだけ冷たげに傾きを拒んで捩れたげな程に狭まって煌めかせ、煌めかせたなら傾きに違いなかろうと考える

傾きが、傾きの傾きを遇（あしら）って傾き偏り損ね、損ね痕の透けて傾きも偏りも拒むかに、と拒むには小さいだけ小さな柔らか過ぎる翼でも生やしてなければならないかな匂いを狭いだけ狭く透け切った玉のように振り撒こうか、な兆しを掴まえようとして兆そうと兆すまいと追う、兆し追うのか追い兆すのか、な窪みの縁は逸れるなら逸れて斜めな円みは斜めをも円みをも逸れるかに窪みの底を知れも覗けも出来ずに窪みの内を窪ませ巡り進む、な進ませが、兆しの空っぽの湿りの暗みだけを含む滑り鈍りさえ巧く避けられれば、たっぷり斜めと円みを孕んで何の障りも無くに弛くに、兆し追うのか追い兆すのかな巡り進みの何の蟠りも無さそうな薄く透ける跡を有り有りと描き、なゆとりに自惚れるかに消えれば、消え痕の鮮やかさが障りで、に障られて揺さぶられる斜めと円みが危うさを避ける積もりか斜めとも円みとも無くなる程に止まって何もしてないかに酷くゆっくりと痩せ細り、にしろ斜めは斜めと際立ち円みは円みと尖り、なそれぞれでは、兆し追うのか追い兆すのかな進ませの消え痕の鮮やかさに打ち拉がれるしか無かろうか、と別れ別れに進む跡の直ぐ様掻き消される消され痕は窪みの底を窪みの底と知らず覗き込んでよう、な窪みの底に見上げられ覗かれてようかな軽みに引き摺られて際立つ斜めと尖る円みは、窪みの縁も底も知らない、なら窪みとは違いながら窪みに接がれれば窪みな辺りへ混ざって溶けて一つに翳り、な接がれた新しい窪みの影をゆるりと舐め上がっ

て、それとも、な振りで急いでせかせかと舐め下がって、に上がれも下がれも
する上も下も有りそうにない、傾きと円みの間の距たりに隠された見窄らしい
虚ろを隠し直し隠せず直し遠ざかり損ない挫け延びて行く、にしては、隠させ
直させた虚ろの露わな見窄らしさに楽しげに絡んで絡み棄て、棄て痕の残らな
い暗みが妨げで、な妨げを避けるなら暗みを大きく囲んで呑もうと脅すかに脹
れる一つに溶けた斜めと円みの翳りは、窪みを抜けられたかに、窪みが窪みで
無い限り抜けられよう筈も無くに、呑み掛けの暗みの僅かにしかしその僅かに
が抜き差しならずに偏るそれともその僅かにの上に僅かにも偏らなくて抜き差
しならない重みに、捩れ溶けた一つの中で互いに背き合い、な背き合いが斜め
と円みを置き去って反り返る反り返り痕の艶に映る何も映らなさの暗みの明る
み、の裏に何も映らなさの猛猛しい艶が重なれば明るみの暗み、の煌めく艶が
艶を消せば何も映らなさは何処にも映れず流れるしかないにしろ流れただけの
明るみを取り込めたかに重みを確かに孕むと知れれば、その知れた重みに流れ
を止められようかに、止められようかになら止められずに流され、な流されは
もう何処にも映れずより先へ流れて何も映らなさをすっかり後ろへ引き離し、
引き離された何も映らなさをその引き離されの距たりにゆったり撓めて映し消
し、消し痕に、な痕の重みの明るみに色付くかな窪みの窪ませられなさに圧し
詰められ歪められるだけ歪められて殆ど面影もなく投げ出された揃えて切り取

られても違う動きをしたそうな二重の翼が小さいも大きいも無くに横たえられて重みの明るみにじわりと蝕まれたそうに柔らかげにも硬く沈み掛け、かに、唯窪ませられなさがそんな艶を燻らせてそうに、に、な艶を艶めかせ始める描き始められた輪の先を何処へ還そうか、な輪など輪と斥けなければ窪ませられなさは歪んで仕舞おうに、と、な向きは向きで無くに、なので翼の二重は重なりを嫌うかにじっくりゆるゆると滑りずれて、向きを向かないそれとも向くにしろ常に向き改められ向きを定められない羽搏きなども求められようか、とでも窪ませられなさは、燻らせてそうな艶に囚われ先を見通したげな翼の望みに促され惑うかに輪を輪へ還したそうに、それともそうして輪が閉じれば環の中に透かし見えよう翼の面影を取り戻した翼のその面影の儘に風を孕む勢いを見詰められようかに、輪を輪へ還そうと還し損ない、損ない痕も痕へ還し損なえば、窪ませられなさな儘に窪ませられなさから逸れ鈍り、鈍り窮まるかに窪みを真っ直ぐ奥へ滑る艶そっくりに尖ろうかと、描き始められてもない輪を輪との異なりへ還したげな、な、そんなそれへ、乗り移れる限りを乗り移らせれば何が乗り移ったも無くに、と、そうしてそんなそれはそれと異なり、そんな異なりなそれが、輪との異なりへ還り損なった輪を輪で無いまでに狂わせれば異なりなそれのそんな異なりこそ狂って、狂った異なりにそれは刺し貫かれるのかそれとも狂った異なりなど穢らわしくも斥けられ影まで洗い浄められ棄てら

れるか、にしろ狂いだけが狂いに還れも還されもせず、それでも異なるなら異なり異なって、翼の面影の裏へでも苦し紛れに逃げ込みそうで、にしろ、翼の面影にそんな裏があるなら、そんな逃げ込まれをずっと待ち望んでたろうかな徴の蠢きにうっかり釣られて輪でも描き始めそうな、にしろそんな輪は斥けてそれでも描き始められて仕舞ったなら描き続けるしかない、それともまだ描き始められていないなら描き始め損なう為に描き始めるしかない、な、翼の面影の逃げ込めそうな裏であるにしろ裏か表か知れない辺りにこびり付くならこびり付く、こびり付かないなら翼の面影を離れて翼の面影の影を追う面影へと傾れ込み、翼の面影の裏が異なりから異なり狂った狂いを待ち望んだその徴の蠢き、もう何処へか紛れてそうなそれをそれへと還せようかな蠢く徴を、翼の面影の影を追う面影に刻み込み、その細く狭い刻み込まれの行き止まりを、刻み込まれとの異なりを狂わせ、な狂い異なりで、な狂い異なりの姿を描き始めようとするなら描き始め逸れ、刻み込まれの行き止まりも狂わせ異ならせ始めさせられ、な狂い異なりな儘にそれは異なり狂い直すしかなくに狂いも異なりもも自らを失うなら行き止まりの何が行き止まりなのか、狂いも異なりも失われて何を行き止まらせられようか、な行き止まりに止められるのは行き止まりだけではないか、な事で異なれも狂いも出来ない行き止まりは、徴の刻み込まれの脇へか剥がされ、剥がされ痕は刺し貫かれ、刺し貫かれ痕は突き破られ、とは

何にかと刻み込みの狭い細みが顧みるなら、何に、はその細みに、しかなく、な細みだけが、何の行き止まりだろうと失われる筈の無い狂い異なりを、何処へとも切り開けるかにその何処へともへ帯びさせよう、な狂い異なりな儘に異なり狂い直せない狂い異なりが何を狂わせ異ならせられよう、な何も無かろうに、と細みばかりは自らの身を何処へとも切り開けよう、な何処へともへの望みに細みばかりが浸り切れば、な浸り切りの中にか奥にか何の姿にも変われる狂いと異なりが犇めいてそうで、な犇めいてそうへの透けるばかりかな見通しが細みを細みにして細ませ鈍らせ、な鈍らせに見通しはすっかり覆われて何が透ける透けないも細まされては、細みは狂い異なって細みな儘な細みで、ならそれよりはどう狂おうと異なろうと細みには何の事でも無く、な細みを細みと見極め異なり損ない、見極めから劣らせて、みとの予め定まってたかな距たりを狂わせる見極めは見極め異なったらしく細細みを見失う程に狂わされた距たりへ斜めから刺さって距たりの中に見極め異なれる細みを追うしかないかに距たりも見極め異なりも見失い、見失い痕に、その痕の徴と絡むかな儘に唯細みばかりが拡がって弛く延び上がるのには何の徴も滑らせ落とすように平たく轟くように暗過ぎなければ済まないにしろ、その暗過ぎる轟きの真上を向いて射すような明るみが、延び上がる細みの拡がりの途絶えるように拡がりようのない細みだけを照らせば、その明るみより強く照り返され、な照り返されが真上

を向く明るみの上にすっかり被さって暗過ぎる轟きより暗い暗みを、明るみより遙かに明るくその先へ引き延ばし、な引き延ばされなど少しも引き延ばされではないし引き延ばされ異なるでもないと知れるのにどれ程の時が要ったか、な時など時を殺す為に時の時を遡るかに疾っくに失せ、その計り知れなさの知れなさに引き延ばされる、細みから辿り着いた明るみの断ち切られそれとも断ち切られ異なりそれとも断ち切られ異なされの、なそれらの、どれとも異なられようかに断ち切られを断ち切る断ち切りを断ち切らせる引き延ばしが、引き延ばしで有り得よう筈も無しに引き延ばし異なれずに、引き延ばし失せもしない儘に引き延ばし痕だけを引き延ばし遅れ、に有りもしなかったどれ程の時が要ったかな痕に蝕まれて引き延ばし遅れは、引き延ばし遅れ痕から、それと真向かいな儘に覗き込まされる斜め下へ円みを乞い求めるかに暗い暗みを呼び出し損ねては穢れた明るみの高さに穢れなく苛まれ、な事らなど何程でも無かろうと蔑んで直ぐに蔑み極まればその極まりが蔑みを蔑んで、蔑みに蔑みを蔑ませた蔑めと言う声が、いや声じゃない、何でここで声なんだ、と言う声だけが予め打ち消されて痕に、な痕を予めその隅隅まで知らされていたらしくに、知らされていたらしいなら全く知らされに知らされ知らされ過ぎて耐え難く、が酷く狭そうに隅隅まで行き渡るなら知らされ過ぎの衰える替わりに耐え難さの知れなさがその知れなさを蔑める限りに蔑んで、と蔑ませたのは明るみか暗み

かの知れなさを翳せば翳しただけ蔑みも蔑ませも同じだったかに頽れ、頽れ痕ならの窪もうかなな望みだけがさも虚しいばかりに硬く真っ直ぐに延び、かに延び已むのは、なら望みを断って横たわるなら横たわる、横たわらないなら僅かに窪んだ寝かされた鏡にその手前で身動ぎ出来ない蔑み蔑まれ頽れ痕の窪みが映ろう、と映ろうなら逆さな僅かな窪みは僅かに脹らんでそうな兆しのせいに違いなく、な兆しが兆しな儘で済むか済まないか、な兆しでは知り叛かれるより先に兆しから兆し逸れるしか無くにまるで兆しで済まないなら兆し異なってよう、の異なってようの知りようの無さに兆す兆し已み痕に、なら痕は痕とは異なろうなと声かな徴が、始めからその徴しか無かったかに拡がりも狭まりもせず窪みも脹らみもせず、な何のせずもせずに、せず溢れ窮まれば、窮まり窮まりようも無くにそれはそれでしか無くにそんなそれで、などとは何にも知れなかろうなら、その儘に已めも頽れも異なれも出来ず、な出来ずなら何でも出来そうに出来そうが勇んで翳され翳される他に何も出来ず翳される限りには徴では有りそうに、その脆さを隠し損なうかに有りそう挫け、な痕が有ろうと無かろうと辿り着かなくてはならないのに辿り着けない痕も無くに、脹らみと窪みそれとも窪みと脹らみ、そのどちらかでまるで違うその違いが間違いなく妨げな兆しが、な兆しを兆す通りに苛めば、全く窪みでしか無くにも窪みでしか無くに脹らむしかない、窪んだ鏡に映れば逆さに映る窪みを跡形なく呑んで、呑まれた

それに呑み返されそうならそんな事を望んでいたと行き成り斬り捨てられるかに酷く鮮やかに思い出したかそんな儘に、なそんなそれが、それだけがそれではそれで有り得ない徴をそれの外へ溢れ返らせ、な外は内へ内へと斜め下へ頽れ懸かって愈愈外で、に、な外だけが、有りもしない窪みを目指して尚も外を外へと向けるしかないなら頽れるしか無くにも頽れない、頽れない痕は、外で溢れ返る内塗れに脹らめも出来なくて、窪んだ鏡にも頼れず何処にも映せない姿にしろ、な姿を自らに求めてそうな儘に求め鈍るのに付け込まれるかに、な姿ならこれだよなんてまさか声には聞こえなかろうとも、何の姿も剥がされた痕みたいな、なので痕の姿の痕も剥がされ、そのみたいな痕の痕も無くに、な無くにな痕なら痕かも知れなげにしろそんな痕の事では少しも無いに決まってそうなら、とは言えそれなら確かに何処にも映せない姿だろうな、な徴は影も無く、な影の無さだけが求めるものと違って見知らぬげに背を向けるかに圧し被さって来そうで、来そうなら来てなくて寧ろそんな圧し被さりこそ嫌でも追い求めさせられたいかな望みの湧き起こるのを抑え切れない儘に抑え切れな損なったのか、な望みは何の望みも断たれるかに硬く固まって却って望みの厚みと重みを増し続けるようで、ようでなだけではようでな儘に薄っぺらで軽くて望みは虚しく散り果てたろう、にしろ、が望みの望みだったに違いなかったかに望みは失せれば、失せ痕は、な痕へ行き着けてだけ痕であれば嬉しげな艶を

細く縦に一筋、僅かにしろ痕と距たり痕をさらりと越えて行けそうに引いて、
あぁそんな一筋なんて引かれよう筈も無いよなってさも声かな思いだけがその
一筋に被さる幾筋かに思わず流れ出たろうか、な思いだけが幾筋なんて直ぐに
掻き消して真っ直ぐ斜め下へ予め墜ちてその墜ちた後を追って墜ちた真似で墜
ち直すみたいに墜ち損なえば、な思いからして重く厚くに根刮ぎ斜め下の底で
進んで逆さに引っ繰り返るみたいに嬉しげに艶を立ち上げ損なう、な艶ばかり
がどう損なわれようと損なわれる儘に艶なら艶で、と艶めき衰え果てれば、に
も衰え果てた艶めきだろうかと顧みる先に、いや先じゃ無い、先と距たる、き
っと先異なってよう、な距たり異なってような儘を脅すように翳す圧し迫りが、
嘘の他に何も無いかに圧し迫り叛き、圧し迫りの他の全てを砕いて嘘に沈めて
は圧し迫り叛きた異なり、な異なりを繋げてしか嘘を嘘に保てないのも苦しそう
に向こうへ逃げたそうに、な向こうは、行き成りに待ち構えるかに覗き込むの
を誘いを断つかに誘ってるように違いなく、な違いなくの僅かなあやふやさを躱し
て誘いの確かさを確かめようなんてしてはいけなかったかどうか、を知れよう
も無いならもうその知れようの無いに引き摺られてその向こうを覗き込んで仕
舞ってるのは全く確かで、それは全く確か異なるのも確かな程に確かで、つま
り異なる異ならないでは何も異なりようも無くにそんなそれで、なそんなそれ
がどんなそれか、などと尋ねようも無いなら尋ねようも無いも無くに、な事で

は、なそんなそれでも無さそうに、いや、そんな無さそうこそ真っ先に無くて
向こうは向こうで、な向こうでは向こうを覗き込むも無く、唯覗き込むだけが
その向こうで、ならもう、向こうも覗き込むも有り得よう筈も無いなと顧みら
れるどちらも失われては、ひたすらその失われを顧み窮めるしか無かろうか、
な無かろうかこそ有り得ないなら、無かろうかが根刮ぎ裏返るかに唯有るばか
りが有りに有るしかなく、な有り過ぎの何て無いより無さそうな見窄らしさ、
とは見せ掛けに決まってると直ぐに分かれば見窄らしさに閉じ込められてるの
は、そう分かる、窄らしさで、然もそれしか無くてはその見窄らしさを頼るし
か無い頼りなさ、ではじりじりと後退るしか無くに、な後など有る筈も無けれ
ば消えてよう、に消えてような儘に消えられる筈も無ければ唯有るばかりが有
りに有る中に呑まれるしか無かろうか、と、な事を知れて仕舞うのは何故とだ
問えるにしろ、その問いの為に顧みられるどちらも失われているのが知れるら
けで、にしろ、それはそう知れたなら知れたんだと失われた顧みられるどちい
もを一筋に追えば追えて仕舞うのは何かの間違いに違いなくに、その違いなら
間違いが、間違いで有り続ける為に間違い異なり続けて間違い異なるも異な、
ないも無くなれば、な事の何を知れるのかな何をからして失われてよう、に、
唯有るばかりが有りに有るしかなくへ引き返させられるしか無さそうに、な無
さそうに閉ざされ、何だろうと閉ざされるなんて事の有る筈も無くに、それは

直ぐに裂かれ先へと開かれ、唯有るばかりなり有るも無いも無しな姿が向こうと現れる限りに現れる向こうを、向こうな儘だろうに、に向こうに出来ない、どちらも無い中へ抛り込まれるか抛り出されるか、どちらも有り得ないのは向こうを向こうに出来ないからに決まってよう、と知れる端から、その端から向こうな儘そのもののように、その儘に止まった儘に、有るばかりが、そっくり無いばかりではないのか、とぐるりと入れ替わるかに巡る眺めが断たれる断たれ痕に、眺めの巡るのも何の入れ替わりをも嘘と斥け、それとも始めから嘘と斥けるまでも無いのなら無くて、な無くてな始めからが断たれた痕だけが痕なら何の痕でも無さそうな、な痕に、とも無さそうな痕の痕を探る徴が纏わり付いてないか、と望んだなら望み頽れ、望み損なったなら望み損ない挫け、な頽れと損ない挫けの懸け離れだけが、重過ぎて動けない水が縦に降ろされる鋭い刃で真横へ裂かれるように拡がり弾け、かに痕とも無さそうな痕の痕の無さそうな辺りしか無いならそんな辺りに、始めからより古くから身動ぎ一つしないと決めて剥き出された儘に隠されていた、かとも見誤るのを楽しむかにふと見詰めれば窪みの中に凝っと円みを鈍く凍らせただけかの、曇りのない鏡のように何でも映すなら映せようけれど何もその前にまで辿り着けなくて、それとも辿り着いたなら鏡に丸ごと吸い取られたか、何も映さない儘にその映さない儘だけの有り得なさげに引き裂かれたその艶の引き裂かれな艶を、脅すように斜め

に翳すようにも斜め奥の穴へ墜ちたげに横たえ、な危うさを渦でも巻き始めたげに、何でも映すなら映せよう、が突き上げようか、にも、何も映さない儘に、が、な危うさだけは映したか映そうともしないのか、な処が有りそうなら始めからより古くからでさえ在り来たりに有り得ずに、な処に映るも映らないも無い危うさは渦など巻き終わって危うさは危うさに巻き取られて危うさだけの危うさではその儘に斜め奥の穴へ墜ちて痕も無いのではと疑うしかなかろうかな徴が、な徴は徴かと顧みる何処にも何処らしき何処さえ認められなくて何の徴が徴かと徴を疑うばかりな徴の徴で無いかも知れない徴が、しかしそれの他に何も無いのならそんなそれの儘に、疑うも疑わないも無く疑われず、有るなら有ろうし無いならその無いに無いな徴を絡めて徴崩れながらでも徴直す、な事にしろ、な事が微かな徴とも何処にも顧みられないでは、な事も無かろう、などとも何処で思えようか思えなかろうに、な、思えなかろうに、は、却って何処を何処とも思えなかろうにも、そんな何処な何処など幾らでも思う儘に出来そうで、出来そうならその思う儘にな限りには全て思い通りに出来るに違いない、な出来るに違いない、が、何処をも、その違いないな何処にすらすらと換え、なすらりと改められた何処を何処までも押し拡げよう、にしろそんな何処など何処まで押し拡げようと何処の何もそこが何処である他は空っぽな儘では拡がりようも無くに押し拡げ損なわれれば、微かな徴崩れの後でも追うかに、

何処もが頽れ、頽れ痕の痕に何の徴も印せない、印せない痕も始めから無いのでは何の痕も徴も小さな輪にでも閉ざされそうな虚しさが虚しさを居たたまれない虚しい戯れだったかとさえ見定められず、と、な見定められ無さも断ち切るか断ち切らされるしかないのなら、見定められ無さ異ならされる、な異ならされに攫われるかに、な異ならされに至るまでの何処もが何のあやふやさも許されず間違いなく失われ、な失われさえ予め失われていたらしく、かに、な失われを失わせたか、な失わせとさえ始めから少しも係わらなくて、な失われを斥け消し去った、いや消し去れるものなど何処に有ろう、なその何処さえ始めから無かったと暴くだけかなそんなそれが、そんなそれなどと指し示される筈も無くに、な、無くに、を無くにな通りに無くしても何も無くならないらしい、それとも何も無くならないらしくしか現れられない何も無さとの異なりが有る無しなどに係わらず現れるしかない、な、それがそんな現れなのは紛れもないにしても、その現れを何が受け止められよう、よりも先ず、何がそれを現れさせられよう、それを現れさせる何がの何の在処が知れなくては、その現れは受け止められようも無かろうか、な無かろうか、に何が応えられようか、な何にしろ応えられようとするしかなさそうなら応え、その応えた先へ流されるなら流され、でしか無いにしろ抗えるなら抗えそうでも何に抗うのかな、と躊躇う間も無く却って躊躇いは引き延ばされるかに、そうして応えるなら応え、流さ

れるなら流されたそれは、それをそれとしてその何を知れるかを顧みようにも
顧みようもないそんなそれで、そんなそれをそんなそれにしたそんなそれと異
なるその異なりを、その異なりが何だろうと受け止めるしかない、な、しかな
いな現れに、そんなそれもその異なりもどちらをどちらとどうとも為らずに、
な為らずに、に応えるしか無くに唯そんな事が、であるしか無くにそんな事な
ら、そんなそんな事がそんなで居られよう筈が有ろうか、とそんな事はそんな
事をそんな事らしさに巻き込んで砕いて毀すのを嬉しがり、そんな事な儘に、
そんな事との異なりに丸ごと換えられて行く、な換えられを映す処を探るしか
出来る事も無いなら出来ない事でさえ選べるなら選べそうに、な選べそうを先
ずは何処へか映せないかと映し損ない、損ない痕へならその映し損ないが必ず
映ってよう、だなんて、映すと映るを引っ繰り返せる見通しに身を傾かせたり
してはいけなかったんだ、なんて唯声なら声に出来ようけれど声など直ぐに声
が声になる前より激しげに消えるだけで、にも消える声を追うしかない、な声
にさえ磨り潰されるのを恐れるしかないかな惨めさしか残らない、そんな身な
どそんな身が自らを映すのがやっとか、な賢しらな身であるのも許されそうに
ないなら、そんな鈍間な身に何が映されようか、な映されに映って辛うじてま
だ傾きの先に直に先ごと消えそうでも、その消えるのとは異なりそうな惨めさ
を自らうんざりしてそうに装うだけな惨めさの欠片でもせめて追ってられそう

ではないかな望みなら望みが、望みでないなら諦めで少しも構わない、そんな傾き直しな兆しの端でも間違いなく掠められたなら、な掠められが磨き出した微かな艶に磨きを掛け、とは何が？な何なんて何も無いかも知れない処で言い出してはいけなかったんだ、なんて声も声が声を磨り潰した痕しか見当たらないなら、何が？の何って何？に行き当たるしかない見通しにするすると通されて行くかに行く筈なんて無くに易易と行き止まり、行き止まってみれば、少しも行けていなくて始めから唯塞がれているに違いない、な塞がれの痕も無いなら、痕も無い無い痕に呑まれるとも吐き出されるとも異ならされるしかなく、な異ならされが何が？の何なのか、な異ならされなんかにうっかり望みを懸けて仕舞ったか懸け損なったか、があやふやならどっち付かずな中に掠れて見えなくて隙を見せる隙間を見付けるかして微かにも望みを繋げよう、な見通しは見通しばかりで先走ってないか、と問う声こそ危う過ぎると危ぶむ焦りに付け込まれるかに有るか無いか知れないそんな危うい先に誘われ、繋げるか繋げないか知れない望みを懸けられたか懸けられなかったか、きっとどちらでも無い、だって懸けられた痕も懸けられなかった痕も無く、な痕が無ければ何も無かろうかに有りもしない何もかもが痕など全て掻き消して有りに有りに有り尽きないに違いなくに、その姿の隅隅まではっきりした現れだけが迫って去って、それとも去って迫って、なあやふやさが何の望みも跡形無く吹き飛ばし損ね、で、

それは惨たらしげに残った望みの骸なのか、な、それがそんな形（なり）ばかりなら探せようか、は、望みに閉ざされて出られない望みを断たれて望みな望みに違いなく、に、な望みでは、その痛みに身動ぎ一つでうっかり身を焼かれたりする前に諸諸何の望みとも一纏めにして捨てるしか無く、捨てられたかにも捨てるしか無くな痕は捨てようも無くに、その何がかなんて何とも知れなかろうと迫って去って去って迫ってなあやふやさと、きっと、なあやふやさに絡んであやふやをあやふやに喰うかに勢いを増し続ける有りに有り尽くす現れの、溶け合うような背き合うような、一塊に円みを低くも高くもなく真っ直ぐ翳して数知れない姿のない円みを円みから穢らわしいものを吐くように穢らわしげにて透けさせて固まらせ振り回す、な振り回しの円みの姿のない一つ一つの一回りが尖りに尖って円みから円みの明るみを奪い、円みは全く唯暗みで尖り已まないばかりでは円み異なろうかな、に異なり異なろうか、な痕と異なる痕を見付けたくて見付けられなくて、とは何が？それとも、見付けられたくて見付けて貫えなくて、とは何に？いや、な何が？も何に？も違おう、とは何がに何がも知れずに、その違おうだけがそんな見通しの儘にするすると違わされ、そう違わせた、円み異なろうかに異なり異なろうか、が、その異なろうと異なり異なろうと何も変わらない円みを円みから引き剥がすまで円みを裂き窮めては円ませ、にそう円ませて引き剥がした、にしろまるで傷を負ってない円みを端か

ら呑むのか、却って呑まれて再び円みの甦られないまでに円みを刻み、刻んだ自らを円みに刻ませるのか、とは何が？に、その何が？な先に、嬉しそうにさもその何という形（なり）でここぞと極めるかに纏わり付く、そんなそれがそんな儘に已み失せれば失せ痕に何も已んで無かろうかな徴が眄み付けてそうな辺りだけが、微かにその微かさで侵すように拡がり、淡く光って光り鈍るのに誘われるかに、な光り鈍りを覗き込んだのか覗き返されたのか、なんて尋ねるそれがそれで居られるとしたら、それをそれで居させる何が何をしたのか、だなんてその何に尋ねるしか無くにそんな何は疾っくにその何でその何を毀したに違いなかろう痕なら痕、痕で無いなら痕で無い徴とでも置き捨てるしかない、な置き捨てられた辺りに滑り込む、何処をか一巡りして戻って来たかな光り鈍りが、いや、な光り鈍りに鈍り光らされて置き捨てられるしかないなら、なそれをそれにするのは、それで無いと分かりながらにそれにするしか無くに、限りなく狭く小さなそれへ自らで自らを焼いて焼かれたそれを狭さの求めに応えるかにして拒むに違いなくに限りなく入り組ませたように入り組んだ、な入り組みへ身を投げて入り組みを入り組ませ直し、な直しだけが更に狭く小さく、な狭く小さなそれを焼き尽くすかに、にしろ焼き尽くすとは逆さな、逆さに狭く小さいなら、逆さとは異なれず狭さ小ささと逆さな儘に、唯それがそれで有るしか無くに、それの儘のそのそれとの異なりへと鈍り光り異なりを混ぜ込ま

せ、その狭過ぎて小さくすら無くにそれと逆さに、な逆さとまた逆さに、な逆さとまた逆さに、な事の繰り返されと異なり、に異なり異なって、異なり尽くせるならそんな事か、とも異なり尽くせる筈も無いと予め知れてよう、なそんな事か、が何処へか裏返り損ね損ね、損ね已めば、その損ね損ねの損ね振りがその奥に自らを堕とす小さ過ぎて狭くすらない穴を密かに密か過ぎて丸っきりあからさまに揺り揉むかに潰し損ね、損ね潰し、に損ね潰されては穴か穴でないかなあやふやさも潰され損なわれてようかな穴が穴異なるしか無くに、な異なりを異ならせ、異なりを行き来して已まないかに穴が穴を穴で穴埋め損なって、それでも穴なら穴で無かろうと何とも異なれずに穴で、な穴の見映えを見尽くさなければ済まない筈が見尽くせない、その見尽くせなさの後戻り出来なさこそ裏返って穴異なりでも穴な儘の穴に嵌まり逸れ、逸れ行き過ぎ鈍り過ぎて、逸れながらにその逸れへ逸れ向かいたいかに、逸れもしてそうに嵌まり鈍り、に鈍らせたそれを覆い被さるように見下す、な見下しの唯見下しで有り過ぎてかに唯下しは出来ても見損なう、な見下しの見下しとでもないそれをそれが見下したいかとも見下し切れず、な下し切れずを切って、見るだけに後退るそんなそれを、眺めてる積もりで穴の手前の僅かな光りの射し留まれそうな辺りなら辺りに、な辺りで無いなら光りを遥か遠ざける穴の縁に沿う短く狭い溝の面影なら兆そう窪みにしか見えないなら必ず窪み異なる、砕き尽くした骨の

一粒なら埋めても隠せそうに骨を隠し、隠されたのも忘れてうっかり光りを招いて仕舞って裏返りたそうに穴に背を向ける向きへ傾き懸かって懸かり偏り、な偏りになら凭り掛かれようと傾き鈍り損ない、せめてその鈍りだけは繋げたいと光りを手繰ろうにも射すのは光りでも光り異なりでも無さそうなら、その偏りの拡がりの狭まりに記された必ず窪み異なる徴の傾きに射す光りを映し、な映されの匂いの古さが繋げて見せる先の、見映えがせず繰り返し選び損ねられた骨の一粒に似せた浅い虚ろさをやんわり裂いて穴が穴なら必ず穴を塞ぐ円みが、穴から食み出し食み出す縁は内に円み異なりを孕んで穴を穴異ならせる企みの脆さに自ら苛まれ、な自らに抗うには光りを光り異なりに吐くか、せめてその兆しの微かにでもそれらしい明明しさを滲ますしかない、吐くも滲ますも同じ一つに、な儘に、吐けない光り異なりの明明しさを自らの自らへの抗いを切り開いて取り出すしか無くに、そう出来ても無さそうになら、その無さそうだけが脹れて虚ろな円みを真上にも真下にも真横にも真っ平らに拡げ尽くし、な円みの真っ平らを円みが堪えられないかに声もなく叫んでそうな、それは叫びを叫びで無くす、叫びで無いものまでも叫びで無いもので無くす痛みだろうかと、な痛みの姿を突き止めたい円み自らの内から突き破られて行く様を晒し翳すしかない痛みを突き抜けた虚ろさが、痛みと痛みの後先に現れる悉くに塗り込められ、に拡げられる真っ平らに塗り込め返され、な真っ平らな塗り込め

返しで真っ平らは真っ平らで居られなくなるなら円みに近付こうとして却って円みから斥けられ、にしても円みは変わらない儘で、な円みの弱みに付け込む晒し翳される虚ろを虚ろにして操っているに違いない、それは何だろう骨そっくりに砕かれ尽くされた虚ろの一粒かなとも自らを匿って、匿い翳すかに揺らめかせて匿い直し鈍らす、な企みの間違いなく間違っている偏りに凭り掛かる振りの虚ろを噴き溢れさせ流れ出させるかな、虚ろの匿い翳しの避けられない厚みに突っ込んで行くしかないのは何？と、その何？が突っ込んで行き損ない、損ない損なえば突っ込む勢いだけが走ろうかに、残された何？の片割れかな形（なり）の虚ろの冷たさを引き抜いたかなあからさまな頽れが、頽れ翳され翳され頽れ尖り、尖り異なるしかなくに尖り直り狂い、な狂いを直す為には、何処まで戻って頽れ直さなければならないかを計りたいのか計れたのか、その計れるのこそ狂いに違いないならその儘に狂い直りかも、な狂い直りで有りたい願いなど偏るしかなかろうに何処でそれをそう見抜けようか、な何処も無さが見付からないのは何が見付からないかを知ろうと、その見付からなさへ差し込まれてその何がを計ろうと出来るのは何処も無さだけかな、な、かな、の柔らかみがふと物差しに為っているなら為っていそうに曲がり拗りさえして計り取れるのは、虚ろの匿い翳しの避けられない厚みの高く傾き懸かる裏かな辺りで、それは、狂えば狂っただけ円みな円みを支える、な円みとは間違っても係われ

ない虚ろの虚ろ異なる偏りで、な異なる様が裏を突き抜き剥き出されれば偏りは、狂えば狂っただけ円みな円みを支え直そうと虚ろも虚ろ異なりをも棄てるしか無くに偏り窮まろうにも、向こうからにしては近過ぎても向こうからな虚ろを操る、短く滲む光りの拡がりが弛い円みを描きたげに、その透け掛けた真ん中を薄く丸く拡がる振りを翳して翳す程に暗みの弛い、何時か既に円みとしか見えるくに必ず既に円み異なってよう異なりが、近過ぎても向こうから刺さって来なかに反り返り、二つに裂けて窪みの裏が晒されれば、その二つの脹らみかなるらかみは端へ滑り逸れる程に翳って翳りを溶かし剥がし、二つは一つか一つでも無い辺りへ失せ、その失せから裏へ回って僅かに逃げ切れた、窪み脹らみの反り返り直った直りの放つ匂わない薫りで有る為に光りで有るしかないかな近過ぎる光りの真っ平らな向きが、向き削られ果てれば、その突き破られる向きは向こうからと異なる、それでも向こうからで、な向こうからの何処も無さばかりが有り窮まるかに、真っ平らな光りが匿う虚ろの操りを操り、いやそんな操りを操れる何が何処に有ろう、も、何処にも無さの内なら何の言い立てにも為らずに、その何処にも無さが何の操りをも操ってそうな、嬉しげな艶でも真っ平らな真ん中へ向けて回したそうなら、それらしさとも少しも係わりようも無さそうな、向こうからと異なると異なる、更に近過ぎて向こうからも向こうからでないも無い、その無さ過ぎて行き成りに向こうからの鋭さを弾

けさせるその煌めきを煌めきが磨り潰し、それとも磨り潰され、磨り潰しと磨
り潰されが磨り潰され合って、なんて筈も無さそうなら磨り潰されるって何が
何に？ってそれはもう、磨り潰された煌めきの後の事なら何が何に？さえ磨り
潰すのが、丸裸に取り残されたかな磨り潰され損ないの光りか影か、光りと影
にしてはきっと距たり過ぎてどちらでも有りそうな、それでも向こうからな向
きを一粒の骨の姿を象る芽のまだ生えてない根のような何処にも無さなら、向
こうからの向こうはすっかり何処にも無さでしか無いかに、丸裸の膚を剥いで
磨いたかにあからさまな、な、そんなそれ、なんてそれなんてそれを指し示せ
る筈など無くに、な、無くに、も近過ぎ過ぎて何の近過ぎも突き抜かれ弾かれ
膚を剥がされた丸裸を剥がせも出来なかろうに剥いで、に、剥ぐ程に何も剥げ
なくに匿い翳される丸裸で覆い隠される丸裸そっくりの匿い異なれないなら匿
い逸れて翳され損なう匿いが剥き出されれば、唯何を匿うのか、な匿いだけが、
翳されにも剥き出されにも叛いて、で翳されも剥き出されも鈍り退くその隙を、
光りも影をも抑え速くに独り占めする、圧し出されるばかりな円み異なってよ
う異なりを映し込む円み異なれない円みの映り込みかな鈍い艶めきにその姿を
隠そうとして却って晒し、と晒させるのは、匿いの姿を欲しい円みの映り込み
かな鈍い艶めきを遠巻きに縁取る淡い影に零れ落れた虚ろの滲ます暗みの薫り
に違いない、などと閃く何をかを匿いは、その晒した姿を惨めに頽れさせ異なり

らせ、その異ならせの陰に隠れるかにして、何をかを匿い異なる振りにその閃きを振り向ければ、それとも振り向けられたのかな疑いがその閃きも直ぐに追い越して走れば、円みの映り込みかな鈍い艶めきに乗り移り乗っ取り、匿う何をかををその艶めきとして晒すしか無くに匿い直し、か匿い直し損ない、か匿い異なり、と定め急ぐばかりに定め泥まされるのはもう自らの内へ滲み込んで除けない艶めきの鈍みに違いなかろうかな痛みを痛ませる痛ませに逆らえないからとは分かろうと分かる程に痛みは痛み異なり、な異なりが異なりな儘に、匿う何をかを、を蝕む蝕ませの間近な奥に潜む、虚ろの滲ます暗みの薫りかな何の異なりも斥ける らしい異なりとの距たりを、その距たりを突き抜くかに先走らせ脹らませ、脹らみ過ぎれば却って距たりは埋められ、な見紛いが匿い直し損なう何をかを、の切れ端と見紛う姿を追う向きを追わされる向きに向き直され、と丸き りか欺かれてるのも明らかなら、に、その明らかさが欺かれだろうと見通させられる、そう見通させたそんなそれが、向こうからから逸れたくて逸れ切れないかな辺りから辺りへ逃げて行く後ろ姿の淡い影さえ映しそうな、周りが明るく過ぎれば黒い艶さえ艶めかせて見える骨の一粒の二つに裂かれた片割れの恐らく黒過ぎて黒くさえなく唯煌めくばかりな裂け口が、映せるなら何でも映しその何をも追い詰めて毀したい望みに取り憑かれたかに脹らむだけ脹らみたげにその脹らみたげにを重苦しそうに脹らませて重苦しさも透けて行き

そうで、にしろ、な脹らめる処の測りようもない狭さに望みは抑え込まれるように苛まれ、な苛まれから望みごと食み出すかに脹らみを越えた脹らみが透けへの向きは棄てて濁りを追うかに脹らむなら、そんなのは脹らみじゃないとい う声にでも後なから脅されるように額れ傾れ込めるなは、どのようらか偏っていなければならなかろうにも偏れにに、な偏れ無さに向き直られ裏にかれるかに差し込まれる、そんな望みが果たして何の望みか、な望みへの疑切ら望みの無さの混じり合う、望みより更に狭さに抑え込まれた疼きか疼きで無いなら、そう疼かせたか疼きで無くさせたそんなそれの虚ろな中にふわりと一つ虚ろを拒む、骨の一粒のもう一つの片割れの姿の、疼きにも疼かせにも、で無くにも無くさせにも遅れた、その遅れの疼き損ないな振りに隠れた疼かせ損ないの疼かせ損ないの異なりこそが、匿う何をかを、の、その何をか、ではないのか、なそんなそれを見通させられる振りをさせられる、なさせられへ向くしかない向きの透けからの逃れられなさを異ならせて逃れ損なわせる、な損なわせに向きは向き鈍るばかりに重苦しげ振って鈍り向き、な向きの一つ限りで有り過ぎて必ず一つで無さ過ぎな、な無さ過ぎの先を尖らせれば何かの向きを必ず一つ限りで無くに取り戻せようか、と、もうすっかりそうしてよう後戻りも儘ならないり辺りに、必ず一つ限りで無くに、が、どちらへも、にしろ先へでしかなく、先を尖らせられるのなら何の向きも思いの儘と間違いなく思い違いとし知りなが

らに、その必ず一つ限りで無さを展べ拡げたがっていそうなら、それは一つ限りに墜ちるしか無く、にも、どう墜ちられようか思い描けも出来ず墜ちようも無いなら一つ限りな儘に一つ限りはあやふやに、何のあやふやさも残さずにあやふや窮まって窮まれる筈も無いなら窮まり挫け、一つ限りなあやふやは、その窮まり挫けに頽れ消えるかにあやふやさを残さない一つ限りに翳され、とはどっちへ？などっちへな向きなどその向きのでっち上げた偽りに決まってようかに、拒まれたあやふやさが一つ限りに伸し掛かり、一つ限りに歪むしかない一つ限りが果たして一つ限りかを一つ限りが疑い、疑い切れないあやふやさに拓けたかな途が分かれに分かれるしか無い分かれの一つ一つの鮮やかに際立つような細かさに刃向かわれるかに、細かさより細かい数知れなげな、その細かさが造り出す、斜めへとだけ数知れなげに延び競う円みの束の弱げな光りに照らされ、その照り返しが円みを悉く焼き尽くすようなら、円みは束を解いて円みの斜めへの延び競いも振り捨てた円みな姿を、その光りに焼かれる辺りから遠ざけるだけ遠ざけ、が遠ざけるどころか近寄せているに違いなくに自らを自らの光りで照らし直すかに輝きを遠ざける向きにだけ拡げて光りより明るげな声さえ上げられそうに、な一つ限りなら疑いも晴れようかに震え、骨の一粒の片割れと片割れの合わさろうとする様さえ、その震えに準えられよう、に、片割れと片割れは擂り合い削り合い混ざろうけれど、な程に震えは独り、な事を

抜け出せたかに透けへの向きを探り取り、それとも探り取りを震えに準え、そんな動きが震えが震えに叛くと知れる程に透けへの向きへの向きは細かく分かれ、分かれは砕かれ、砕かれは練り直されるかに透けから弾かれる、その弾かれの向きを破り捨てる弾かれの勢いに撥ねられる震えの震えへの叛きは、な撥ねられを向きなだけで向きに準え、準え鈍る鈍らせに向き合うなら、鈍らせは脅すように虚ろを覗かせ、その虚ろの内を舐め脹らませる、疼かせ損ない異なりの異なり窮まればその骸かな姿を透かさず頽れさせ、頽れ痕に塗り込められる明明と照らされる艶は零れ出るしかないにしろ、その向きを掴み取れずに狼狽える姿を自らの艶を走らせて匿う、な匿いこそ、何をかを匿いな何をかをな匿いの企みに違いない、かに見せ掛けての艶であり何をかを匿いでもあるなら、何をかを匿いの何をも匿え無さを艶が暴いたろうか、で、な暴いたかに、に必ず付け込んで来よう付け込みへの企みを企ませたかな、零れ出た切り匿い損なわれた艶の、艶を失った艶の痕の端くれの捻曲がって艶へ立ち戻れたかに振る舞う、そう振る舞えてなら艶に違いないと、透けへの向きへの向きへ、向きに立ち向かうかに艶の輝きを晒し、晒し鈍るだけ艶を艶から逃がして艶な、にしろ逃がす艶だけが内向きに縮む塊かに艶を閉ざして震えるだけでは艶に遅れる様を晒してるに過ぎなくて、なら先へ速まってよう艶の跡でも追えようかと、重苦しげな粘りを根深い辺りから沸き立たせ弓形に高く延び上がらせ、その反

り曲がる向きの先を向こうからの向きの向き鈍りへ直ぐにも刺し込める構えで尖り拡げ、な尖り拡げの平たく弛く向こうからの向きの向き鈍りを越えるかな俯きへの兆しを途切れさせなぞって途切れ損ない、な艶自らの動きの動いてなかったかな静けさを引き取ろうと、艶に遅れる内向きに縮む塊かな艶が周りに何も寄せ付けたくないかに頑なに徴かな煌めきを磨り減らしながら真上へ丸く波打つように塗るように立って、な塗るようになど許される筈も無かろうと塗るようにそのものが真っ先に分かれば分かり過ぎるかに頽れ窄んで真下へ崩れ砕け、それへ真上へ丸く波打つ塗るようにが迎え撃つようで逸れるしか無くに逸れるのも儘ならず磨り減って窪めば丸い波頭は爆ぜるように消えるしかない消え痕に湧くように滲み出す鈍り果てたようでも艶なら艶の幾筋かが互いに少しでも交わるのを嫌うかに弾け合ってもそこを動けず互いを切り裂き合うのか合わないのか、は、知れるのか知れないのか、知れるべきなのか知れるべきでないのか、にしろ、その何かの幾何かは知れるしか無くに、その知れるらしい辺りへ切り込まれ鈍って裂けるしかないその裂け口が、裂け口とは異なりたくて逃げて行く姿、それとも姿と見たいだけの望みを追うなら追えずに、それとの距たりに拉がれるばかりに裂けるしかない、なら裂け口の外だろうに、にも裂け口の裂けた裂け口の、裂け口とその裂け口の裂けた裂け口との距たりが、自らを切り分け損なって幾つもの尖った刃を並べるかな姿に叛きたいかに、窪

むのか窪みを裏返して脹らむのか、どちらでも有りたげで有り得ない痛みを解（ほぐ）し、痛みに遅れて疼いても疼きも損なう遣り切れなさでも転がすしかないかに、そのようにでも突き放されるかに転がろうかに円みを造り出そうと却って角張れば、その角張りは、裂け口とその裂け口の裂けた裂け口との距たりに隙なく突っ込まれて来るらしくにも少しも突っ込まれないと分かれば円みなど幾らでも造って撒き散らせそうかなと、な円みを先取りし、裂け口とその裂け口の裂けた裂け口との距たりは、裂け口を振り払い、距たりだけの身軽になれば失っただけの重みに圧し被られて裂け窮まり、振り払いようもないふっくらと柔らかそうに裂ける様など全て洗い流したかな裂け口を捩れ捩れ開け拡げ、な捩れ拡げと捩れ拡げの距たりを継ぎ接ぎしては、そのばらばらかな距たりを一連なりに真っ直ぐ刺し貫いて、な刺し貫きを棄てればまた身軽な距たりだけな筈が、或いは、にしろその距たりがその儘に裂け口で、にしろ距たりは、距たりな儘なら、な裂け口の姿は幾ら顧みてもその顧みられるその先に匿われ、とは何処に？とその何処にな辺りがつい尋ねて仕舞うならその辺りか、な辺りなど何処でも有りそうなら恰も何処にも無くに、な無くにからも遅れる無くにが自らを顧みる積りもりか裏など有り得よう筈も無かろうと裏向きに裏返ると、なので表を捻っただけかも知れずに、距たりな儘の裂け口の姿が何処にも無くにも無くす何をも傷付けそうな如何にも場違いかな酷い大きさで脹らむだけ脹ら

むなら脹らみ挫け、挫け固まって間違って高く掲げられるかなら、それを掲げて仕舞ったかも知れないなと間違えるそんなそれが、そんなそれで有り続けようとし損なうなら、に損ないながらもそんなそれで有り続けなければ済まなくさせる、それとの距たりを距たる距たりが距たりより遠い光りを滲ませ照らして来るようで、にしろ照らすのは遠い光りでは無いと直ぐに見分けられる、その見分けられた、つまり違う、遠くとは必ずずれた辺りから来る光りの、ぐるりと遠回りして何処へ行くかも怪しげな様なんて見てはいけなかったんだとそれを無かった事にしたいそんなそれは、きっともうそんなそれでも無いのかなと自らを貶めれば貶めるなりに、そんな有りもしない自らの端に貶めだけを縋り付かせてそんなそれで、にそんなそれで有り過ぎたかにそんなそれ異なって、なり異なりを玉のように撫で転がし翳したくても、距たりより遠い光りが違う光りに先を越された辺りを奪い返して何の玉の触（さわ）れる厚みをも必ず砕いて粉粉にし、な粉粉な触れる厚みは酷く歪んで入り組んでようと粉粉な連なりを繋げて決まった触れる厚みに違いなく、な違いなさを確かめたいかに触れる厚みはまた粉粉に砕け、と計れるかとも決まり極まった触れる厚みは見失われ、に見失われて却って決まり極まった触れる厚みは確かめられて触れる厚みを失い、な失った触れる厚みな変わらない触れる厚みで、距たりより遠い光りに刃向かおうと、その触れる厚みをその触れる厚みの中に玉のように隠し転がそう

としてるのは何、な、何を何と訝る何が何を何とも問えずに、な問えずにが触れる厚みを切り分け、隠し転がそうとされている訝る何とも訝られる何とも異なる、ならきっと何とも指し示せなかろうそんなそれに触ろうと試み、な試みも叶わないと直ぐに分かれば繰り返しそれを分かり直さなければならないかに、試みられない試みへの企みは、明明と玉かに脹れる様を直ぐに仰け反らせてそこに爆ぜ回り、回り尽きない儘に回り鈍る様を爆ぜ尽くした痕かに明明とも明明を通り過ぎれば微かな円みを刻み付けるように滑らせる傾きにしろ、斜めな向きを弾き拒む傾きが傾きに傾き逆らう、な逆らい傾きに凝り固まれば内から溶けようかとも予め溶け落ちてたかに凋み掛け硬過ぎて凋み切れずに逆らい傾き逆らい、に凝り固まり直し損なって潰れた虚ろを暗く濁らせ覗かせる歪んだ口を、斜めな向きに嫌嫌順うしか無さげに幾つか並べるなら並ぶ重みに潰れて斜めを斜めで無くなるまで鈍らせ、明明ともなく滑る円みだけはずっと手元近くに失われていた儘にも奪い返せたらしくに、円みは益益深く刻み付けられるようにぎざぎざと鋭く細かなのっぺり重く鈍（のろ）そうでも襞の連なりな揺るぎない姿を態とらしく晒すなら晒し、晒さないなら晒せないに違いなく、な晒せなさを晒すなら晒し異なるしか無くに、な異なりが、ぎざぎざと鋭く細かな襞の連なりな姿へ食い込むしか無かろうにどう食い込むのかも、どう食い込むのか異なり、に食い込まれては円みな筈も無さそうにも円み異なれないなら、

ぎざぎざも鋭く細かなも削り取られて唯襞の連なりが円みを蔑むかに真っ直ぐ斜めに圧し込まれるかに幅も厚みも揃えて下り、直ぐにその様が淡く掠れ消え掛けるかなら行き成り激しく僅かに向きを変え、上れる上りを上りと決めて掛かって上ろうとするなら円みはそこで自らを消し去るかに絶え、蔑みは替わりに何を蔑めるかに突き刺されなければ蔑みへの蔑みに磨り潰されるしか無かろうか、にしぶとく退き鈍り遅れてその遅れを振り立て過ぎれば蔑み遅れは襞の連なりから剥がれるしか無く、にも剥がれ遅れるなら潰れ果てた蔑みを継ぐ剥がれ遅れが、襞の連なりの奥まった辺りにずっと潜んでたかな見知らぬ円みを引き受けたいかに弓形への俯くばかりな兆しの、斜めを斜めで無くなるまで鈍らせた鈍らせのまだ斜めに下りたげな衰え振りの端より僅かに高い透け拡がる狭い隙に埋もれているのを、その透け拡がりを食い破つて掘り出そうと牙でも剥き損なったか、その剥がれ遅れこそ牙に食い破られたかに裂け掛け歪み弾け奮い立つ振りでうねるようなら、そのうねりに傾き窪んで、その窪みは見知らぬげな円みの底へと引いて行く水に映る窪みを真似るのか逆さな脹らみに沿いそびれて歪み、な窪みの歪みを剥がし遅らす遅れ渋りを剥がす剥がしが何を剥がしたか、に答えるかに、その痕の奥へ沈み滲む辺りの弓形への俯くばかりな兆しの片割れが剥き出され、にしろ痕にすればそんな剥き出しは惨めな傷口でしか無ければ、そんな醜さを塞ごうと周りから責め立てるように脹らみ、剥き

出しはすっかりその脹らみの肉付けに厚ぼったく縁取られて奥まり掛かり翳ってぼんやり濁って行くしか無くに傾くにしろ、な傾きが却ってその傷口の深みを鋭く明るませるに違いなくも兆しの片割れの姿がそれに埋もれて仕舞ってそうなら、な兆しに埋まってようか、にも兆しと兆しで弾け合い憎み合い溶け合うか照らし合うかにしろ兆し合うのは確かで、な確かさに白む兆しでは失せるしか無い兆しが丸く縁取られた狭い中を楽しげに回れば回っただけ傷口の剥き出されは痕の中へ深く埋もれよう兆しに呑まれ、その兆しを呑んだ兆しの如何にもそんな艶が傾き過ぎで沈み果てるのを押し戻し、な艶は艶にしては艶過ぎて声か薫りか声と薫りの混じり合う舌触りか味かにでも変わってそうに、舐めれば舌にぴたりと馴染んでずっと離れないかな、にしろやはり艶だろう、などと見誤っているに決まっていればもう、そんなうっかりしてる間に傷口は殆ど癒えたか細く捩れた浅い溝こそ僅かに痕の色は褪せて残ってようけれど後はのっぺりした姿の痕だけが痕で、何の痕かの覚えも失せ、と、それをそう失せさせたかは知れないけれどそれに付け入るかな、それより僅かに高い、にしろその高みはそれを高みにして仕舞うらしい、高みでないなら低みと見立てるしかない低みとは計り比べようも無くに、な比べられ無さの愈愈僅かな程にそれは何にも異なれず貫かれるしかない、のように、な儘から救い難く救い難い深みに自ら傷付く傷は傷付けず傷の中の虚ろを悉く刃のように曝け出し噴き溢れさ

せ、な溢れさせを虚ろな儘に――暴き、かな様も、それよりほんの僅かな高みなその独りによって自ら失せさせれば、な失せさせの傷など直ぐに裏返して痕も残さない、僅かな高みより僅かな姿に籠もる、高み異なる勢いのその高みに背いて反り返り尖り裂け、その尖っただけ散り散りにも繋がる裂け口を繋げ直し捲ればその繋げ痕ばかりを弾けさせ消し、消し暴いて晒し、な消し暴きに纏わり付く透けた光りの潰れ掛けの粒かな晒された薫り、いや始めから薫り異なりな透け光りな明るみが匿う暗みで粒かに潰れ掛ければ始めからそんな形（なり）をした見知らぬ円みが襞の連なり剥がれを救い難く深みを覗き仰け反るかに乞い慕い損なう、損ない連なりに描かれるなら描かれる襞の行方知れずかに延びて行く姿、描かれないなら行方知れずの手前で渦のほんの一欠片かに引き返し、己が身に真下に切れ込んで襞な姿へ落ち込むしかない襞の重み、な重みなど透け光りな明るみが匿う暗みに重なって直ぐに打ち消されようなら疼くようなな厚み、に触れてしか有り得ない、描くにしろ描かないにしろ、な触れる厚みを画くには画くしか無くに描き損ねて、損ね痕を隠す為かにその上に、触れる厚みを画き続けようにも画き鈍り過ぎ、な鈍り過ぎから食み出して画き尖り鈍っても、透け光りな明るみが匿う暗みに打ち消されようのない襞の重みに沿い随う色を匂わせたい、な、な色を匂わせたい匂う色の、色も匂いも自ら打ち消し、な失う何も無しなのかに独りに独り、透け光りな明るみを拒みながら匿

える限りな独りな姿を匿おうとする動き、その動きを先ず匿って上辺の何も無しかを晒し明るませる流れ、を導きたい色も匂いも知らなかろう独りな独りを独り匿う独りに独りを擦り抜けようとするそんなそれ、を、どのようにかそんなそれに、と、に、にそれをそんなそれにしようとするそんなそれが、そんなそれな独りを独りにし切れずに、その独りを独り匿うも独りに擦り抜けるも失い、失い果てるかにでも失い過ぎられないでは必ず何処にか失い残し晒す、その残し晒しをそんなそれと距てる距てこそそんなそれかと準えたい、な残し晒しを遡りたいかに圧し刺さって来る望みが掠める脇にでも透ける程に暗い身を添わせるようなら、準え損なうしかないそんなそれの独り置き去りにされる姿も浮かぼうかにも置き捨てられずにも、その置き捨てられなさを置き捨てられなくさせる、何の置き処もその置き処を拒む置き処に奪われ失せるしかない、いにも置き捨てられなくさせる、その激しくか微かにか知れなさ過ぎて必ず激しい限りに微かな、自ら失せたに違いない高みの高み痕に兆す自ら失せさせを失せさせて毀れ、毀れたからには失せようのないその独りの、その独りを独り自ら置き捨てるかに失せさせる、な失せさせを追わずには居られないかに、いやそれの何処が高みな筈が有ろう、高み痕な筈でも無かろう、低みなど始めから冷たく燃え已んだ儘に暗みの重みに黙らされて埋め尽くされてるようでは、な、むざむざ敗れ去った振りで滲み脹れ出張って来る低みへ、引き摺り込まれるか

に浸み降りるしかない高みでは、にも、な何処かしらの、にしろそこしか無くに知らず静かに薄く切り取られたかに、浸み降りる儘な高みか高み痕にしても高みと浮き上がらせるしか無くに高みを拒んで、とは低みをも拒んで、にしてもも高みと低みの隙を狙ってたかに酷く弛く真っ直ぐに僅かな傾きもさもあしらさまにこっそり退けてようかににみな儘に動かないかに流れるように、有かもしなかろう高みと低みをそれらしく有るかに分ける隙へ、それが望まれてたのを匂わせたそうに隙を脹らませ高かに向かい立って張り拡がり、それを為す術無く迎えるしかない残し晒しにし、その残し晒しな艶がの高みの向かい立ち張り拡がる向きに随って滑るだけはは、何が晒し残されたのか、と問えるのはそう問う晒し残されしか無かろうでは、晒し残されたそれは、そんなそれともな姿を現せず、と現させないのが、向かい立ち張り拡がるのを已めない、残し晒しな艶を溶けるように低くへ舐め続ける姿を装いながら、その仮の姿を恰も低みへ、低みを抉り削ぐかに尚も薄く拡がる、なそれの何が高みか知れなくても知れなさなど知れなくて高みなら高みが、な高みの虚ろなのを、高みの奥の高みの向きに透かし暴かれ何の高みも消し去らされれば、残し晒しな艶の恰も低みに重く身を沈めるしかないかに残し晒される姿が、もう高みでもない高みの虚ろに圧し被せられ艶はゆるゆると肌理の粗い膚のように硬く固めさせられ、高みでもない高みの虚ろを嫌うかに低くへ低みを匿えそうな、高みでもない高

みから逸れた脇でも探すかに脹らみながら、どちらへでも傾きたげに傾けずに、な傾けずに、が、その真っ直ぐさに引き摺られて望まない儘にも高みでもない高みの虚ろに却って突き刺さって行く、それともまるで行かないか、に突き刺さるのと何も変わらないかに何かはきっとまるで違おうに、高みでもない高みの虚ろを図らずも蹴散らす事など少しも要らない事かにさも蹴散らしてよう、に姿を現し直し、とは何の姿が？な、何の姿が？こそ予め蹴散らされてような、拡がる向きへは拡がらずに眺められる筈も無く眺められる眺めが、それともそれは眺めらなくて拡がらずに、な拡がらずに、が眺めさせる眺めなのか、に、眺めとは異なってようにも眺められる為の向きだけは残し、残し匿われ消されたかな、残し痕の生生しさを脅すように剥き出して残し痕な、真っ直ぐ立ち上がって艶とは見える筈も無い艶の、異なり眺められる為の向きに逆らいながら向き合い損ねて脇へ逸れたげな脹らみ、それとも窪み、真っ直ぐからは脹らみでも窪みでもなければいけなかろう、に、異なり眺められる為の向きを、拒めないながらにも艶を滑らすようにもつるりと蔑ろにし、艶を滑らすようになら艶は滑ってよう、な艶を裏表から挟み付けるのが脹らみと窪みの脹らみと窪みで有り続けようとする動きかはしかし、脹らみも窪みもをあやふやに窄ませ、な窄ませなど知った事では無かろうな異なり眺められる為の向きもまた、その向きの内に匿われていた異なり眺めさせの、向きには成れずに、なら飛び散る

ばかりかにも唯向き鈍り頽れ、な向き頽れ痕、それとも向き頽れ損なってその痕にも成れず損ない痕にも成り損ね、ならばと自らの向きに独り真向かいに逆らって向き異なる姿の、な姿に逆らって姿異なる異なりな姿の、連なるのか途切れ途切れなのかそれとも雲でも湧くようなのか雲を吹き散らすようなのか、まるでどれでもないぞと自らを裂きたくてもまるで裂けないなら、な儘に転げ、転げ已んで已み已んで、図らずもと図ったかに望んでも居ない高みに至り着けたかな、低みや重みを切り捨て僅かにでも確かに浮くように、浮くようにな儘に軽過ぎるのが災いするかに俯いて、まるで真下を真下と真下でだけは無くに頼るしか無かろうに、な真下を向いても真下は真下で無さそうな真下にしか見付からずに、な真下で無さそうな真下にしか見付からず痕が痕だけで真上へ波立つように拡がり逸れて俯きたくても俯けずに波を襲って波を呑んで消し已まない波ばかりかな姿でも痕が、その痕が痕を造り出すのか、ただ自らで転がるのか自らを先へ転がすのか、な痕の転げる姿がそれでも消され已まず波立つなら危う過ぎよう、と、な波を止めたか止める損ない、そのまた先へ転げる自らの姿だけを放り投げたに違いないようなら、その放り投げられた細かな穴を数え切れず開けられ穴ばかりかに淡く薄っぺらな姿は、それを放り投げさせた、高みを取り巻く虚ろを装う虚ろを装う重みを取り繕う拡がる引き波の輪の厚みに触れるしか無くに千切れそうで、千切れそうなら千切れて無くに千切れ拡がる

のとそっくりに震え拡がり、直ぐに拡がり過ぎて震え已んで、な已みが顧みればば、な顧みられの柔らかさが徒で輪に触れる厚みに巻き込まれ、断たれるようにも巻き込まれ千切れ、千切られ損なわれ、僅かに損なわれ残された重みを取り縒わなければ虚ろを装う虚ろのいかがわしさに吹き飛ばされるに違いなくに俯き振れ、な振れの確かさに縋り付くかに輪に触れる厚みを真似るかな形（なり）を後退らせ、それは柔らか過ぎる弓形のぐにゃりと重みの狭い穴に吸い落とされるかで、な重みの狭い穴が、そのぐにゃりな形（なり）を呑み込んで全く呑み足らず、にしろその形（なり）が一つ切りとも分かってるなら穴自らがぐにゃりな形（なり）を、尚も高みかないかがわしさに留まる虚ろを装う虚ろに映し出し損ね、にしろ損ね映し出された形（なり）に寄り添う振りで呑もうとして呑めたか呑めなかったか、呑み鈍るばかりな形（なり）に押し込められ、と自らに自らが押し込められたところで却って自らを自らへ弾き散らすばかりかに透け、とは何が?透ける自らなんて透けっ放しで取り返しも付かなかろう、に、何が？から逸れようと形（なり）はもう何の形（なり）も取り戻せず、その透けさえ行方知れずで、にも透けだけなら透けでしか無かろう、とただ透けるばかりを一処に纏めてその外の闇から守るように閉ざす大きな輪が遠巻きに横たわり拡がり続け、拡がり続ける程に輪は小さく窄むのを楽しむかに高みらしき向きへ震え昇る姿を晒して高みを映すかに艶めくなら、その内深くに匿う

らしい重みの狭い穴へ丸まり縮んで縮み果てれば裏返ろうか、それとも疾っくに裏返り果てたかに真っ直ぐに、真っ直ぐらしい向きへ進んで直ぐに進み已んで、重みの狭い穴は何処へか裏返ってようかに、ただその穴の真ん中だけが有って、穴の真ん中だけが有って穴は姿の無い、そんなそれの触れる厚みを確かめようなんてしてはいけなかったんだ、にも触れさせられて仕舞うその触れさせからなら逸れられようか、と却って触れる厚みを間近に知らされ、にしろ知らされるのはその知れなさの頑なさでしか無かろうに、な、無かろうにの重みの触れる厚みが、真っ直ぐを曲げる弓形に俯く向きへ反り上がって高みを掠る勢いで高みに弾かれ縮んで柔らかげに砕かれ、な柔らかげな痕だけが痕を残す、その痕を細くくねくねと走る曲げられた真っ直ぐな艶に逆らうような艶が、艶に逆らう程に厚くその逆らいを塗り重ねて厚みを増し、厚みは固まって罅割れ掛けるのを艶に逆らうような艶の柔らかみで何とか傷みを傷みの儘に繋ぎ止めている、な形（なり）が、透けも透けずもせず、形（なり）だけで漂い鈍って鈍り已むしか無さげに触れる厚みを帯びたげなら、その已んだ形（なり）を毀しに来る、明るみな限りな明るみの、内深くに暗みな限りの暗みを匿う振りも痩せて痛痛しげに余所余所しい程に浮き浮きと楽しげに、縦向きに重なり繰り出される鋭い刃のような薄い輪の細く描かれて尽きないなら波打つ姿に準えてようか、にも準え損なうのか、唯薄っぺらな明るみだけが数知れず弾け溢れる

かに互いに距たり尽きれば距たり鈍ってその重みに歪んで潰れ急いでは、歪み潰れ急ぎが厚ぼったい口を開ける中が覗かれ、覗かれただけ必ず距たりが測られ、距たりなど測られる筈は無かろうにと冷たく覗かれ直され測り直され、直され偏れば、な凍るような偏りを弄ぶかな傷が傷を傷付けてだけ傷な傷の他の何にも触れられない傷の硬く尖り裂けて弓形を一一捥ぎ取って弓形で無くなるまで反り返らせ距たらせ、の距たらせとは何と何の？と斬り込む尖り裂けの顧みては明るみの晒される距たりの距たらせが笑うように繋がり合って匿う、な何を匿うかの何をかを匿うしか無くに、な無くにもまた明るみ晒されるしか無くに、な無くにな向きを探るしか無かろうに、向きなど向けよう筈も無くに何をかを匿う匿いを擦り切らせようにも激しく切らせ偏って擦り切らせ損なえば、な損ないの激しさが透かし見せる透けの薄い限りな薄さを透ける明るみが匿う暗みが自らを暴くかに滲み膨らみ、浮き出た玉のほんの砕け始めかに穢らわしげに厚みを翳し誇り、へ何がとも無く触れようとする馴れ馴れしさの余所余所しさの、その隙に隙なく次次に差し挟まれる傷一つ無い浮く玉のような距たりが犇めいて互いを磨り減らし距たり尽きようなら、その尽き痕と距てられる何も無かろうと真っ先にその尽き痕へ自らを擦り込ませる明るみそれとも暗み、のどちらでも無いのを始めから織り込んで湿っぽく誇らかな、な何をかを匿って匿い損ない、損ない翳されるしかない何をかを匿いが匿う何をかをが匿い直

され尖って尖り切れずに、な穢げな音でも響かせ籠もらせるかに激しく鈍れば、な鈍りの重みが重みを匿うかに淡く丸丸と毳立つかな光りを纏う姿は、そんなながらにも玉とは似ても似つかないなら見覚えも有ろうか、な、まるで見知らぬ為にはすっかり見知って居なければならなかった見知らぬ見覚えの覚束なさの刺すような凍るような確かさに痛みが付きものなら、痛みが痛みを痛んで傷み磨り減るかに、な磨り減り擬きな艶を滑り出て艶をさも痛そうに滑り出させようかと透けが危うげな軽みを伴い斜めへ反るように走り、走り鈍って透けに透けが裏返され掛かる斜めへざらざらと突き刺さって反りを反り返す向きに刺さり重なる、な透けを濁らせる鬟がずれながら細切れの痛みを繰り返し堪えるかに脹らみ、その厚みの増す程に透けが砕け拡がり去る向きが、その向きを拒む向きに抗えば抗うだけ、傷みを晒す透けを濁らせる鬟の脹らみは厚みを失う替わりに弓形に俯く円みを重ね合わせて重なり合う毎に円みは円み尖っても円み異なれずに、な円み異なれない円みの限り限りまで内向きな姿の一つ一つが斜め上へとずれたそうにしながら、穴を待ち望んでるかな鬟の脹らみに穴を開けて行く、にも透けを振り切れなければ穴な筈は無くに、な穴で、な穴な筈の無い穴では潰れる振りをするしか無かろうかに、鬟の脹らみに数知れなげに開けられたなら穴なら穴にも拘わらず穴で穴を薄っすら穴埋めしたかな狭い窪みでびっしり覆われた鬟の上っ面に、潰れる振りな儘の傾きでも捻るのか巻き付

くように纏わり付き、もう潰れてようにその遅さを遅れ直して錐揉むかに穴を開け直す振りなら振りでも穴を開け直してそうに、にもそれも潰れそうに、にも遅れを躱して潰れる間際かに突き抜けられ、な突き抜けられもその歪む形（なり）の粘るように透けた鬢を並べ重ね直し、にもその並べ重ねられる向きの端では先走るように鬢は辛うじて一繋がりな限り限りまで引き延ばされ、微かに鬢の影は引けそうでもその影を震わせられなければ唯のっぺりとした淡い限りに淡い色を滲ませる狭く浅い窪み、それとも淡く滲む色を映すだけの僅かな円みに匿われた、磨り減って丸い丸と角の取れて行くのに抗って歪みたげにも丸いばかりな骨の一欠片そっくりの透けの上っ面に走る細長く円みを帯びて直ぐ脇の闇に零れ落ちそうな色も無く冷たげな艶の、鬢を真似る戯れかで、と、な戯れかが、戯れかに遅れる戯れかで無いなら艶も無かろうな何をも失ったかな骨でも無い、しかし骨でさえ無いなら他の何かでも有り得ようも無い、一欠片の小さな上っ面に流れる、疼き遅れて染みを滲ませても何処でも無い辺りから高みを映し掠め取って、高みとの距たりを走る高みとの距たりとの埋められない痛みのように細く直ぐにも消えたそうに尖らせた一筋の明るみの影の、内向きに丸まるのに随う姿を描きたそうに描き損ない、にも明るみばかりは丸まって戯れかに遅れた遅れを取り戻せようからには失った何をかも知れて知れた辺りからそれを掘り出せそうな勢いを翳す、それでも戯れかで無い、を顧みるなら、

何が顧みられるも無かろう、な無かろうが顧みる先か後か知れない、その知れなさに圧し被られれば唸るようにも低みな様を剥き出そう、な、低みな様をそんな様に剥き出させる、な様へ傾れ落ちるように差し込まれ、その差し込まれの確かさに囚われたくて剥き出させを明るませる、に明るませられた剥き出させを低みな様の奥に沈め匿わせたそうに、明るませの内の透けの重さを測り測り、測るばかりでは測れてるか確かめられずまるで測り損ねてないか、な焦りを何処へ擦り付けようか、な泥のような焦りの透け紛いの重さ紛いに明るませの透けを濁らされ、な事では沈め匿わせようにも何処へか定まらない、その定まらない向きに貫かれて明るませられた低みな様の剥き出させの低みな様が高くに翳されるようでは剥き出させは剥き出させの覆い隠させへするりと裏返ろう か、にも明るませられがその明るませた明るみへ捩れ戻るかに明るみの内に匿われた暗みを透かし流し晒し去らせ、に暗みを去らせた明るみへの捩れ戻しを捩れ戻させた裏返りの向きを向けない向きが、それをそう裏返した向きから逸れて向き異なりたげに暗みに追い縋って向きの向けなさを溶かすかして、向きが向きを向き表すかな兆しに逃げ込み損ね、に損ね逃げ込まれた兆しを匿おうかとも既に知らず匿ってるなら、明るみを明るませた明るませを探し流れ果て、果て痕の果てなさを断つ暗みの向きへ刺さろうと焦るかな明るみの一欠片な影の脹らみ、それとも窪み、な脹らみと窪みが刺し違えるかな、影に匿われ

ていたせいで影よりすっかり影な、に影とは異なり劣り疼いて刺刺しい穢れを弾き晒し、影より影な、な儘に影とは異なり劣るその薫りを刃のように振り翳す、なそれな様で、明るみを明るませた明るませを探し流れ果てる替わりに吐き出させよう、と、異なり果てて影もない筈の向きの向けなさを向けなさ直す積もりか先ずその影を手繰り寄せる、その手付きの穢れ果てた様に襲われ、（二〇二二年三月十一日）

（な向けない向きの…）

　な向けない向きの、と異なろうとする、それとも、異なろうとする重たげな振りに軽みを添えられないかと、に速まろうとする企みに、な企みを企ませた重みなら重みの、明るみなら必ず丸まるしかない明るみに甦らされた透けへの遅れが戯れに戯れかを滑り込ませるかに翳そう、その姿を姿が顧みるばかりでは姿とも顧みられず剥き晒され軽いなら縦に淡く窪んで、隠されていた斜めから入り込む曲がった横風にでも向きを変えられたげに濁る影の色を、滲ませ落とし落ちる儘に去らせ残し、残し去らせ続きに明るみを明るませた明るませを

継ぎたげに円み拡がり尖るなら、浅みを含んで浅みに溶け向かってように、に叛くかに薄い限りになら薄かろう窪みの内深くに窄み艶めく透けが、襲い来ては来逸りに抛られるかに来鈍る儘な、に穢れ果ての果て抛られ来る儘では穢れ果て紛いな姿に自ら身を焦がし、潜める匂いを緊く縮めるしかなかろうかに、縮まる程に薄い流れ已まないかな姿の刃を渦巻かせる輪の姿がふとした弾みかに欠ける処なく切り開かれ、丸丸明るみの平たさの下に古臭そうに見渡され、な姿を振り回し、匂い潜めの狭苦しさを易易と、な輪の姿さえ透かし消し掛ける薄さの拡がりへ距たり放たれ、とは何にへの距たり放たれだったろう、などと顧みられる向きも透かされ去らさせられたかに影も無さそうなら、な無さそうに距たり放たれは独り取り巻かれ、に取り巻くのは拡がりの薄さを欲深げに吸い取ったかな色色な色のさざめくような何処かしら荒っぽく荒っぽさを暈けた光りの滲みかに穏やかに隠して騒がしいかな闇を混ぜ返すかな集まりに違いなく、な色が何の色にも現れない現れなさを撤き散らせば、に撤き散らされるのは色でも無しな重みでしかなさそうで、でしかなさそうなら、な重みでしか無くに、な姿を自ら薄ませようと手近な脹らみの陰の窪みにでも頼ろうかにも頼れず捩れる、そんな色なら色、色で無いなら色で無かろう、に色とは異なるのをさも明らかかに振る舞う、な異なりなら異なりな儘に易易と何の色も拡げ回し避けられないかに現し、現し尽くせば色の色なのも尽きた尽き痕にしろ、な

色の尽き痕だなんて水の流れに書いたような言い草を嘲笑う、色を滲ませた痕の痕かも知れなげな徴が煩く群がってそうな、な距たりだろうか、何にへの距たりも無くに、に距たる限りには距たり異なる、な異なりを異ならせる徴を見付けられなくて嫌でも見付けたい距たりからの遅れが、先ずはその遅れの姿を掴み取りたかろうかに後退り、な後退りから眺められる眺めへ滑り込み損なうなら突き当たるしかない損ない先には、先など緊く匂うように無いとだけは予め知らされてよう、と知れるしか無くに、なる事では遅れは何からの遅れだったのか、な遅れより遅れるしかない訝りが、距たる限りには距たり異なる異なりとの距たりを向き損なえば、距たりだけが距たり異なりから引き剥がされ浮けば沈み努め沈む儘に浮き試され、何の何への距たりも擦り切れ唯裸にされ捉え処の無い距たり異なれなくてだけ距たりなら異なりへの距たりかも知れなくにも、な距たりなど有りそうも無くに独り尚も浮けば沈み沈む儘に浮き逸るなら、浮き沈みさえまやかしなそんなそれで、いや、なそんななのはそれにしろ、そのそれがどのそれかは有るか無いかも有る無しとは異なるかも知れなかろう、と、な知れなさを準える徴がゆっくりと艶を吐いたか、な知れなさに伸し掛かるような隠れた儘に末広がりな薄くて透ける脹らみの陰が鋭く晒されれば、な鋭さの晒されに誘き出されるかな脹らみの陰を少しも見せない限りになら脹らみの陰でしかない重みの透けなさを傾れ込ませ、と何が傾れ込ませたのかへそ

れへの知れなさが誘き出されるしか無くに切り刻まれたろうか、姿も無さそうなら、な無さそうな限りにならその姿を傾れ込ませに晒し捲り、な姿など見る間に擦り切れよう、な見る間など有る筈も無くに何も見てないと知れれば何も見てないのを見るしか無くに、にも、を見失うしか無いなら、な見失いだけは何の傷も負えよう筈も無さそうに傷の色ばかりを滑るように纏うかにその生生し過ぎて耐え難げに危うい姿を翳し、な姿に翳されて裏向きな影を微かにも湧き立たせ、影の奥の暗みを騒がしくも濃く脹らませられるだけ脹らませて影を後ろへばかり裏向きの裏向きに幾重にも裂くようでも影はその幾重な儘に手前へと繋がり、その繋がりの重みだけで弛めば弛みの内の翳りが、影の奥の暗みの虚ろさを独り唯静か過ぎる見窄らしさを鮮やかに弾けさせる様に暴き、暴かれた暗みが静か過ぎる様な虚ろを貫くなら虚ろは粘粘と脹らみの陰へと盛（さか）り立ちたげに揺れ惑うかな艶を艶めかせ損なうのか、艶とも粘りとも違う虚ろの酷く内向きな粗い軽みが真下へ曲がり込んで流れ去る去り痕に、予め匿われていたに違いない殆ど腐り掛けても艶は艶な艶を怖ず怖ずと艶めかせる窪みが危うげに窪んで、どうやら窪む儘では窪みでは居られないらしいならと窪み異なろうと重みでも軽みでも構わず粘粘と纏わり付かせる捩回るような動きに、窪みの姿は自ら捩れ窄んで重みと軽みを入れ違いに巻き込む渦でも巻き始めるかに窪みでも無くなりそうなら窪み異なりは諦めるしか無くにも、諦めら

れた窪み異なりへの距たりに鳴くように細い弓形の痛みを架け渡せたなら諦めも覆せようかと勇んで艶に痛みの周りを弓形に沿って回らせようにも、な艶は失われたか、弓形よりか細くにも失われ損なったなら艶擬きに艶とは違う様で独りざらりと転がされてようか、にもその重みに似た鈍みが弓形の形(なり)を幾らかは歪ませ、な歪みが僅かにも明るむなら、痛みの弓形は始めから見誤りで、行って戻りそびれる儘に戻りそびれから逸れ損なって回り込もうとする傾きの脹らみの陰が弓形への見誤りを導いたかな形(なり)で、にしろ僅かな明るみが、な形(なり)をも潰し、潰され痕の唯明るみの歪みだけが捩れ巡って、歪みの巡り捩られて穿たれ圧し出されたらしい穴を歪みなど無く丸丸と凹む様を輝かせて覗かせ、にも輝きのせいか穴は少しも覗けないなら穴かも怪しく、な穴こそその危うさに落ち込んで危うさに嵌まってそうで圧し出されて仕舞うのかな穴の暗みと暗みを囲む腫れて戯れに色めくかな重みに穴は埋まった、な形(なり)の穴なら穴な穴が穴を覗くなら穴は穴へ落ち、穴に落ちた穴と穴を落とした穴が諍いを避けるかに背き合えば穴と穴が引き剥がされるかに押し拡げられるしかない穴の外が押し拡げに叛いて狭く走り、な穴の外の隙間がゆるゆると長く眠っていたような翼が拡げられて行くように二つそれぞれの向きに奥へと拡がるなら拡がる奥と奥とが何処かで一つに落ち合おう兆しも見え隠れはするけれど、な兆しを吸い取る、二つの奥を必ず行き違わせて元に戻させ

ない、穴を落とした穴の底から粘っこく洩れ出たらしい先走るかに濃い兆しが、穴の外の隙間を詰まらせて二つの穴まで呑み込むようで、にしろ兆しなだけで何を呑み込めようか、と、そんな兆しの腹でも割きたげな、また違う、兆しにしては硬過ぎて兆しが兆しを食うようなそれでも兆しが翼の二つの奥に一つ兆してどの兆しも何の兆しでも無くそうと企むようなら、に、な何の兆しも兆さない替わりに、で兆しも穴も何も無くなる兆しが兆しそうな中にか、拡がる奥と奥とが疾っくにそれとも始めから繋がるまでもない一つだったかな徴が、奥と奥との奥それとも何の奥の外かも知れない内も外も知らない辺りに有り有りと象られ、と何処にも何処へとも象られていないかな、な象られって何だっけ、な象られが触れようとされるしか無くに象られ歪めば、徴は自ら隠れ去るように失せ、それは唯象られの歪みでしか無くなって真ん中に空っぽな穴でも開けたように熱く盛（さか）って自らその歪みを象り重ねるかに喘ぐように上を向きたげに震えるようで、にしろ穴も開いてなければ震えてもないなと直ぐに見直されるしかなく、なそれに、きっとそれは熱いだろうと触れようとそれとの距たりを傾げ、な傾げに距たりを預け、その距たりを熱げに裂いて塞がる裂け目に肖って距たり丸め、な丸みを弾けば触れようとせずにも触れられようか、な見立てなど自ら呑み込んで脹れ偏る水の独りでに盛り上がるような勢いに一息に煽られては、丸く落ち窪んで来る一塊の重みを落ち窪む儘に受け容れるし

かない落ち窪みを跳ね返せるに違いないと逸り立つ、な逸り立つそれって何だろう、きっとそれは何時かから知れてた筈とそれがそれを顧みるしか無くなって仕舞うなら、空っぽな丸い穴が穴の儘でしか無くにしか開いてないのが酷く危うげにも水とそっくり同じ重さに収まって水そっくりなら危うげとは距たれる限りに距たってられようかと水より静かに定まる様が、それ独りが穴の外へ投げ出され見棄てられたのを怯えるように固まっては怯えを怯え直さずには済まなげに固まり直しては溶け逸って柔らかく浮き上がりそうに流れ消えたがってよう、な消えたがりがそっくりそれと逆さに身を濃く縮めながら重く後ろへ、後ろの手前辺りの下を有りもしない上へ撥ね上げそうにもずり落ち懸かり、身の底を抉り滑って丸くその身を返して抛り延び尖り脹れ損ね窮まりに窮まり鈍って苦し紛れかに波立ち、な波立ちの逆さな消えたがりが、その逆さも逆さでないも呑み込み沸き立ち已む已み際に、象られの歪みへ逆さに前向きに傾れ込む儘に浸み通り破られ流れ、破られ流れを抛り処に重みを孕もうか、歪みをその儘に歪みで無くして象られ直された、その象られの、穴など一つも開いてないのにさも通り抜けられような疾っくに何でも通り抜けさせた汚れた色を滲ませる数知れなげに穴ばかりかな破られ果てた淡い影かな薄さそれとも厚さ、それとも薄さも厚さも重みに隠し、な隠す様に触れさせようと誘う徴の厚み、な厚みなら薄みを孕めるだけ孕んでよう、な暗い薫りを揺蕩わせてその暗さを突

き抜けさせずには措かない、なを暗みと厚みを絢い交ぜさせるその徴の厚み、と
徴は厚みへ厚みは徴へと行き来を繰り返そうならゆるゆると重みを積み上げ、
厚みに孕まれる中で重ねられてよう薄みと薄みの数え切れなげなずれを貫く透
けを繋ぐ艶を、暗い薫りに匿い匿い、隠された裏へでも流し去らせる、な隠さ
れた裏こそ際立って有りもしない儘に有りもしない硬さで柔らかな皮を剥がれ
るかに丸丸と瑞瑞しい惨めな姿を真っ先に晒しても、な晒しの有りもしなさに
苛まれに透ける、その真っ直ぐが飽くまでも儚げを隈無く染み渡らせた縦に二つ
に裂ける兆しを塞ぐのが、重みなら疾っくに重みは内を軽軽とより易易と軽み
に占められ、軽みが重みの何処をも均しくさらりと間違いなく酷く微かに食い
破るなら重みこそ始めから軽みか、な軽みを裏返された重みと見せたい重みが
軽みに追い縋って却って重みの有りもしなさに細か過ぎる影の欠片かに粉粉に
散り果てようとも、散り果てる儘に細か過ぎる影の欠片かにが幸いして重く一
つに固まろうかにも一塊に弾き飛ばされ、と、な弾き飛ばしが重みを引き継い
で透けるようにふわりと爆ぜ、とは何処でどう爆ぜたのか、それを酷く遠くに
しか測れないらしいのは顧みようのない何処かで産まれたばかりの身でも幼さ
の愚かさで誤ったに違いないからで取り返しも付かないと悔いる産まれる前ま
で戻れたかな真新しい悔いが、重みを失い軽みで居られるかを危ぶむ軽み、そ
れとももう軽みでも無いなら酷く遠くの酷く遠くでさえない、な無さに侵され、

な侵されに侵させて侵される悔いる姿を、その真新しさを更に遡って繰り返す
ように延べ拡げたい、と拡げるより先に自ずと拡がったり取り取りの厚みと向き
を幾重にも重ねてじっとり湿って柔らかそうな鬟ののろのろとそれぞれにそれ
ぞれからずれながらに延べられる様が、な様と様とで背いては侵し合う幾つか
の様を重ねては剥がし損ねて様の重なりを怖ず怖ずと歪め縮め、な歪め縮めの
棘棘と争うようにぼんやりとした已まなさが重なる様を溶かし偏らせれば、重
なる様と重なる様は互いに互いから嫌嫌沈まされるかに遅れに遅れ、な痛そう
に幾つかの濡れるように僅かに距たり合う遅れが、重なる様の内に温い息でも
血のように潜めてそうに押し詰められた鬟を、斜めに嵌め殺しの反り脹らむよ
うに映し並べ、並べ解（ほぐ）し、にも解され切れず鬟はぐりぐりと血のよう
な息を激しく吐くように弱そうに重なり合わずには居られなさそうなのを、映
し直しては奮い立たせ、にしろ鬟の殆どは、な映し直しを尖り鈍ってはしぶと
く嫌って暗くぼやけた隅を向きたげに纏まって逃げて行くようなのを歪め縮め
直させようとする、映し直しを映し直させた円み、いや、円みでだけは無いか
らには円みからしか始まらないのから逃れようと円み異なろうにも異なれない、
な異なれなさが帯びて仕舞う何処にも僅かにも円みらしさを見せない円みの欠
片、いやそれこそまるで違おう、円みか円み異なれるか異なれないかも知れな
くても欠片でだけは無い、欠片でだけは無いならそれだけで延び切って延び切

り已まず延び切り鈍るのさえ儘ならずに、なそれからその已まなさの向こうへ香しい獣の穴かにつるりと呑まれるように逃れたそうに却ってそれへと向き返してはその向き返しをそれの延び切り已まなさへ映し込み損ない傷んでそんなそれでも無くなり、な微かな香しさの色付きでも獣の目で見て取りたくなる無くなり痕を撫で回そうにも、そんなそれでも無くなってさえ欠片でだけは無さに付き纏われてはその痕の向こうまで傾き滑る自らの構えに呑まれる姿の延び切り已まなさの重みで撫で回せる辺りを撫で回し鈍れば、な鈍みを軽みへと切り刻み、な切り刻みが切り刻みを切り刻むしか無くに自らの構えに呑まれた姿は吐き出されずには居られずにも、それでも欠片でだけは無さが切り刻みの切り刻みを貫くなら呑まれた姿は吐き出されを堪えるように固まるように歪んで歪み切れずに貫かれも吐き出されもされないならされないだけの事で、なされないだけの事にそれ一つに匿われて欠片でだけは無いから逃れ息を潜め穢れ、な潜め穢れに一つ身を隠すそんなそれならそんなそれはそんなそれにそんなそれの姿を抛り晒し、晒し已まずにその姿は磨り減り失せれば、失せ痕は、上を向いて反り返る小さな丸い鏡かな自らの欠けようの無い円みを誇ってそうな穢れた艶の欠片に見窄らしく被われ、何の失せ痕でも無い姿を抛り晒せば何が磨り減り失せたかもすっかり忘れられるしか無くに、と忘れられるしか無くさせた無くさせが忘れられから少しの狂いも無く測られたかに光りが何処を通り抜

狂徴にしだるてて過えにのにろっけ距け
いももたけのも狂ぎてもの縋見てらたて
の溶、全が隙狂いて置狂っっ棄見れりも
全かそて狂をっもはきうぺてて棄已の光
てさんはっ突て狂、換先り狂らてま他り
をれな何てく無わ狂えかといれてなにで
被る兆処なよくせい過らしのてはいは有
うししもいうもらのぎ傾た無は丸距何り
狂かもがとに無れ無、き後さ忘丸たも果
うな徴狂知突さもさなそろにれとり無て
もくもおれかそしは事う姿示ら掻をさる
狂に一しれれうな置でなをされき舐がよ
わ要つくばたにさき置狂嗤れは出め距う
ならも均、隙、そ換きいいた忘し尖たに
いな見しその狂うえ換の送られ、っりぴ
もい当くう薄いににえ無っしらなてをた
知、た狂知皮と狂塞ださていれ丸忘傷り
ら一らおらを狂いがけが狂香で丸れ付と
なつなしせ剥い直れが、いしもならけ距
さ限いげたぐのし狂狂なのげ無儘れ已た
そり、を狂よ無、いい狂無なくにをまり
うのな断いうさにののわさ向な丸何ず、
な狂見ちとにのし無無せをきっ丸もにな
拡い当切狂さ間ろささら危へてそ無も距
がかたっいらをそをにれう延唯っさ、た
りならてのり無ん失置をくび掻くか独り
が小な狂無とさなうき狂狂てきりらりが
、ささっさ抜の狂し換いわ行出を救狂剥
始いこてをけ隙いかえのせくさ掘っいき
め限そる全出に直無ら無てしれりての出
かり何にてて隠しくれさよかた出そ無し
らにの違集独さでにてへう無丸しうさ翳
頽小兆いめりれはも仕置かい丸、にはす
れさしな溶自た狂改舞きな、なにも傷、
墜いもくから有っめい換今そ様し却付な

ちて行きそうに傾いて居ようとも頽れられる高さとも墜ちて行ける低さとも係われず、な様を嘆くかな酷く濃い艶をせめて幾らか傾かせ、な傾きの狂い無さに艶の濃さを流し込もうかな小さい限りに小さいより小さい小ささを確り掴み取ってよう弛い限りに弛い脹らみの陰の翳りを映し出すようなら、を映し出した傾きも弛い限りに弛い弓形を描き出して濃い艶を拒もうにも艶は弓形に浸み通った狂い無さを浸み通りの底を舐めるように誇るようで、な弓形に映し込まれる何処か近過ぎるせいで酷く遠い同じ弓形でも艶を拒んでくるりと回るようにくるりを嗤うようにざらりと狭い震える透けが、震えを磨いて違う艶を出そうと励んでそうでも僅かにも違う艶も弓形に浸み通った艶の狂い無さが粘っこく許さないようで、に、透けは濁ろうか、と微かにも濁れば透けは透けより透けて透けでも無くに、透けでも無いなら何なのかなと透けが透けを顧みてだけ透けに予めぬるりと彫り込まれてたかに何処か直ぐ脇から映し撮られる、ずれながら重なり、重なりを嫌って捻曲がってはずれ損なう襞の、数知れずの数を溶かし破る程の数でも無さを殖やし噴き上げ続ける様様に変わり続ける艶の、差しても来ない何の光りも光りの儘なのを嫌って暗く墜ちて行こうとばかりにこれ見よがしに翳される様のずれ重なりが、にも、なずれ重なる様をずれさせ重ならせて自らの姿を現そうとするらしいそんなそれが、直ぐ脇とは異なる酷く見定め難いと見定め易い空っぽな脇に空っぽに溶けたように潜んで居たらし

くに、それであるより先にそんなそれを拒んで拒み鈍って、な鈍りを拒もうとせめて拒み偏るしかない有りもしないかも知れないそんなそれの姿を晒そうと掴み出そうにも、な望みも自ら拒んで拒み鈍りもせず拒み偏る偏りに凭り掛かり、なそんなそれでしか無い儘にどんな動きも孕んでように、な孕むならうっかり孕むばかりかに孕み過ぎなせいか身動ぎ一つ儘ならない、な姿な限りには姿でも姿がまるで姿で無いかな兆しに覆い被さられ姿を消さされて有り有りとそんなそれは、全くそんなそれでしか無くにそんなそれなら、そんなそれの狂い無さの狂いの儘かに闇雲に放たれる輝きを透けの透けでも無くにずれ重なる鬘に虚しく戯れに襲い掛かる振りで浴びせ懸けようけれど、で、な鬘は鬘な儘の姿を却って晒しながらに姿ばかりの鬘でもない鬘に磨き均され、に、な鬘な姿な限りな控えめな輝きを籠もらせて狂い無さの輝きに僅かでも抗うようでもどうなのか、まるでそうでも無さそうなら恐らくは、どちらかの輝きそれともどちらの輝きさえも輝きとはまるで違う事らしくに、さも思い掛けずふわりと行き成りひっそり自らを塞いで輝きに準えられる仮の姿を放り棄てるかに小出しにして遣り過ごそうとしてそうな、な何から遣り過ごすのかな、と、そう遣り過ごさせようとさせる何かがその何かを、虚ろな穴を見付けた中に疾っくに行き着いて凝っとしてたみたいに訝るなら、な訝りに巻き込まれて行くようでは、どちらの輝きも少しも何も遣り過ごせずに、に、どちらもはどちらもで有

りながらどちらとも無くなりそうに輝きとはまるで違うらしくに澄んだ水のように粘粘とそれっ切りな係わりに泥むしか無くに行きずりに即かず離れずかに、遣り過ごそうとされる何かに圧し被せられそうに窪み損ない、それとも窪んでも窪むのから逃れようと窪み損ないたい、のなら輝きと粘粘とを取り混ぜて脹らもうかな虚しげな勢いは、輝きとは違うらしさの上っ面に塗られた艶のようなら円みそれとも円みのような艶それとも円みでも艶でも無くにな円みと艶との背き合いを、輝きを映す雫のように流し去らせようとして流せたか、な流せたかな痕へ傾れ込む勢いだけの勢い擬きだけで、傾れ込みは窪むのか脹らむのか、窪み損ないと脹らみ損ないの損ない重なりなども怠るように厚かましくも紛れ込もうか、な、痕にしてはその様を揺らがせる痕に囚われ引き摺られ、にもようその痕を躱し、輝きとは違うらしさな輝きは、輝きと違おうが違うまいが酷く汚れてそれでも輝きにしろ何の輝きも放てずに朽ちて行きそうな姿を始めから何一つ輝けない処で頽れさせ、艶のような円みそれとも円みのような艶それとも円みでも艶でも無くにな円みと艶との背き合いの傾れ込みを弾き退けて円みのようも艶のようも失せ、艶は全く艶の円みな円みで円みは全く円みな艶を出し、どちらともなく競うように失せた限りには輝く輝きの汚れに浸み鈍って円みも艶も窮まり窄めば、な様を、きっと狙い澄ましてたのにさも余所見してたかに磨き曇らせる狂い無さが、な狂い無さを伝う一雫を象った一流れ限りの

透けに包まれ、な透けこそ狂い無さの有りの儘の姿かも知れなくに、な透けを先へ貫けば貫いただけ狂い無さは奥へ揺らいで歪んで狂い無さに要りもしない磨きを自らに掛けようか、に、な磨かれの滲ませる狂いが波打って襞を描き掛けては描き掛けの襞が襞の描き掛けをぶつ切りに潰し、なぶつ切りをぶつ切りに潰し、に、その度に狂いは繰り返し真っ新に戻されては練られ、狂いの練られは狂いの無い艶を艶の内の円みを削って掻き出すように溢れ惑えば、な惑いこそ薄い透けをぴたりと纏う狂い無さを貫く狂い無さで、にしろそれともなのでこそか、な練られ狂いの艶の惑いは、さも狂おしげに狂おしさを装って狂い無さを拒み棄て、狂い無さの届かない、きっと惑いの艶の惑いだけが狂い無くに狂い無さを狂わせ捲って狂い無く惑い果てなくて狂い已まず、な已まなさの狂い無さに届かない惑い自らを惑いの艶で苛んで、苛まれ果てた惑いの、独り狂い無さと異なって狂い無さに後も先も塞がれて惑い捲る、な惑い捲りの重みで狂い無さに虚しく抗うしか無くにも、な重みをも惑いの艶で苛めば、頽れる重みの狂い無さへの抗いが頽れる向きへ傾き惑って惑い転げ、な向きが、惑いと異なる重みを孕んで狂い無さを僅かでも狂わせてないか、と僅かでも狂わせられるなら狂い無さは丸丸崩れ去ろう、な望みに撓む儚さが却って狂い無さにしなやかさを与えては、惑いと異なる重みは重みの儘に軽みなら、惑いとの異なりは重みとも軽みとも異なる外を向かされよう、な外な向きの外の上っ面を

剥がして剥き出される内へ浸み通り、にも、墜ちる処まで墜ち暈ける暗みと見せ掛ける噴き上がる透けの已まなさに圧し跳ねられる兆しが兆しの欠片の様を翳して尖り尖り溢れれば、な浸み通りと圧し跳ねられの競り合いは、内へ向かいながら少しも内へは隠れず捩れ流れ流れ捩れて、捩れが流れを塞ぎ込める固まる塊の姿の姿から逃れに逃れ、にも姿の無さまでは逃れ切れる筈も無く、に、何に縋るも凭り掛かるも叶わず、なら狂い無さ擬きを装えないかと内の外辺りへ探りを入れれば、そこが内でも外でも無く、内でも外でも無くにな限りには狂い無さに違いない、な見通しの危うさに揺らぐ、な何が揺らごうか、と危うさが危うさを苛むなら揺らぎこそ揺らぎ擬きでしか無かろう、とさも危うげを隠そうと危うげに揺らぐか、にも、な、しか無かろうから外れると危うさにも揺らぎにも叛く、惑いとの異なりの頽れ果てた成れの果てかな薄っすらな限りには薄っすらな薄っすらは確かな惑いでしか無くに惑いなだけは拒もうと惑って惑い損ない失せる惑いの痕が軽みさえ重みへ流すかに傾いて艶なら艶を艶で無いなら艶で無さを惑い無さげに孕み、にも、な孕みは今研ぎ澄まされたばかりかな傾きに酷く硬く狭苦しそうに頽れ、な頽れの狭苦しさから滲み溢れて止まらない、何の艶より艶の無さより明るい明るみの丸丸と弾け已まない光り、と見せ掛け直ぐに重たげな暗みが光りを軽軽とる楽しげに呑んで呑んだ暗みこそ光りより輝くと見せ掛けて光りが少しも光りを含まない、な含まなさを暴く狂い

無さが狂い無さなら、な暴きの濡れるような艶なら艶を苛み切り刻み、な程に艶なら艶を増そうかな艶への重たげな暗みの混ざり込みの偏りに墜ち暈ける光りを含まなさ、の唯光りの光らなさが暗みの真ん中を貫き抜けたいかに尖り尽き尽き曲がり、曲がりばかりな光りの光らなさを光らせ、な光らせの窄まり果てて暗みの窮みへ消え去るようなら、な暗みの窮みは少しも窮みでは無くにも唯光らなさの光らせの窄まり果てない痕で、果てないからには痕は痕で無さに侵されて自ら墜ち暈け損ない偏って、さも傾きかにさも研ぎ澄まされたかな狭窮まりそうな曲がり尽きを重みの小さいだけ小さな白い塊かに吐き、に、な白い塊かも小さなかも偏って潰される吐かれた曲がり尽きの狭窮まりを窮めようと、白い小さな塊かの偏り潰れから、捩れ食み出し損なってぬらりと垂れ擡げ擡げ垂れる踏み躙られたげな重みは、窄まり果てなかろうと失せたと変わらない光りの光らなさの光らせをこっそり継ぐように蕾を陰で綻ばせるかに、幾つか斜めにずれてそれぞれの艶の無さを色に映す切り分けられた平たく狭い拡がりを花咲かすように環にひらりと並べ拡げ、にも、な色が隣り合えばどの色も色とはそれぞれに異なろう、なそれぞれな異なりにそれぞれに失せた色の見える筈の無い痕なら痕でも無い無さに付け込む隙が内向きに筒のように丸まり窄まろうと遠い水の影が呼び込む温い濁りでも導きたそうなら、それぞれな色とは異なりの異なりに僅かずつ残るかとも見誤られるしかない艶の無さを映した

色が一纏まりに逃げ向かう、光りの光らなさの光らせの窄まり果てなさが孕む重みを潜める歪みが歪みと殆ど同じな色とは異なりの異なりに透けた口を開けて待ってよう、緩やかな限りに緩やかそうで白さを薄い限りに薄く滲ませる淡く儚げな昇りの傾きの昇る程に消え掛け消え泥み淀む重たげな透けが鈍そうに重なって白みが増せば傾きは堪らず傾きで居られない程に滞りながら却って傾きに満ち傾きの濃さを増し傾き已んで傾き已んだ先の、昇りの僅かに到り着けない高みの、高みは更に高みを覗かせ真上へ逸れるように明るみを増して拡がるのをさらりと見せ付け、その濁る限りに濁って濁りの白みの重なりに透ける虚ろな狭い拡がりの狭まりの奥から真っ直ぐ垂れ擡げて流れ降り拡がって来る軽い限りに軽い重みを捏ねて映し、込むように混ぜ合わせた緊い下りの艶めきが、逆さにされた光りの光らなさの光らせの虚ろな狭い拡がりの狭まりに渡り届きそうにも直ぐ手前で色とは異なりの異なりも何の透けも拒んで墜ち暈けて消え果てる様を際立たせ、な際立たせはその儘に、虚ろな狭い拡がりの狭まりと緊い下りの艶めきの真横へ延びる境目の姿に輝き鈍って斜め上に向け圧し迫りたそうに脹らむにしろ、斜め上には圧し迫れる拡がりばかりは有ろうとも何も無く明るくも暗くも無いと見えなくてもそう分かるなら、酷い明るみの垂れ擡げが明るみより酷い重みを含んで斜め下へ遠ざかる向きへ圧し迫るでも無くに却つて脅すように静まって有りもしない姿を晒してるようで、いや間違いなく晒

してようと見直せば待ち構えてたかにその見直しを身を捩るかに擦り抜けて姿は消され、と、な消されにそっくり準えて消された姿が甦るかに現れ、にしろ、な現れが甦りで無いのは確かでは現れは消されと違わないとも知れるしか無さそうで、に、直ぐにも頽れるしか無さそうに怪しさの限りを見せ掛ける現れは現れより斜めに高い虚ろに巻き取られる姿を纏って何とか現れの儘を留め置こうとしてし損ない現れは何処へか紛れたろう、なし損ない痕の残るだけなのも、その斜め上は甦らせてそこへ垂れ擡げ直される酷い明るみに明け渡されるしか無くに跡形無く埋まり、にしろ、斜め下から裏を覗き込めるとしたら留め置き損なわれた現れの姿の痕が痕でも無さそうにさもその儘に彫りの深い姿を晒して少しずつ暗げな輝きの粘っこい厚みを増してないか、まさかそんなものなら虚ろとの距たりさえ拒む穢れの底とも触れない外とそのまた外とが入り乱れ何が入り乱れるかも入り乱れる外ばかりから紛れ込んで来た紛い物かに醜いだけではないか、いや醜さなどあやふや過ぎて何処にも有り得よう筈は無い、なのに醜さとも醜く無さとも係わるのは耐え難い、と、この斜め上下の何処からも直ぐに抜け出さなければならないと焦るのは、いや焦りこそ一つことりと酷く遠くから来た小さな物音かにあやふやで無さ過ぎて有り得ようと直ぐに失せるなら焦りと係わるのでも無くに、な係わり無さは取り敢えずな如何にも有りもしなさを際立たせる虚ろへでも嬉しくて堪らず軽軽と跳ねるように逃げ込むし

か無かろう、に、な兆しに一早く恐れを為したかな虚ろの丸く小さくに却って脹れ拡がって遠ざかる様を斜め上の何処でも無い辺りに見上げて仕舞うそんなそれが、そんなそれを遠回りして斜めを避けながら自らの在処へ吸い寄せられるかに顧みる、顧みのそんなそれの姿の思わせ振りな影かな行き止まりに、どの斜めからも墜ち暈けて自らの重みの重さを重みより重く吐いては重みを裸に剥くかにその狂い無さを曝し、その曝される狂い無さを囲む外と外とが入り乱れる外に荒荒しく再び裸に剥かれるかな静かな儘な重みが、な静かな儘に拉がれて重みとは異なり、な重みとは異なりの更に再び、な異なりを裸に剥く様が曝される狂い無さに狂い無く曝され映り重なり、な映り重なりを一つ大きく揺らがせ歪ませ歪み目掛けて一呑みな丸っこく脹れ捩れる姿の重みの狂い無さの狂い無さ振りだけが独り、内向きを内向きに食い破るように食い進んで独りを独りに窮めるなら、なそれは重みも独りも失って唯裸に剥かれたかな狂い無さが、狂い無ささえ狂い無く失う儘に狂い無く狂い無さを剥き出して狂い無さの失われに、狂い無さの儘に狂い無く静かな限りに抗うしかない、な独りな狂い無さを何処へも映せない、な映せない何処へもに、そこが独りな狂い無さの断ち切られて届かない紛れもない外かな振る舞いを許しては、独りな狂い無さは、な外をそのまやかしだけを引き込んで纏い傷付くしか無くに、な纏い傷付きに狂い無さは耐え切れず、唯独りなを残し自らを引き裂こうけれど、裂く程にど

の裂け口にも狂い無さが荒荒しく圧し入るばかりでは狂い無さを窮めて窮め已めらない、な窮まり無さに引き裂かれるしか無くに狂い無さを荒れ狂わせるかに自らの纏い傷付きを破り捨てて唯独りに、狂い無さを狂い無く狂わせて狂い無さを狂い無さごと裂いて狂い無さとの距たりを狂い無く拡げて已まず、な已ま無さには狂い無さは、已ま無さへ已ま無さの奥の已ま無さにも見えない已ま無さの已みそうな辺りから纏わり付き、傷付けはしない替わりに已ま無さの息の根を止めに掛かるかな酷く濃やかに明るく濃やか過ぎる明るみに侵されて懈そうに柔らかい、向きを明かさない微かにも已まない圧し迫りの脅しのあやふやな徴の徴異なりを恐る恐る弄り已まない細かな蠢きが蠢きと蠢きの端端を競い色めかせ映し合って濡れ翳されるように剥かれる円みの兆しを見え隠れさせ、已ま無さな儘に已ま無さを已めさせようとする果てなく粘り強い企みの、僅かずつ姿を換え続けては寄せて尽きない穏やかな波の連なりに似た途切れ途切れな繰り返しで、にしろ、繰り返される儘なら繰り返しは繰り返されず、なら繰り返されずに却って繰り返され無さを捩れ抜けるかに繰り返されない繰り返しが繰り返される、な途切れようも無い繰り返されに、狂い無く拡げられ已まない狂い無さとの距たりを映し重ねられないかとその已ま無さから纏わり付いて已むしか無い、な何が已むしか無いのか、な何がの先行きの徴さえ狂い無さに圧し砕かれ水の塊の彷徨く片割れかに呑まれるなら、已ま無さだけが何の

已ま無さも無くに已ま無さだけで狂い無さを逃れそれとも撥ね除け、それとも捩れ巡り回って狂い無さを侵し破り食い潰し、已ま無さは已ま無さに狂い無さを浸み貫かせ窮めれば、已ま無さは狂い無さを狂い無さの狭苦しさで塞いで匿いながら幾らでも狂い無さの狂いも無さも已ま無さの隈無く透ける触れられる厚みに換えて尽きず、な換え尽き無さは、已ま無さの何処彼処にも小さな虚ろを一つずつ細かく尖らせ尖らせの内へ孕まれる影の色を拒む影を入り乱れさせて脹らます小さな穴を開けては狂い無さを小出しに流し解き放つのか解き放ち損なうのか、のどちらでも無さに暈け砕け流れ淀む狂い無さを嗤う勢いを翻して已ま無さを狂い無く掲げ輝かせれば、な輝かせを曇らそうと集まる向きを断たれて入り乱れ欠片の姿を煌めかせる様様に尖り歪む厚みへと現われる光りを激しく描き出そうとし、な激しさに乗るさも新手の狂い無さにそれぞれの光りが彫り出されたかな影を光りより光らせて光りで無いなら見掛けの丸みだけ残して痩せ細り、な痩せ細りを包むのか包みたいだけか、光りの光りで無さが幅だけたっぷりに薄切りな様に投げ出されたかにも眠そうに緩やかに内を向き損ない滑り已む已み際その儘な輪を描きたそうな、にも輪と殆ど変わらなそうな姿を晒し、その輪の半ばまで消えも消えないも為らず傾き掛かって水から浮き出るかに横たわろうとして触れられるのを拒む徴かな色を、浅過ぎて濁り足掻く明るい闇へ流すかな、な明るい闇より更に濁って明るいなら色を面に表

しその色で色の流れをくっきりと止めようかな兆しに縁取られた、な自らの淀む様に抗うかに斜めと丸みだけは固く守って濁りを流す形を留める、水を拒んで水面から浮き出るかな円みの切り口を塞ぎ隠した形（なり）に俯いて俯きを掲げるように尖り細る尖り細りを好み誇るかな脹らみが、その少しばかり距たる辺りに独り置き残されたかな生身を晒してそうな已ま無さだけの已ま無さの触れられる厚みへの換え尽き無さを呼び招こうと、闇の明るみの砕け散る笑い声の中で砕け散りを繰り返す声に成らない黙（だんま）りな笑いの静まりを聴いては戯れるしかないかに戯れ艶めく艶めきを戯ける、必ず見て取れない程に僅かに顔を背けるかな、に僅かな限りの僅かに顔を背けるのは嫌でも際立って仕舞う様は、動きたそうにそっと決められた斜めの向きに、な様の軽みを現し止めて止めが止まって、な軽みに鞘に収まるかな俯く尖る脹らみな儘に、そんなそれがそれ切りにその形（なり）を形（なり）なりに、その奥めきの匂いを映すだけかな平たく浮き出す奥めく明るみに侵されて薄い限りに薄い暗みを僅かに奥へと落ち窪ませる、な窪ませの向きと向き合う已ま無さの触れられる厚みへの換え尽き無さの、な窪ませへの向きからの後退りが自ら引き招くしかない自ずから頽れる自らを映してはその映しを映し移して已まない已ま無さへ頽れる頽れに消え掛け拡がり消え留まり現れ戻り、触れられる厚みへの換え尽き無さの姿を換え尽き無さは、無さの儘にも後を絶たれて尽きるかな、薄っす

らとも淡い色かに透け粘る遠い火の厚みを含む揺らめきかな温みを含み匿う、丸く断たれた円みの弛みの静まりにそっと降り下り固まれば静まる儘に溶け、な溶けの浅い限りに浅い底から甦るかな換え尽き無さの触れられる厚みへの、透け果てててでも厚みを侵し浸み通りたい向きの貫き、がその貫き振りが崇って鈍り暈けるしかないなら向きを拒む貫き異なりを貫きそれとも貫き異なり、に並べ重ねて貫き異なりを貫きの鈍みから抜きん出させる、にも、換え尽き無さの触れられる厚みへ隠された重みの向きの丸みに反り返ろうかな自らの現れを塞ぐかに現れを晒しては塞ぐも晒すも已めたげに傾きたげな白みを匿おうとする脹らみを晒して塞がる透け偏る偏りの透けに被さり係られる、抜きん出た貫き異なりの異なりが、異なりだけの狂いの無さの異なりだけでない狂い無さの已ま無さに苛まれる苛まれの狂い無さに苛まれて潰れようも無く留まるなら、に被さり係る偏りの透けから傾きたげにも傾きを解（ほど）いて真下へ拡がり透け零れる白みに侵され薄く白んで白みの奥を透けさせ、にしろ奥はその限りな奥なら擦り切れたかな薄い限りの浅さを晒して奥ごと奥の向こうへ滑り落ち、滑り落ち痕の白みの残した裏向きな暗みの裏向きとその暗みを白ませる滑り痕から浮き出る暗みを入り交わらせる艶の僅かに波打つらしい斑の、暗みの裏向きと暗みの境の一処だけ裂け剥がれ白みをも暗みをも拒んで透けた光りを滲ませるならその光りだけを淡く晒したげに覗かせる触れられる厚みは、何に触れ

られるか知れなさに戦くかに震えたそうに、にも厚みを守るには震えられず凍ったようにのっぺりと何にも触られずに触られる厚みな儘に滑るかに滲ませたかも知れない光りを窄み収め、に付け入るように厚みの上っ面に慌ただしく流れ込む目の粗そうな形（なり）ばかりを円みに、触られる厚みな儘な様を思う様鈍らされ、に形（なり）ばかりな円みも凋んでその鈍みに囚われ鈍るかなら、円み異なりそれとも円みな儘に鈍み異なり、などちらの異なりもどうやら異なりとはあやふやに異なりそうになら異なれず、な重なりもずれもしない二つの異なり異なれずがその円みと鈍みの互いの匂いを嗅ごうとしては匂いを硬く平たく捩れた冷たさかに逃すかな、な逃しと逃しの纏れようもなく捩れた綾なす硬くも平たくも冷たくもなく柔らかく粘粘と刻まれるかな匂いなら匂い、な匂いでないなら匂いでない、を、その真上に被さり係る偏りの透けへ逆さに窪め映し移し張り、いや違う、な事が起こりそうな兆しを唯匂わせてそうに、な匂わせてそうに、が、真上に被さり係る偏りの透けなどすっかり失われ、そこに換わりに透けより透けて虚ろな虚ろのふらふらとも逆さな影を根を集め伸ばすように高くへ向かわせ明るみも暗みも拒んで眠るかに冷たく内向きに向く向きを孕んで脹れてそうなのを明るみに出そうか、なる明るみが独りでに先に失せてようなら、と失せたにしろ明るみは、明るみに擢える限りを擢ったろう、に何が擢われたか、な擢われ痕も擢ったかな明るみの痕、それともそれは明るみの

濡れたような匂いの粉粉にされた欠片かも知れない、などっち付かずに付け入る、あやふやにもくっきりとぼやけ逸れてあやふや異なる、それともあやふや異なりも唯あやふや異なりな儘なら、なその異なりの窮まりを含むあやふやさが何を含むか割けるならさも腹を割くかに、に覗き見られよう異なりを見咎めたいかに、あやふやもあやふや異なりも振り払うしかないかな強い身振り、にしろ異なりの窮まりに向かっては向きを外すばかりに透けるばかりなら何の身振りにも為りそうにない、そんな事へ突っ掛ろうかな向きへの傾きそれとも傾きへの貫きのどちらとも無さそうな様の、な様なら揺らめこう揺らめきを抑えに掛かる揺らめきに、揺らめきようの無さを送り映し移し定めたい明るみの失せが失せた明るみを越えて細い限りに細い光りを真似るかな強さを隠し表し、な強さへの向きと一つに溶けて貫き濁れば、な濁りをその艶で淡い滲みに換えられよう襞を端から植え付けるかになだらかに傾れ込ませたい透けの透けが、濁りを真似て斑な震えに重みを優しく孕ませては痩せ逸る程に真似られた濁りを貫いて、透けの透けを透けさせる貫きを象る光りより痩せた細みを、鳴かすように震わすように細み窮まらせ損ない、損ない細ませ損なわせて細み異ならせ、に異ならされた細み異なりがその強みを利かせばその先に、濁りと透けの波打つ波の重さに沈み逸り、傾き極まる沈みを浮かせる襞を砕け散る光りを塗すかに平たく明け透けに延ばし、に抗う襞の畳まれる向きに透けを浸みさせる

独り細み異なりが、距たりを拒み眩ませて何の向きも向こうとしない向きを向き集め逸り、へとも躍る遠さを咬み合わせては激しく遠く向きの綾を廻し遠ざけ、替わりに近付く環擬きの向きを鈍らせ殺す、暗みの窪まりを殖やし已まない暗みの丸い欠片の騒がしさを溢れ凝り固まらせ鈍らせ眩ませては、な遠さと近さとの二つとを向きながらにも我を忘れたかな入り乱れに見せ掛けた距たりの静けさを探し回る静けさの慌ただしさの擦り切れの、躍りに躍ってまた静けさに狂い無くに狂い無く静けささえ断つかに立ち返る様を躍り静まらせる、な様のゆったりする程に細かく分かれ殖える、その匿う向きの重なり合いがまた殖えてその限りかに殖え切れず、な殖え切れなさを嘆き準えるかに響き渡る細み異なりの狂い無さのぶち撒かれが、細み異なりの限りに開（はだ）かり巻かれて細み異なりは自らの狂い無さを覆い被さるように一呑みに呑んだか呑もうか、にも直ぐに呑み損なったかにその狂い無さを裏向きに呑み滑らせ滑らせごと一呑みに引き揚げるように呑んで呑み逸れ暈け、に狂い無さは唯何の狂い無さからも解き放たれ、狂い無さ異なりへと誘（いざな）われるかな、な誘われも狂い無さで浸み砕き溶かし貫いたか貫きたいか、とそれ限りの問いを問い果ていたなら、独り向きを匿えないで目眩ます艶を鈍り穢し翳して荒荒しく切り裂かれた鏡の縁のざらつきのように平たく静かに奥深く喧しい狭い限りに狭い暗みの一つ限りに選ばれ激しく歪む窪まりに映る自らの姿を顧み引き寄せ取り

回してしか望みの兆しの混ざる明るみを孕めまいと思い詰める細み異なりの、な細み異なりとも異なるそれをそれと異なり細まり、な細まってしか細れない細みの細みとの異なりは、何の異なりも拒む徴と徴の失われで塗り固められた、な細みな徴だけの細みで、には細みでだけは細めずに、細みでだけでしか細めずに、かに、な、かにの細みようの無さに食い入る、鬟を奥深く、その奥に数知れず埋もれ隠してよう、その埋もれ隠しで繰り返し狂い無く幾つかの円みを刺し違えさせ、などれも円みで円みを断ち切られ断ち切られるより強く繋ぎ合わされ粘り薫る円みに描き出される、濃く鋭い円みを墜ちるばかりな深い斜めに円く偏り集めた円みの脹れ渦巻き掛けて影を望むかな彫りの曝け出され撥ねる丸まりが薫り粘って一纏まりに、更に纏まり、内向く、重さに傾き寝かされ、な寝かされが嫌でも含み隠し翳す、互いに反り合う四つの向きの内へ交わろうとする勢いの、な勢いの交わる程に擦れ違う厚みに触れられるのは、透け濁り湿り乾く環の明るみに取り巻かれて濃やかに濡れる肌を暗み浄めるかな細みの細みようの無さを異ならせる異なりの、異なり細めずには異なり切れない細みの貫きで、に已みようの無く高くうねり波立ち真上へ泡立ちたげな貫きは、細みを弛まずずっと細み異ならせ、に数を殖やす細み異なりの束（つか）ねが、貫きの先に必ず閉じて湿りを含むだけ含んで湿りの厚みに僅かにずれる裂け口は要るかに先を、目を二つ縦に重ねるかに二つに分け、な裂ける儘に裂けの偏

りを弄べば、それはそれで触れられる厚みを擬え纏えば始めから触れられる厚みそのものの姿な様を誇り翳し、に艶めく向きの艶めきを鋭く集め欺き、な欺きに煌めく、何の円みからも独り離れて円みに馴染み囲まれるかに円みの形（なり）を偽る円みが、それ限りな向きの始まりを独り尖り輝かせ、向きの始まりな儘に細まっては、な細まりを浮き浮きと撥ね除け、に艶めきを重ね重ねて向きの終わりへの向きを研ぎ澄ましたい、と研ぎ澄ましたいなら疾っくに研ぎ澄まされてよう周りを囲む円みから独り折られ尖り血に穢れたかな翼のように際立ち、な際立ちの頽れるしか無くかに頽れ無さを円み描いて尽きない、なる尽き無さに遅れる円み描かれの向きの終わりへの向き損ないが輝かす描かれ遅れに幾つにもずれて数を殖やし鬟の姿に憧れるかに重なる円みの輝きの潰れ揺らめき淀む重みは唯一つに重みなばかりに、透けた明るみの隅にでも惚けて掠れていたろうか丸まりの彫りの刃のように鋭い丸まりの深さを狭い限りに狭く色めかせ、色めきは襷掛けに交わり脹れて交わりとの距たりとの裂け口を覗かせては、な覗かせに裂け口との距たりを測る貫きの触れられる厚みが、擦るように裂け口へ先を添わせ損ない却って覗いた裂け口へ侵し進み鈍り、な鈍りの重みに凭れ掛かる凭れが裂け口を塞いでそれとも塞ごうと逸って塞ぎ切れずに自らを捩れ巻きたげに裂け口に触れる厚みの狂い無さに凭れ凭れ、凭れ損い損なう程に触れる厚みは触れを偏らせ偏りを弄んで却って狂い無さに弄び返され

るなら、な狂い無さは丸裸に剥き出されたかな危うさを晒そうにも晒せたか、な疑いに狂い無く狂わされ、な狂い無く狂う疑いが、疑いが疑いを疑い固めるかに硬く貫かれるかにも疑いを疑う疑いな儘に渋渋とも先に望みを抱けるかに勢い込んで引き下がろうか、狂い無さは狂い無く狂う狂いに狂うしか無くに狂い無さの硬い疑いにあっさり侵され狂い無く頽れるにしろ、な頽れの狂い無さには狂いが狂い無く紛れてようなら疑いどころか狂い無さは遂に狂い無さを失うしか無かろうか、にしろ、狂い無さを阻む何をも越えてしか狂い無さは狂い無さでしかなく、その失われに狂い無さは継がれ生き延びて行くしかないなら、狂い無さの失せた先から狂い無さを撒き散らせる見通しを得たかで、な狂い無さの失われが、狂い無くか狂い無くで無くかに狂い無く狂って、な狂いを強く翳す程に狂い無さを狂い無く随わせ、な失われがそんなそれだけで先へ角張って裂けそうにも太く脹らむかに圧し立てられ、にも、な圧し立てられは予め定められてたかに直に虚ろに内を刳り貫かれ、圧し立てられの外で狂い無さに抗う、内の虚ろとはまるで違えられた荒荒しく果ても無さそうな虚ろの拡がりに立ち塞がれるしか無くにも内の虚ろで渡り合えよう、それとも渡り合えるも合えないも渡り合うしか無くに、内に刳り貫かれた虚ろを刺し貫き、いや刳り貫かれた虚ろこそ内を刺し貫こう、に、内と虚ろは馴れ合えば何も刺し貫けず内は唯狂い無くも狂い無くも無く虚ろで、にしろ、な虚ろでは、包まれるように

外から激しく責められるのに立ち向かうかに、虚ろな儘に留まれる筈も無くに内と外とからの虚ろに抗おうか、それとも虚ろに順いそろそろと水っぽさでも真似て虚ろを延び拡がらせようか、なあやふやさこそ狂い無く虚ろで、な虚ろがその儘ぴたりと虚ろなら狂い無くも狂い無くも無くに何のあやふやとも係われずにも何のあやふやとも係われなくては虚ろとさえ有り得ないのは明らかで、な明らかさは虚ろを満たし虚ろを衰える限り衰えさせて明らかで、な明らかからどちらへとも距たれずに明らかを距たり下し分ける、柔らかな脹らみしか見せないばかりに脹らみとは異なる、尖った円みは隠し見せて円みとの異なりを異ならせる、な異なり異ならせを見せるだけ見せて隠し見せ誇り、な誇りの煌めきを汚れと流し去り驕れば浄められた驕りの輝きは透け弾け、な透け弾けに映る映りとの異なりは異なり異なり叛いて異なりの異なりを異なりに映し、に映された異なりの異なりは、その映されを仰ぐ虚ろに吹き払われても必ず僅かに残る筈のまだ光りを知らない光りの底かな虚ろな淀む虚ろへの透け貫きを貫きでは有り得ないまでに薄く延べ拡げる限りに拡げて濁り浄め、な浄められから薫る薫りの薫らずその徴ばかりが撒き散らされるかに延べ拡がりの濁りに沿って濁りに滲む濁りの上辺の振りをして煌めき翳される有り得なかろうと透け貫きな儘な直向きな向きを一つの向きな儘かに楽しげに弄び、その弄ばれる限りに弄ばれるなら透け貫きの直向きな向きは何なのかな惑いの兆しばかりが溢

れようか、にも、な溢れようかな惑いの兆しに射す、浄められの濁りの奥に浄
めらもせず濁りでも無くに埋もれ晒される儘に忘れられる筈も無くに忘れ棄
てられ、なり棄てられと係わらない為の朧な奥行きの底の重さの忘れられなさが
絶えて消え去る薄過ぎては鈍過ぎる光りの薫りばかり塗り拡げられように暗
み静まる後のない辺りに、幾らでも切り分けられては角角しく絡み合う色を滑
らすかな丸みを得て触れられる流れの輝きの移り行きの速さは光りとも見紛う
その見紛う光りの外かな姿を拒んでその光りの外かな姿に拒み返された、な拒
み返されの狭い程に鈍く舐めるように静まり拡がる拡がりの拡がり過ぎるかに
拡がり過ぎられなければ静まり窮まる窮まりを映して重く狭まるしか無くにも
狭まりを拒めるなら拒もうと、にも拒む向きが狂い無く頑なに狭まりの向きで
はその向きに突き刺さって砕け溶けるしか無くに狭まり拡がり異なろうか、に、
なり成り行きから引き剥がされるしか無くに狭まりも拡がり異なりも失うにしろ
光りの外かな姿には再び見（まみ）えられないとも確かにそれ切り後はなく知
れるしかなく、な知れの狂い無さに狂うしか無さそうなら光りを放たずにしか
光りで居られない光りの姿に縋ろうかとも縋れずに却ってその光りの姿の失せ
る様に脅かされ苛まれ、な苛まれに脅かされ直され已まないしか無くにさも凍
り付く儘では、光りを放たない光りの姿に、触れられる流れの輝きの移り行き
の速さとの繋がりも既に断ち切られたかに繋がりからして跡形も無くに断ち切

られ、な無い跡だけは色付き、で光りの外かな姿も失せるしか無くに、にしろそれで何が失せたか知りようも無いとも知りようが無いでは凍り付く儘かもまるで覚束なく、に、な自らを、光りを放てなくてだけ独り光りからはぐれた光りそれとも光り異なりとも、な朧に光る仄かさの暈け痕の後など追いたくても凍り付く儘かも覚束なければ光りからはぐれる独りの独りを独りとも知れず、な知れずな独りの独り異なれるかも知れずな独りな儘では独りなど有り得ないかに潰れ失せる、な失せ痕の影も無ければ何からもはぐれたかに狂い無くに、な独り狂い無さでだけ独りな独りから放たれる、光りとも光りの外とも異なる明るみが、独りも独り異なりも拒んで明るみを拒み、な拒みに拒み返される明るみ異なりようのない明るみを酷く明るげに晴れ晴れしささえ暗ませて明るませ、に、な明るみ独りな狂い無さに狂わされて一つな儘な向きを揺らめかされ、な儘に溶かされ、な溶かされに硬く強張って突っ込む自らの姿を翳し損なっては損ない現し、な現しの歪みを暴いて現し損ない、な懈そうに歪みさえ放り棄てたかな現しを数を忘れ歯止めの利かないかに繰り返したいかに頽れさせ、な頽れを集め散らし散らし集めては強張るより硬く揺らめかし、な揺らめかしの硬さの硬さの向く先へ向けて砕け続ける砕け続けに隈無く満ちる明らかさにずっと密かに匿われてたかに濃やかに浮かび出る虚ろへの透け貫きを毀したいかに強く傾げて傾げ窮められないのは何故なのか、に見上げられるか見下ろされ

る透け貫きが、透け貫いた虚ろの端から端までを自らの身を守る為かに円みともも知れない円みを際立たせ、さも透けの奥へとも拡げるなら、な円みのまやかしを、まやかし異なる円みのまやかしに換えて取り込もうと、光りとも光りの外とも異なる明るみは、光りとも光りの外とも異なる異なりを脱ぎ棄て裸の明るみでも晒そうとしては明るみの裸を明るませれなうしかないのは裸の明るみなど明るみに知れる筈も無いからにしろ、な知れる筈も無さを明るみの裸に刺し込めば知れない裸も自ずから裸を晒すかに知られよう、な唯望みなだけの望みに乗り移れたかに望みを明るませて明るみ、な明るみをそうして晒すばかりかなその裸の知れなさのせいで失うなら、な明るみの失われを明るんで独り何の望みも要らなくに、な何の望みも要らなさに繋がれる望みに明るみを被せ懸けて要らない望みを棄て去り、棄て去り明るむ明るみへ唯明るみなだけの明るみを傾かせ滑らせ流し、な明るみの流れを明るみの流れで明るませられれば、な明るみは明るみの流れに逆巻くかに独り明るみに違いなく、な違いなさの明るみまで明るませて明るみは独り、な明るみとの異なりさえ明るませられよう、に、明るむばかりに明るむ儘に明るみ窮まるなら窮まり果てるしか無いかに明るみを失い失われた明るみも失い、な明るみ痕も失えば、な失われ痕は明るみ異なる内向きな明るみを明るみの内へ異なり窮まらせて明るみの失われを露わな触れられる厚みにしようと円みを見えない円みに沿うかに求めて得られず、

にも求めて得られない円みへの望みが見えない儘に円みの見えなさを映すかに、ひたすらに得られない儘に触れられる厚みの外で円みと円みの繋がりの見えなさを断ち切っては繋げて断ち切りを繋げるなら、な断ち切りの繋ぎには必ず明るみを失って内向きにしか明るめない明るみが無ければならずにも有りそうもないなら内向きの窮みからそれは折り返すかに外向きな明るみを呼び招こうか、な兆しの明るむ徴ばかりが喧（かまびす）しくその明るみを明るみ損なわせ、何の明るみも失われ直されるしかなくに徴の喧しさを端から磨り潰す筈の、さも真横からかに斜めが酷く斜めを開いて傾かせる傾きが傾き切れずに内へ反って細切れな円みを次次に叩き出し撥ね回り拗らせ、に、な円みは円みに叛く様に欺く尖った硬い光りの欠片を纏っては脱ぎ脱いでは纏う脱ぎ際に円みそれぞれの内の暗みを隠す虚ろさを覗かせ、その脱ぐ度に隠された虚ろさを虚ろに暴いて虚ろさは虚ろに暴かれ虚ろさを失って尚も虚ろでしか無いなら虚ろさと異なる虚ろさへでも逃げ込める筈もなく逃げ込むしか無くに、な虚ろ異なっても虚ろでしかない虚ろさにどの細切れな円みの内も侵され換えられ、な事で、な硬い光りで塗り込めたかな内に更に磨きが掛かるようなら、それはそれだけの姿で、何の円みも円みの徴さえ奪われ、な奪われる儘なら円み異なるしか無いかな兆しをもずっと磨かれてる儘かに兆し異ならせて円み異なり開かれる、な開かれを開いて開かれるのは、それでも尚も透け貫きなのか、かに弛（たゆ）

まず透け貫きを貫いて虚ろも虚ろ異なりも何の事も無いかに振り切ったにしろ、
に独り透け貫きが円みのまやかし異なりを知らず引き継いだかに透け貫きに惑
う、な惑いを開かれの先で明明と明らかな限り明らかに明るませる明るみを明
るませる明るませに透け貫かせられようか、
それとも透け貫きに求められ或いは透け貫きが望むのはまるで違う遣りような
のか、も惑いなら、透け貫きはその透け貫かれる惑いの内に閉ざされ透け貫き
続ける為のその先を塞がれるにしろ、に透け貫きを抑え込んだかな惑いも隈無
く透け貫きに透け貫かれた惑いで、に、透け貫きな儘な直向きな向きをその向
きの先が開かれの先の明るませかどうかも知れずに、な明るませへ向けようと
するしかないのもしかし惑いの引き延ばしでしか無くに、にも惑いがその引き
延ばされに鞘に収まるかに収まれば惑いの儘に惑い已もうか、なそれは惑いの
引き延ばしの先からは惑い異なりでしかなろうにもそんな先など有るかは知れ
ず、に、惑いも惑い異なりも失せるようなら透け貫きのその儘な直向きな向き
も向き已んだか向き異なったかに失せるしか無かろうな見通しを見通させる仄
かな徴の、な徴の徴とも無さげに微かに淡くぼやけ霞むしか無くに、な微へは
向き已まずに向きを向く、にしろ透け貫きな儘な直向きな向きは堅く拒んで唯
硬いばかりな硬さの向きを孕むばかりな硬さに、な徴の硬さしか無くさせる、
な無くさせがその徴の硬さにどう巻き込まれるかを測り取ろうとする徴に硬さ

しか無い硬さは隙なく取り巻かれ、にも硬さしか無い硬さが硬さしか無くさせる無くさせに繋がろうと切り分ける、な切り分けの、明明と狂い無く何に測り取られるのも拒む、な拒む様の、何の様も現さない様の透け鈍り内へ滲み拡がり散り迷うかで現れる厚みを、な厚みだけで厚みとの距たりを距たらせて厚ませ、な厚みの厚みから擦り抜け硬さ独り匿うの許され、た円みが引き受けたか引き受け損なったか、はあやふやにしろ硬さは独り円みに丸まり込んでその円みの硬さを滑らせ硬さに硬さを圧し込もうとする硬さを呑んで已まない振りのせいで硬さを拡げられる限りに拡げ、に拡げられよう程に拡げ損ない、少しも拡げられて無くに拡げ失せ、な失せ痕の、目眩くような拡がりな儘な拡がりの無さが、な無さだけの直向きな向きを一つでないなら幾ら数えても一つに還るばかりに数えるかに靡き出し、な靡き出しに失せ痕は覆い被さられ、にも被さり続きに撫で向かうのは、向きの数は一つとさえ数えられないのも見透かす硬さの拡げ失せ痕が乞う、失せたか失せないか知れない硬さの円みが放つ有りもしない色なら色にぴたりと沿うなら沿う、一つ限りな拡がりの無さだけの直向きな向きを向きの儘にも数の外では果てなく切り分けたげな、光りでも光りで無くもないその外で光りへだけは還るのを拒んで光りで無くに光ろうと暗む匂いが匂いを匂い殺して有りもしない色なら色を色異ならせれば色異なるそれは匂いに殺された匂いへ匂い異なるかに映り移り、それとも映り移

り損なえないなら映り移り逸れ、匂い異なり異なろうかにも、とも異なって、な異なりを逸れ移り映し損ない損なった損ない損ない痕へ、な痕など有り得よう筈も無くに、な無くにへ向けて擦り付けるかな向きを靡き出すなら靡き出せよう、な何の徴も予め磨り潰されたかに許されないなら無い徴を徴異ならせて無い徴から映し移し、な異ならされた徴に仄めかし出される向きの靡き出されれの自ずと靡き出され異なろうとして異ならされたかな、狂い無いかも測りようのない匂い異なり異なり異なり痕かな、な痕かなから逸れるしか無くに、な無くにへ何を擦り付けられようかにも、とも誘き出されるしか無いかに狂い無さへ落ち込み掛け損ない、損ない捩れるしか無いかに損ない捩れ欺いて、な欺く向きをさも心ならずも傍く越えるかな、に却って狂い無さへ引き摺り込まれるかな欺きと欺き返されの距たり無さに擦り込まれて消えたかな姿の消えよう筈も無いなら、な姿で無さが姿の無さで有る儘に、な姿を姿に映し移そうと試みる姿との異なりの異ならせが、無い姿を無い姿と異ならせる換わりに兆される異なり、は何の異なりかなど知れてよう、にも、な知れてようとも異なるなら、な異なりの独り何とも異なれずにもそんなそれでも無しに、に無しになら欺きと欺き返されの距たりを距たらせて何の欺きも暴き欺き晒して狂い無さへ溶かし込んで、な無しに、をだけを独り狂い無さから距たらせ、にも、な距たらせなどその距たらせで磨り潰し、にも磨り潰し残しの、何を残して仕舞うかなど

知れてようにも、な知れてようとは異なれず、な知れてようの何も知れなさに傷付こうにも傷など有ってはならないなら直ぐにも無かった傷は磨り潰される、な磨り潰し残しに擦り込まれる狂い無いとも無い唯明明と明明異なる異なりまで予め明るませて狂い無いとも無くさせる明らかさ、にも、な明らかさを映し移し損ない、な損ないから逸れも捩れも歪みも暗みも叶わずに、にも僅かには歪み暗もうかな何の僅かさも知れないなら歪み暗みは始めから歪み暗み異なって何の僅かでも無くに明らかさとは係われずに、な係われ無さから滲み歪み暗んだ歪み暗みな様の消え去り際の、な様に準え、準え戯れ果てる果て痕の置き残しかで、にしろ、なそれはそんな明らかさとの係われ無さな儘にも、な儘で、な、な儘は、な儘で有り続けられる筈も無くに、な無くにへ溶け傾いでは溶け鈍り、な鈍りに鈍り消え掛けようとする向きを向きでさらりと殺し、な殺しの明らかさなら明らかさを捧げるかに、係われない明らかさに係わろうと先走って先走る姿に自らの明らかさを捧げるかな姿を映し移し損ない損なうばかりか損ない痕まで失うなら、な失われの明らかさは何の明らかさにも損なわれずに、にも、な損なわれずに、はその儘に明らかさに損なわれての損なわれずで、とも明らかなのかどうかの明らかで無さが、狂い無いとも無い唯明明にも明明異なる異なりにも唯一つ係われない、な唯一つを揺らめかせ、な揺らめかせを狂うに任せるかに翳し、翳し翳しては翳し逸れ翳し損ない、翳し逸れ鈍り損ない

偏って揺らめき已んでも揺らめき已みが揺らめきを擬えるなら已む已まないの途切れ繋がる流れが揺らめく、な揺らめきだけが揺らめきを拒める揺らめきの狭くも密かに逃げ去るかに揺らめき拡がって揺らめきの途切れ繋がる、な繋がりを拒み尽くして尽くし残す、それとも何も残らない内へと滑り込む揺らめきの揺らめきへの拒み、いや拒みが尽くされたなら拒み擬えが擬え繋がり、にも擬えの儘なら繋がりは繋がりで切れ目なく切り分けられるしか無くに、水が水の知らない向きへ流れ戯れるかに数の集まりより明るい数の外で、切り分けられの一つとも数えられるのを拒む、にも、な数えられない一つ一つを侍むかに、繋がりの切り分けられの繋がり擬えは、数の外の外ごと外の内へかに裏返される向きを探るかに、な向きの数えられなさに擦（なす）り付いては開（はだ）かり巡り巻かれて靡き出される向きを向き鈍り、に、な何の向きも向きで無いのを晒されれば、な無い向きに圧され歪んで潰れもしようけれど圧され歪みを容易く躱せも出来よう、に、拒まれた揺らめきの拒まれた儘を拒んで揺らめかせへの向きを向け拡げ、な向け拡げの数とも数えられない直ぐに果てれば果てる程に果ての無いかの切り分けられの途切れ繋がりの揺らめか無さを揺らめか無さの儘に揺らめかせ、な揺らめかせの何一つでなくてさえ揺らめかせられない、な揺らめかせられなさの明明と切り分けられ過ぎて揺らめかせられなさ異なる異なりの明らかさだけが、切り分けられを擦り抜けて明明とさえも無くに、

その有る儘な一つ限りな数の外を数の外とは異ならせ、何の向きも欠く儘に拡がり拒んで拡がり、な拡がりを拒んで拒み尽きようとも狂い無く変わらずに、な狂い無さの無い狂いを狂わせ捲って狂い無さをその狂い無さで壊し尽くしてそれでも変わらずに、な、変わらずに、いは何なのかの知れ過ぎるなら知れなさの明らかさに繫がって、な繫がりに覆と被さって知れなささえ越えるかに、揺らめかせられなさ異なる異なりを異なり拒むか拒み拒むか知れない知れなさへ貫かせよう、な貫かれようの色めきの揺らめきと揺らめかなさの境を溶かして繫がる繫がりの、な繫がりに繫がりも繫がり溶けては透ける切りな切り口の切れ目なく切り分けられようと透ける限りは唯透けを透けさせるだけかで、にも、な切り分けられに繫がり溶けの透けは、光りの濁りを呼び招きたいかに透けを拒んでも僅かにも拒めずに暗み速まり、暗みばかりが速まり切り分けられよう透けに置き棄てられたかな透けへ僅かにも拒めない光りの濁りへの向きは始めから切り分けられ尽くされてたかに縺れ合い解（ほぐ）れ合えば向きは溶けるようでしかなく、に、な様を自ら拒むなら自らとの狭い限りに狭い距たりに呑まれるしかなく、に、な呑まれた狭い窪みなら窪みの底で独りぐるりと丸まり掛ける向きは、な丸まりの懐に光りの濁りを抱き得たかな圧しと引きとの硬く内へしか揺らめかない揺らめきに差すそれともその揺らめきが放つ光りの濁りを舐めるように縦の一筋に割けば割け目は真横へ弾け拡がろうか、と、な

割け目かの真ん中に輝き出る透ける程に歪み乱れる円みが、歪み乱れさせた円
みの色めきの匂いを響き鈍らせて円みの上っ面に淀ませる淀みの匂いの何の色
めきも拒む濁り、それとも濁りに叛いて乱れ靡き途切れ鋭く揺れ尖る甘く蕩け
るような匂い、は拒まれるしか無くにも、な拒まれを拒み返して返され拒まれ
果てるかに却って拒まれようも無く行き処を失って自らを丸まり刻むしか無い
ような身を晒すかに、にも、内へしか揺らめかない硬い揺らめきを、内への外
に軽やかに朗らかに平たく圧し拡げ狭め輝かせ一つ限りな鈍りに鈍らせ、内へ
の外を翳し匿い、に色めく硬さの響きが危うげに奏でる、円みを乞う棘棘と滲
んで直ぐに散り果てて煌めきの徴ばかりを傾け流して内への外を囲い込む向き
に縁取る清かに汚れ澄む細みの確かさを導き出しては象り定め、と定め象られ
れば揺らめく程に向きを産み出し堕とし、産み出され已まない向きの定まり無
さを無さとして象る触れられる厚みの歪み乱れればそれは円みの途切れない繋
がりと一つな儘に少しも狂い無かろうと輝き偏って偏りの傾きに、それでも切
り分けられるしか無い円みの影かが絡めるなら絡めば絡むだけ円みは円みを拒
み、な拒みに呑まれて光りの濁りに淡く覆われるかな窪みを呑み返す程に円み
の途切れない繋がりで、な円みの途切れない繋がりに一つ限りに孕まれ匿われ
る平らかな鈍みの一つ限りが鈍らせる鈍らせに鈍り叛いて一つ限りの外の、に
しろ一つ限り異なりようの無い鈍みの乱れの乱れ鈍りを狭い限りに狭く色めか

せたかろう、な望みの望み異なる末を見据える狭い限りな狭さの、厚みを拒んで円みを角（かど）めかせる色めきは、褪せる限りに褪せて褪せ果てられず、な果てられ無さに差す光りに侵され一つ限りを擬えたかな光りを拒んで光りに馴れ交わる濁りに映って濁りの内に透け剥かれる脹らみを脹らませる窪みを滲み侵し割いたか、にも滲み侵したまでで割かれるどころか脹らみを脹らませる窪みは内向きに硬く揺らめき柔らかく揺らめき止まって窪みの真ん中を尖り翳し艶めかして脹らみを脹らませる窪みを愈愈内向きに窪ませる勢いなら窪みの底は丸く回り掛けて偏り穴を開けるしか無くに、な穴を開けさせる間近から傾れ落ちて来る光りの平らかな重さに覆われながらにも重さの軽さを曝け出すなら軽さは軽さでも無くに重さの重みが重みを映す色めきに違いなく、にも色めきの収まり切れない光りの重みは重みを映す色めきを割くしか無かろう、に割けたかはあやふやで、なあやふやさがあやふやさの先行きに現れる筈の一つ限りな現れに縋るその縋りように拠って割かれるしかないのも、重みを映す色めきかどうかあやふやで、なあやふやの隈無くあやふやな明らかさは、な明らかさを何のあやふやさも寄せ付けずに割くしか無くに、割かれた明らかさの先行きに、割きようの無いかな明らかさが、な明らかさの内の軽みを何の色めきも表せないまでに淡い限りに淡く切り分け、な切り分けの狂いようも無く明らかさを穢し果てる果て際の狂い無さとの僅かな距たり、それとも淡い限りに淡い

距たりが兆すだけとも、さも光りの重みの割かれた痕かな、な痕に擬え損なって却ってその損ないの重みを沈み隠し損ない晒して細く縁取られる縁取りの影の濃さと薄さの距たりが貫く角めかせの、角めかせと角めかせの係わり合って已まない影の縁すら隠して透けるとも無くに、な透けるとも無くにを象るその象り、に拠って磨かれ濁らされ鈍る、な鈍りの、明らかさの内の軽みの色めかなさに舐めるように映る脹らみを脹らませる窪みには頻りに掠めはしても触れない儘に磨かれ濁らされを透かし鈍らせる、な鈍りだけの内へ内向く薄みを延べ拡げ、に延べ拡げるにも常に狭さの重みに薄みへ重みを取り込んだかにも囚われ囚われるかにも重みから偏り逸れ、透けるとも無くにを象るその象りに弛く沿うなら沿う儘に、な象りを象りな儘に圧し延べ、な圧し延べの僅かな限りに僅かな傾き、それとも傾きを欠いて欠いた傾きへ傾くしか無い傾きの行き止まる流れの角めかせが何の色めきも表せないまでに淡い限りに淡く切り分けられた明らかさの内の軽みに映り沈み淀み、淀みを流す軽みの色めき異なりが異なりと異なりずれるかに色めき異なりの襞を並べて描くかに揺らめき、な揺らめかせへの丸みを帯びて傾れ込むかな明らかさの軽みの厚みも捩れも無さげな貫きは、その影の濃く薄く襞に靡き掛かるのを躱して透けるとも無くにを象るその象りに辿り着きたいかに歪み濁る向きへ汚れようとする重みを噴き出させ、にも貫きの軽みが妨げで、噴き出た重みは端から重みの軽い色めきの濃いと薄

いの襞の姿に頽れ、にも、な姿は頽れてさえ無くに唯歪み濁る向きに叛く辺りに映っては消えて消え痕すら残さない、な消え痕すら残さない中に触れられる厚みを透かし出し、な透かしに匿われたかな透けの重みを歪み濁る向きに向けて立ち向かわせるなら、な透けの重みは透けでも重みでも無かったかにふと洩れそうなら殺された一息かに音も無く切り分けられたろうな消えようで消え現れる直ぐその果てに歪み濁る向きへ向けて軽く立ち向かった向きを透かせ、な透けに撒き散らされる縮む限りに縮んで縮んだ隙に幾らでも数を滑らすように殖やして仕舞う、重みなど含みそうに無い重みの影かの殆ど姿の無い小さな欠片ばかりを、な小ささから滲む幾ら数の殖えようと虚ろな重みが縮んだ隙に奏でられる平らかな響きかな色めきで細か過ぎるなら透けるしかない渦を現し消しながら、歪み濁る向きともそれに向けて立ち向かう向きとも違える限りにしか向きでないならさもどちらを向きようも無くに、な向きようも無い限りに向きで、にも、向きで無い向きに重みを尖りに尖らせ向きで無い向きも拒んでそれでも拡がるなら向きを向くしか無くに、それとも、な振りだけで、向きなど要らないかな拡がりが無くした向きを向くなら拡がるしか無くに拡がり、な拡がりの為に尖りに尖ったかに尚も数を殖やし続けて已まない重みの欠片が震えるのか震え已んだのか震えと震え已みが犇めき抱き合うように尖りと尖りが硬く刺し合うようにして、拡がりとその拡がるしか無くに向きな向きの向きを止

めるなら、刺し合いようはどれもそっくりに尖り過ぎれば刺し合う程に溶け合
うように繋がる限りに繋がって、繋がりの流れを拡がりの向きへと向きの確か
さを確かめるように流すようで、にも、は見誤りと直ぐに分かっても何処まで
が見誤りか遡る程に何の見誤りも見当たらず、なら必ず見付からなければなら
ない見誤り無さも確とは見付けられない見付けられ無さの、招かれたかに現れ
る触れられる厚みを、どのようにかは隠した儘に厚みの無さと現れさせた、清
かに汚れ澄むなら円みでしか無くに円みを拒んで円みの艶めきを円みの外へ放
って円みの外を円みの艶めきで満たし円みを埋もれ逸れて円みは、円みの艶め
きを円みそのものの限り無さとも呑むかにな円みだけになれば円み異なるしか
無くに円みの有り得ない向きを直向きに向き、な直向きな向きが円みも円みの
艶めきも刺し貫いて、いや、な刺し貫きを擬えるだけなら、な擬えの刺し貫き
が刺し貫かれ潰れ頽れる程に円みと円みの艶めきを暗みへ湧き出るかに翳し円
ませ、な円ませも円ませを擬えたに違いなくに円み異なりに呑まれたに違いな
くに後ろ向きに失せよう、失せような痕の痕も無く円み異なりの異なりの異な
り円まりたがりな姿を無い痕に映そうとして大きい限りに映るかにして微かに
も映らず映し失せる向きの先へ先へ異なり円まり、にも、な円まりは何の円み
も見出せず円みを擬えられもせず先へ先へは異なり円まり続けて已まず、にも、
な続け已ま無さは続け已ま無さを擬え、直ぐに擬え損なうのか逸れるのか、に

さも擬え已み鈍るなら擬え異なりを兆して異なり円まり続ければ已ま無さ擬えは失せ、失せ痕は何処が失せ痕か見分けられずにも何処もが失せ痕かに繋がり已まずに拡がり、に繋がる程に繋がり已み、に已ませたどの失せ痕より少し先の斜め高く高みとのずれから降りて来ようかな汚れの繋がりの繋がる程に澄んで清かに汚れ繋げる繋がりの一つか数限り無くか必ずどちらか一つに、な一つが一つを数限りなく殖やして数を溶かし削って数の外を照らせば照り返されるる、な照り返しに削られ痩せ細らされるのか、な数か一つかな細みが、抛られた光りの流れの固まりを擬え頽れ掛け、な頽れ痕を乞うかな頽れ無さが数か一つかな細みを切り分けられる限りに切り分け已まずにも乞われる頽れ痕の徴さえ現れ無さに、それを狙い澄ましてたかに頽れ懸かる、汚れようにも汚れようも無い汚れの残り滓かな、な、それでも数か一つかな細みな姿を崩さない、そんなそれがそれがそれでしかない徴に塗れて覆われれば覆われ続ける為にそれは頑なにも頑なに厭きてさえそれと異なるしか無くに狂い無くそれで、な狂い無さがそれとそれとの異なりを狂わせ、な狂いは予め狂うばかりなそれの外へ吐き出されようにしろ、な狂いの狂い無さだけが何の外にしろ外なら外は狂い無く内でしかなくて外では、外へ吐き出される程に内に吐き戻され溜まるばかりしか無かろうに、なので、な事は起こりそうも無くに、それとそれとの異なりの狂わせは狂わせ異なり、な狂わせ異なりの外にも内にも影さえ現れないな

開も淡み向みもりとに一いままい異なら
け無い異きの細な仄もつ限りせ疑な姿狂
っく薄なの細みくめ、かりのたいりへわ
拡にみり暗みの細かななに硬かにを疑せ
げ、をのみ震確ます徴細丸さな震数いは
なな擬内へえかせ数にみいの戯わか繋狂
狭透えへと異さ震かそを艶向れせ一げわ
さけよ向逃なはえ一う丸めきか馴つよせ
がるういげり濁異つしごきがに染かう異
、ととて込はりなかてとのぼ細まなとな
数も擬震ん抑をらな侵溶薄やみせ細すり
か無ええでえ求せ細さかみけよ、みれを
一くるる細込めれみれしのたりなへば疑
つに程震みま続ばは塗毀真後細馴沿疑う
かをにえ震れけ、却れすんろい染わいし
な象、がえ、る数っよ程中に振ませはか
細る震、異によかてうにを暗りせる疑無
みそえさなもう一震と細狙くをらないく
ののはもり、につえ少かっ匿翳れら異に
細象よ外異数硬かをしくてうすた数なも、
まりりをなかくな身も散狂穢か震かる
りの狭向り一透細に毀りいれなえ一しな
の更くく、つけみ蓄れ砕無果徴こつか疑
硬に内かなかてごえなけくてがそか無い
さ硬をに異な穢と馴い果狙た、がなかだ
のい向散な細れ細染匂ていか数数細ろけ
向限くりりみ果みまい淡通にかかみうは
きりか砕ののて異せかいり湿一一をに数
のにでけ異細たな弛な薄なっつつ異、か
暗硬硬果なまかるそ厚み向ぽかかなに一
みいくてりりでしうみときくななりもつ
と頑透拡震の、かにさ拡に透細細よ、か
繋なけがえ硬に無もえが、けみみうなな
がにるりがさ、く抜易り数てのをの疑細
れもとの細の細にか易、か丸細細ないみ

みて残る潰な上数曇溢のきががをすもば
は戻りとれ窪滑かるれ向異兆向身か辿、
既ら、決掛みり一程返きなすきにでりな
になにめけを逸つにりのりなご纏滲着暗
有いもたた脹れか明の頽失らといみけみ
るの、か先ら迫なる騒れせ、失残逃なと
筈か果にへまる細みがて偏向せしれいの
もらて高のせ在みをし頽りきるて出儘繋
無明残み偏延りの透げれ、向かよてにが
いらるのりべ来影かな傾なかにう、細り
低かの濁を曲たのせ拡れ異う丸、にみは
みでがり撫げり鈍震がるな向いなし窮数
へ、象をで降にみわり在りき限直ろまか
墜なり窄過ろ一をせがり失はり向暗る一
ち明とまぎしつ擬震、来せ向にきみかつ
てらもせてて限ええ明た偏き丸に独にか
明か徴て後来りた已るりりをい独りもな
らさと暗ろよなかめみにを向艶りで、細
かがもみをう高なばの一示きめ限はなみ
さ高異へ固象み、、微つし異きり暗窮へ
にみなのめりの圧震か限明なのなめまの
圧をる親よの濁しえなりらら薄向より向
し独のしう徴り被已厚なかせみきうかき
潰りはみとがのさめみ温にるにに筈らを
さ占濁を謀、、っさをいす儘似向も暗辿
れめり滲っ明描てせ薄向るにたき無みる
るしのまてるき丸のくき明明明向かはし
なよ高せ黙み損み透照のる明るかろ細か
らうみ晒りのなをから向みとみっうみ無
明かがしを微わ描ししきの震のてなのく
らと暗損響かれき曇鈍を微え微、ら姿に
かもみなかなたたらっ定か偏か向尚にも
さ、へいせ厚丸いさてめなっなかも身何
もな溶果続みみかれ曇な厚て厚う細を処
高高けてけのかにたりいみ向み先み嚢へ

さの濁り痕などを探るしか無いなりに墜ち果てたろう高みの虚ろさなら虚ろさ
と見（まみ）え重なり、にも明らかさは、虚ろさなら虚ろささえも重過ぎて拒
むしか無くに既に明るみの内に収まったらしい虚ろさなら虚ろさの重さを吐く
かな振りを虚しく繰り返し明らかさから逃げ去ろうと試みようと恐らくは試み
ても無くにも、には明らか異なれず、な明らか異なれ無さのせめて厚みを厚ま
せられる薄みなりを纏う為の数か一つかな細みを薄みの厚みに映る明らかさの
現れとでも向き合いたい望みの望み棄てられを望んで望み異なりを望むなら、
その先を滑り超して棄てられこれのよがしに虚しげに距てられている数か一つ
かな細みの触れられない剥き出し見影も無い姿に望みは断たれ果たされ、な数
か一つかな細みのその外へと円み拡がり果てる細みの明るみの明らかさは、何
の明らかさも障りなく継ぐようにど円み狭まるしか無かろうかに清かに濃く濁
って濁り窮まり透け縮んで、常に様ちらからも内向きに棄てられた外の重みを
集め消して消し際立たせ影も無いそを尖り異なり翳すまでに窮まれば果てよう
も無くに果て異なり、に、そんなそれなど知らぬげに延べ明るんで暗みを行く
かに何処へも行かない徴に淡くも狂い無く囲まれ、な狂い無さを歓び濁り鈍っ
て鈍まりに淀み浄まり、な浄まりを浄めた明るみに違いなかろうなら明るみに
縁取られるらしい兆しを引き寄せ消し去り引き戻し、縮み果て異なった数か一
つかな細みの面影を追える筈も無くに追う振りを繰り返そう、な振りの中に居

続ける振りを振り翳すかに、歓びの内に匿われていたかも知れない剥き出しな艶めきばかりで重みも軽みも失せた数か一つかな細みの円み続けて已まない姿を、その姿に惹かれ丸まり続ける流れの波立ちが憧れ尽くそう裏表は有り得ない明明として影の無い襞に覆われて狂い無さを狂い無く消し去ろうか毀し尽くそうか、な狂い無く狂いだらわかな僅かでも毀れ掛けてるなら狂い捲るしか無かろう狂い無さの空回りに戯れ懸けては、清かにも有り得ず汚れとも係わらずに透けの内に留まる必ず明るみとの異なりな、な異なりなとは何なのかの、何とも知れなさに痺れ靡いて明るみとの異なりを透け明るませれば、な自らの明るみに明るんで明るむ数か一つかな細みのその外へと円み拡がり果てる細みの明るみの明らかさは、そんな儘の明らかさをそんな儘に明らか損なって明らか異なれずに明るんで、な明るみだけがその明らか損ない痕を覆うかな姿に明らか異なれ無さを翳そうとして翳せたかどうか、なあやふやさが、数か一つかな細みで無いかな数か一つかな細みに絡み付きたげに、で無いかな数か一つかな細みを狂い無く、いや確かに、数か一つかな細みで無い数か一つかな細みを探り当て触れる限りに触り尽くし、尽くし残され直に磨り減り果てるしか無さそうに冷たく弛む窪まりの下敷きにされてやっと直ぐには消えずに居られる為の軽みを抱き留めてられそうな硬く透け濁って触られる厚みを拒むか逸れるかあやふやに、あやふやさを重ねようかにも、なあやふやまで拒むなら尽くし残さ

れを逸れて濁り透けな有りようを目指そうかにも、な透け濁りも濁り透けも厚みを拒んでは、な為の拠り処は予め失われ、にも、な有りもしない失われ痕を探るかに、な失われこそ何を失おうとしての失われかとも知れなさが触れられる知れなさの、知れなさも知れないとしか知れない向きを指す知れてさのあやふやさに窮まる、何の徴を兆さない徴のか切れない儘な甦りを繋げな重みと軽みの円みにのわれた、内もしか向かない途らさなめく筈の無い微かさを微かさに試して微匿さは斥けられ、な斥けなれこそかざなら微か異なって異なりを裂くかに異なか現れる微かさの異ならさが微微にさざめき已む已み痕かに被さって漂う、異ならなさの已む已まないの已まなさが淀み重なり澄んで影の無い襞を傾げ流すなら流れは直ぐに流れ已んで流れ已みだけが流れ異なりを拒むかに流れ昇るにしろ下ばかり向くかな喘ぎ喘ぎな姿を透け隠す姿を晒し拡げ、にも、な晒し拡げは、拡げられたくないかに晒され鈍まり上へも下へも逸れたげに逸れ損えもせず上も下も向かないなら上も下も無かろうな狭みの薄いだけの薄みの淡過ぎて光りを逆巻かせもしようかな色めきな限りな拡がりに、満ち穢れては清かな色を輝かせたいかな匂い擬きな薄みの消し痕の淡い影を塗り捏ね粘らせた艶を窪まり弛み脹らんで重みを孕んだかに何の軽みより軽そうに押し出させ、な艶の艶な儘に艶を離れ艶との距たりさえ拒もうかな危うさが、あやふやさの窮まりの重みと軽みの円みの重みと軽みを抜き落とせば後に残るかに

も先に消えたらしい円みの痕かな、いや、な痕は無かろうと有りもしない痕に消えようの無い円みの消えなさが消えなさを拒んで、無い円みの痕の無さにへ棄てるようなら、あやふやさの窮まりが破れ溶ける替わりに、独り破れないあやふやさの円みの消えなさを囲んで周り続けたいらしい色めきへの揺らめきと揺らめかなさのどちらでも無い兆しが、途切れ途切れに繋がれ、繋がれ厭きて淡い限りに淡くにずれ、な淡いずれの重みに透かし翳される襞の内に匿われた襞との異なりへ靡くかにずれ已み損なうずれの一つ限りかに細い繋がりを僅かにも望もうか、にも、（二〇二二年五月二十八日）

（な細みに匿われた…）

な細みに匿われた、奥の知れなさな儘な穢らわしさを明明と滲み丸まらせ、な丸まらせにしろ丸み異なりへの解き放たれの兆しに塗れさせ、唯の艶の失せた艶の痕の独り何の拡がりからも遠ざけられ窄められ果てた脹らみに艶を甦らそうと冷たく内向きな形（なり）を頑なに晒したいと装う装いの、頽れ逸って頽れ鈍る儘に、それを独りにしたその周りの何も無さを有る限りの悉くの犇め

きに換え損ねて有る限りの悉くの影の姿を塗り捏ねに懸かる、けれどそれら影の姿の何の事でも無さ過ぎに撥ね失せる、な撥ね失せに張り渡される無さ過ぎだけがそこでの力の限りの力を集めるなら、明明と独りな形（なり）は矯めら れるしか無かろう、な無かろうな形（なり）はその形（なり）を拒み直ぐ様それを抜け出してのその形（なり）で、な形（なり）の上辺の澄んで滑り果てるとも深みの濁り窮まるとも無かろうな象り難さを暗みで補わせようか、にもな暗みこそ暗みを初めに拒んで暗みなら有る限りの悉くの犇めきの外へとも暗みは、矯められるしか無かろうな明明と独りな形（なり）を暗ませ、な暗ませがその暗ませを拒んで拒み切れたか拒み残したかを必ず知れよう望みの明らかさは、何時までも罅割れ続けなければならないかに頽れ鈍る儘に頽れ異なり逸れ損なえば、その明らかな儘に明らか異なる儘に、な儘へな明らかさへと振り戻り浸み砕け、数は数を棄て棄てた数まで棄てられる処まで細かく散り分かれように捩れたか捩れないかの明らかで無さの波立つのも許されないなら、棄てられた数も棄てられ直す狭まりに拡がる限りの僅かな拡がりを乗り移らせる僅かさ、な僅かさの更に砕けるか寧ろ僅かさの為の触れられる厚みを象ろうと僅かさより僅かな僅かさの撥ね失せを探り取れようかな兆しへ溶け込む、僅かさ異なりを透ける僅かさの覆り、な、僅かさも届かないならあからさまに拡がる限りを拡がりなど知らずに侵して已まない、触れられる厚みの底までを抉るかな

象りようも無かろうな覆りの姿が、呼ばれずに現れたのか呼ばれて戻ったのか
な戻りなら幾度も戻り直され尽きたに違いなかろうな、形（なり）とも見留め
難い形（なり）を翳す程に隠し、隠し鈍り、な鈍みの内から形（なり）を破る
形（なり）の覆りの姿が姿を失い、な失い痕を覆す為かな、暗みばかりを煌め
かせたいらしい失せる儘の艶が滑り込み、にも失せた儘にしろ艶なら必ず艶な
向きへ奥まり向き向かって平たい限りに冷めては熱さの浅みを平たく浮かばせ
窪まり拡がりめいて狭まろう、な拡がりめく狭まりを平らかに遊ばせ乱したか
ろう色めきの、已んだ風さえ透けよう淡い匂いかな薄みが薄みへ溶けて薄みを
貫きめかし、にも薄みは唯薄みに至りたくて色を消しても至れない色めきの薄
み擬きに擦り替えられたか、な擬きにしろ色めきの薄みから色めきなど直ぐ様
失せ、なら失せた色めきから薄みも失せてような兆しに失せた色めきは淡さを
孕んで自らへ閉じるかに弾け透け、透け散って、に散り果てても為らないなら透
け淀む儘に薄い限りな窪みを覆う脹らみを求め倦んで色めきを失い改めたか、
な明らかで無いにしろ拡がりめく狭まりに彩りを流れ向かわせて平らかさを甦
らせたろう失せた色めきの、淡い限りにも匂うかに緊く濃やかな煌めきを潜ま
せるかに淡さを捩れ翳す姿は、姿から姿が薄く剥がれて已まないでは居られな
いかに崩れて重なりずれてずれ裂かれ鈍って鈍みを息かに吐くなら、吐かれる
息かごと姿は丸みを帯びよう切れ切れな徴を纏い纏い、切れる筈は無いと驕る

かな距たりに暗む偏りを求めようかにも窪みを覆う脹らみを耐え難い程なら見えない程に斜めにも掠め留まるに違いなくに、尚も重なりずれずれ裂かれ鈍り続けるなら、それは綾を為そうけれど何処に、な何処にの何処其処が斑に投げ棄てられたかに散らばる様を透かす、低みを崩さない平らかさに支えられるなら丸みを帯びる切れ切れな徴は繋がり合うしか無くにな、窪みを覆う脹らみの掠め留まりは擦り切れ溶けて円みへ向かう明るみそれとも明るみより明るい暗み、な暗みの明るみを孕み匿う様染みた、な姿に撫で摩られる円みへの向きの円みの欠片かな現れが示そう、拡がりめく狭まりの内に乱れるしか無いなら粗く大き過ぎる振りの色めきから狂い無く抜き出され狂い無さと遊ばされるかに丸過ぎる艶の鎮まりの鈍みへと、頽れ消されようか、な構えは構えばかりに、な構えばかりが頽れ消えて消え痕を圧し被うかに流れ向かうなら姿は失せようけれど、で、その姿から解き放たれるかに失せた色めきは失せ、失せた失せた色めきの何が色めきか、に、な何が色めきかへ浸み通ろうと何の色めきをも貫こうかな匂いを匂わせる徴の暈けるだけ暈けて翳んで、な翳んだ奥の狭まりめく拡がりの淡い明るみが円ませる暗みの真ん中に立ち現れる、繋がり合う為にだけ二つに分かれて直ぐに繋がって一つなら始めから二つな儘でしか無くに一つでしか無い、そんなそれがそれへだけ触れられよう厚みの輝きを内へ匿おうと、真上の暗みを向いた小さな円みを、真上の暗みを映した暗みから絶えず洩

れて数を奏で煌めかせる影を尽きず匿う小さ振りの舞い犇きを揃えて狂い無く
回し、そうして回される円みの内に自ずな戯れに覗かれる失せるも失せないも
無い色めきの色の散らばりを喜び合う喜びの隠され続ける為かに冷たい様を分
け偏らせ、な偏りをも戻し回せば回す程に、暗みを映す暗みの小さな円みは円
みごと明るんで明るみへ溶ければ円み奥まるしか無かろう、な円み奥まりは覗
きようも無かろうにも必ずその匿われる処に匿われ何の偏りも躱して凝っとな
限りに凝っと円み奥まってよう、とそれは覗くのとは違う見方でなら確かに
確かめられ明明と辺りを照らしたそうに潜むのさえ浮かんで来ようけれど、な
様を見詰められるのは必ずそこには有り得ない目ならでも無くに目とは違う
見方でだけ確かめられる様の明明さで、などと心付いたならそう心付いた心か
な心も無いなら、な心を無くしたそんなそれがそんなそれとも無しに、な無し
になど直ぐに擦り抜けるにしろ抜けられる何処も無い心しか無いのなら何処も
無いも無い辺りに、無いなら引き戻される筈は無くにも引き戻され、な限りに
は有る限りに有るしか無かろうなら、その有るに混ざり込むかも知れない重み
など見下ろすしか無さうに、の為だけの高みなら高みが直ぐにも見下ろし
たみに引き込まれ砕ける為かに酷く薄っすらとした凹みを高みでなど有る筈
も無さうに厚み弛ませるのは何、なんて尋ねられるのはその高みの他に無か
ろうに高みは黙り込む儘ではどうしよう、などうしようではどうしようがどう

しようを覗き込むしか無いのかそうでも無いのか覗き込み損なえたかどうかもあやふやに、なあやふやにがどうしようを呑み込んだのなら呑み込んだらしい徴が求められなければならないにしろ何処に、な何処になら向きがその向きを向くならそれを標（しるべ）かに、かにもな標だけがその向きへ向かってようならその標に遅れる悉くは恐らくは置き棄てられ、にしても置き棄てられてどうなるのかなそれをその置き棄てられたそれとして訝るのは、それを置き棄てた標かるの淡い痕を見据えながらその痕にさえ独り置き棄てられて行きそうに震え戦く、真上の暗みを向いた小さな円みの底なら底の辺りに沈み淀んでそうな、微かにも輝きたい兆しを滲ませるなら濡れて水より重い影とも紛う、その紛う奥に、真上の暗みを向いた小さなる円みをその円みより澄み渡らせて映し、その標かの淡い痕に自らを見出すしか無かろうにそれだけは避けようと透けて見えないなら見えない己の姿を探って、な姿を照らせる光りを真上の暗みより暗い中に、なら暈けて裸な暗さを引き寄せて居られればこそ何かの光りに近付けようかな望みだけは捨てずに、にしろ何も出来ない振りにそっと安らい静まる儘に、真上の暗みを向いた小さな円みを離れて行けようし行くしか無い、その行く先に明るみも暗みも拒む仮にでも虚ろを見損なって居てしかそこにそれの徴なら徴の端の徴を延ばせないそんなそれで、なそれは見損なわれた虚ろなどは直ぐに潰し、潰し痕も潰せば、な潰された潰され痕にさえ影でも延ばすに違いない

虚ろの影も無くに虚ろな虚ろに眩まされ、に、な眩みを映して眩む形（なり）の虚ろは自ずとその形（なり）に順って窄み、円みに至れない眩みの影の硬い厚みの触れられる欠片のようで欠片では触れようは無くになら欠片でも無さそうに、な形（なり）を虚ろな虚ろでは眩まされる限りに虚ろでも無かろうと見切られた虚ろへと偏る様へしかそれの徴の端を延ばせなくては、そんなそれに眩まされ返されて仕舞うように眩んでそんなそれな儘に眩むしかない眩みを、その眩みを眩ませ続けて已まなくてその眩みと距たって係わりも断たれてよう眩みへと、さらりとも出し抜けに映し換え、な映し換えでは鮮やか過ぎようかに直ぐに、な映し換えを匿い晒し翳すしか無くに剥き出しにあからさまな眩みの必ず触れられる硬い厚みへと眩みは狂い無く収まり留まり色と距たって色めきを拒む色を色めかせ失せさせ、な失せさせられな様なら様に任せてその様の儘に色めかせられもしようかと恐る恐る試みるかに、取り返しも付かず映し換えに遅れては徒にも映し換えに抗い続け、な抗いを緊く包む儘に疾っくに動きを奪われ、な抗いに平らかさに食い込もうにも弾かれるばかりな眩みの、輝きなら輝きにしろ何の明るみも齎さないし暗みも拒む、な狭まりに狂い無く犇めく眩みな儘にも、眩みを隠して眩み現れた姿かな色めく様を、その色めきに明るみも暗みも匿い晒し、狂い無く狂い無い犇めきの狂い無さを継ぐなら偏るしか無くに、かな狭まりを拡がりめかす兆しは、穢れる程に浄められて上っ面か

ら穢れも浄められも除けられたかな仄かな穢れが仄かさに浄められる明るみの平らかさを装い、なでは直ぐに透けるしか無い装われた平らかさの奥に同じ平らかさが穢れも知らず浄められもせずにまさか裏向きに窮められたかな強張った平らかさに現れくすみ、をくすませ現れさせたくすみ現れとの距たり、それとも距たりなど狭まりの拡がりめかす兆しに見出せよう筈も無いなら異なり、いや狂い無い偏りに何の異なりが向かい現れられよう、なら、な距たりでも異なりでも無い、な無さの偏りの狂い無さ、な無さを貫き傾げてただ偏りなだけの眩みのその偏りへでしかない放たれ、にも偏りが放つとも知れなくにも偏りが放つしかない眩み、な眩みが、兆しの平らかさをくすみ現れさせて放たれる眩みならその眩みとさえ眩み異なってよう、にも、な異なりは、予め眩みの偏りへの放たれな眩みに擦り込まれての異なりで、な異なりでは眩みには異なりが異なる儘なだけの異なりでも無いなら、な眩みが眩みな儘に異なりへの偏りに違いなかろうな兆しだけが、な事を貫き抜けて兆し異なるなら、な兆し異なりと異なる、眩みの眩みの偏りへの放たれの狂い無さ独りが、独りなら何処へも切り出されようかにな何処へもなど何処にも無いのを狂い無く暴いては、独り何の異なりとも異なるしか無いのならさも悉くの異なりから弾かれ、な弾かれに絡んで異なりとの異なりに活き活きと躍り鎮まり、に躍らせ鎮まらせたくすみ現れの薄い限りな窪みの艶めきに、放たれた眩みの眩みへの偏りは、偏り

の重みに暗みを裏返しただけの硬く暗みを孕んだ汚れを際立たせる唯の白かへ色めこうかにも眩みさえ鈍らせ、にも眩みへの偏りでは鈍りようも無くになく無さを刃のような重みに換え、くすみ現れの窪みの艶めきを幾つかに切り裂きに懸かる儘に、偏りを幾つかの狭まりの平らかさに切り分けよう、にも、な切り分けは直ぐに硬く繋がり直って偏りをすっかり包み込み、にも、な包み込みこそ一つ限りの平らかさに従うしか無さそうなら裏返されるかに切り分け現れ、な現れへの眩みへの眩みへの偏りが一つ限りの平らかさに切り込まれる儘なら、な眩みへの偏りはそのされる儘に窮まるしか無かろうかに要らない白に拠る輝きへでも自らを眩まそうかな兆しを放ち、放ち損ない、損ない整え、整うなら崩れ、な整い崩れに消って放ち直し逸り、逸り鈍って、にも兆しは兆しの眩まりを貫いて兆しの放たれに際立ち戻り、戻り逸れるしか無くに、くすみ現れと何が違うのかな要らない白に拠る輝きを真向かいに振り返って、かとも振り返れたかどうか、なあやふやさに惹かれて偏るなら、な偏りに被さる眩みへの偏りを自らに狂い無く映してまた眩みへの偏りなら、そのささやかな甦りの繰り返し、繰り返しの揺り返し、揺り返しの繰り返しの窮まり無さの窮まり無さなど知らぬげな上っ面の滑るように凍る薄みの乱れが、な窮まり無さを破り破り蠢いては果てて損ない繋がり尖る輝きのくすみ現れては消え煌めく欠片かな、にしろその欠ける徴を見せなくてはくすみと煌めきの交わらせでしかないのを暴

き翳して揺り返しの繰り返しから凍る儘に逃れようとする色の色に届かないざわめきを滲ますようなら、な音かにも音なら音音で無いなら音で無いを殺すざわめきの滲みこそ何の色さえ滑るしかないその上っ面に磨きを掛け逸って磨き鈍り、な鈍みに縋るしか無くに、波打つ響きを遠くへと裂け拡げる要らない白に拠る輝きの狭い限りに狭さに抗う丸い隙の奥まりが匿う影に寄り添うなら寄り添えて、けれど寄り添うまでで、丸い隙の虚ろが外を外して内ばかりを内へ向かせてくすみ現れの窪みの艶めきを擬くかに甦らせ、にしろ艶めき擬きでは少しも艶めかないのも明らかならくすみ現れの現れがくすんでくすみは薄い窪みの底へ汚げに撫で付けられては馴染んだ艶を晒し、艶は晒され弾んで艶の現れから剥がれ、やはり要らない白に拠る輝きに撒き散らされるしかないかにも、それを拒もうと自らを触れられる厚みに幾つかに切り出すなら、それぞれは粘っこい影に別れて影ごと口を開けるかな丸ごと剥き出しの裂け口を晒し、黙り喚くように奥まり損なって狭まり偏り、にもまだ僅かに艶めくならそれぞれに平らかな鬟を含み隠そう、にも鬟はどれもどう捻れようと隅隅まで明るみに拡げ晒され愈愈平らかでは、鬟かも怪しく鬟の縁縁に透かされる淡い影の名残かにくすみ染みて褪せ沈み、それとも沈み褪せる振りに僅かな艶めきを淡く鈍り窮まらせ、な窮まらせの底を覗き尽くすかな明るみが明るみ拡がり已むなら、な已む儘をそっくり映すかに艶めきの鈍り窮まりは艶めきを捨てて明るみを象

ろう、な象ろうな角めいた揺らめきが、数え急かれる角めきの数えられるなら数え損なわれて破れ傾がれ、揺り返しの繰り返しを狭く映す鋭過ぎて角めきとの距たりに暗んでその暗みに溺れる裂け口を折り重ねて丸い隙の奥まりを幾つも乱れ並べ交わらせ、な様を隈無く狭く照らす光りの重みが呼び込まれ埋め込まれるなら呼び込んだのは、その光りを拒んで光りの中にくすみを透かすように重ねて深さを装う窪みを呑んで匿い翳し這い回る襞の為の頑なに平らかな厚みの乱れ揃いで、にも、な乱れ揃いの揺らめきまでも舐める光りの重みの汚げな粘り振りに揃えようもなく厚みの乱れを平らかに崩され、平らかは光りの重みを継いだろう、に崩される儘に要らない白に拠る輝きを今更に欲しがるかな、重みに抗う音でも立てるのか、な様を自ずと嗤いながらに、な音を厭う光りの重みの汚げな粘り振りのせいで厚みの乱れの崩されに苛まれて影の湿りを濃やかに浸み拡げる襞の揺り返しの繰り返しは、な形（なり）を丸い隙の奥まりに圧し縮められたかに象り拡げたか象り損ねたか拡げ逸れたか、にも、なあやふやさで切り返して丸い隙の奥まりを透かし澄ませ、要らない白に拠る輝きを、より汚げな振りも厭わず清かに確かに斥けて明るませ改め、にも、な襞の形（なり）こそ、な形（なり）なりの奥まりを匿おうなら、な匿いの小さ振りを溶かすかに奥まりは翳されて触れられない厚みに定まり逸るしか無く、な走る水のような定まりこそ襞は求めていたろうとそれを歓ぶ、音を厭う光りの重みを食

い破る光りの重み異なりがその異なりを映して襞の形（なり）の奥まりをも裏返すかに異なり損ねるなら、な襞の形（なり）は、な形（なり）ごとその眩みへの偏りへと光りの重み異なりに吸い寄せられそれとも捩切られそれとも巻き込まれ恐らくそのどれでも無くに、な形（なり）の奥まりを匿う小さ振りに収まるか収まり損なうかまるで食み出すかして、な形（なり）の奥まりは奥まり異なり、にも、必ずどのように襞は襞の形（なり）な儘に、な儘との異なりへの偏りへと拡げ奥まり狭まり暈け鈍ろう、な明るげな異なりの異なりの奥まりへの開かれは淡くにも望まれようけれど、な望まれを覆す襞の襞なりの襞の奥まりを貫く平らかさは、崩れ掛けながら襞めいて異なりの奥まりへの開かれを、その予め砕かれ傾がれ影の姿へ靡き置かれたかに開かれ異ならせ、にも、な異ならせは開かれを開かれより更に開くに違いなくに、開かれとの異なりの揺り返しの繰り返しが襞の奥まりの平らかさに襞の奥まりを開き返そう、に開き返される度に裂かれ、裂け口を繋ぎ繋ぎ、な形（なり）こそ襞が襞を貫いて襞の形（なり）を失って唯平らかさに貫かれても襞な襞で、な襞の何が襞なのかと襞は失われた襞の形（なり）に眩んで震え、震えるからには少しも震えられず震え異なるのも為らないなら、な形（なり）な儘な形（なり）への眩みへ眩んで偏るしか無くにも、な偏りもまた眩みへの偏りでしか無く、な眩みへの偏りは襞の失われた襞の形（なり）を激しく侵し潰し独り激しく眩みへと偏り、

偏り尽くせないなら眩み尽くすのも諦めるしか無くに眩みへの偏りに狂い無く偏り、そんなそれ独りが独りの狂い無さを狂い無さの為に狂わせて、ならば、な狂わせこそ狂い無い狂わせで有るしか無くに、で有るので無も無く独りそんなそれで、それはそれへ眩んで、その眩みへの偏りの揺り返しの繰り返しを拒むか受け容れるかしか無くにどちらからも逃げ果せたかに、果せた果てに狂い無い狂わせを狂い潰したかな乾き果てた狂わせを狂わせ損なわせたかに、それ独りへの揺り返しを繰り返し、それとも繰り返しなど要らず一つ限りの揺り返しに独りは独りに沈み溺れ消え尽き、な消え尽きの犇めきの消え尽き無さの内に畳まれた有り余って傷付くばかりな乱れた艶の押し寄せの繰り返しに眩める眩みも尽きるなら、な尽きた眩みでも追い眩めようかな眩みの尽き痕をせめて探る眩みに縋る振りを乱れた艶に撫で付けては、消え尽きの犇めきの消え尽き無さを解そうと、艶の乱れと乱れの隙を埋める虚ろな艶の刺刺しい輝きを柔らかく均す、一つ限りの揺り返しに独り消え尽きる限りには一つ限りで有り続けるしか無いそれ独りな独りへの偏りは、独りを眩ませるばかりに眩みへ眩んで偏り、な眩みへと偏れるなら一つ限りに偏りかも知れない偏りは、な限りには必ず一つ限りな偏りへと眩み溶けては、溶け眩みな形（なり）を象り異ならせ、な異なられた象りの、数えようとする限りには数限りない様の犇めき叛き合いの混じり合うなら平らかでしかない平らかさと光りを挟んで分け距てられ

る、な平らかさを裏から支えるかな、光りを厭う余り光りより明るい襞の展べ拡がりの、狭まりへとひたすら偏って眩む眩みの縁を眩みの外へと流れ向かう繋がりの細い翳りかな形（なり）は、な形（なり）ごと形（なり）を細ませ、な細みの唯一つかな現れへの望みが襞のその影まで含めた厚みを溶かし滑らせ、にも襞は襞と流れ過ぎ、過ぎ果てれば戯れかに裏返りめいて何の象りの様の犇めき叛き合いより平らかに、な平らかなだけで襞の姿を要る筈も無く晒し、にも、と晒される為には要る筈も無くでなければならない襞の平らかさの他に細みの唯一つの現れへ向く兆しも無いなら無いで、にしろ、な無さに縋れば、な無さは必ず毀れ失われるに違いないなら、戯れに裏返りめいた裏返りめきへ、な無さを放って、な無さもまた要る筈も無くさせようとさせるしか無くに、な無さは、な無さに呑まれようか、なあやふやな見通しもあやふやではあやふやさしか見通されなくて何も見通されないも同じと、な無いも同じに確かなあやふやさだけに届きそうな、眩みの外へと流れ向かう繋がりの細い翳りかな形（なり）の細みと通い合うしかない徴が、異ならせられた象りを擬えて犇めき叛き合い、にも、そんなそこで何を叛き合えようかな訝りが咎めるように徴の犇めきを鎮まらせるかに波打ち損ない硬く固まるようなら徴は一つを残して流れ去り残された一つは酷く柔らかく丸い光りの拡がりかに拡がりめく狭まりに内向きに、な内へ沈み絶えるかにも外へ向き懸かって硬い光りの硬さへとくすみ凋

もう、かな兆しは細みを細みと細ませる狂いを纏わらせるに違いなく、にも徴一つはその細みが孕む狂いを光りより硬くに突き抜け綻び穴の開き掛けた細みの狂いを繰（く）るように巻き付けては唯透けようとして何の徴かの徴を失い、その徴に失われた徴を求めるしかない徴の形（なり）を標そうと透ける限りの透けの内を更に透けるかな動きへ傾きたげに傾き逸れれば透けさえ失うかそれとも透けなど細みの狂いを映しただけと暴かれようか、と細みの狂いが傾き逸れる徴に傾れ込むなら傾れ込むで、な傾れ込みにはきっと狂いばかりが先走ろう、な先が何の先とも無く先だけで先へ向かう先を操（あやつ）れるのは置き忘れられたかなあやふやさのあやふやな確かさばかりか、もあやふやなだけなら先が操りようの無い先を操るしか無いかな狂いの紛（まが）わしが傾れるようにに紛れ込もうけれど、な狂いの紛わしには何の狂いも無いと見透かされる見透かしに滲み込む狂いが狂いでしか無いなら何の狂いも無いかに内に隠した筈の細みを拒んで僅かずつ細まり延びて狂いの先を埋め、埋められる程に先は失せても失せる程に先なら先より先かに先で、な先にさえ見失われ兼ねない先が先から先をさも後へと顧みるなら、そう顧みさせる狂いまたは狂い無さが共に失せた痕が丸みを抜き取られた丸みが丸みの無さを際立たせるかに据えられよう、かな徴なら徴が危うげに丸みの抜かれの奥の失せた奥に薄っすらと溜まり掛ける一つ限りな動きを恐らくは動き誤り、その誤りのせいで徴を抜かれた徴

の徴が徴を抜かれた徴の徴を標すしか無くに徴なら動き誤りの動きは誤りをさ
も憎憎しげに呑んで粗い動きだけで徴で、にも、な徴こそ動きに呑まれて徴か
ら徴の様だけ残して後退る、な後退りの、丸みを探し求めて眩むなら眩む細み
なら狂うしか無く、な細みの狂いが細みも狂いも覚束なげに細みの狂いの幅を
測るかに狂い無さをたっぷり含んで揺れるか揺れないかな二つ限りのあやふや
さの確かさに縋り寄り、揺れると揺れないは互いの幅を増し合おう細みの狂い
に被さり懸かって懸かり逸れれば幾つも平たく傾く何も無さを晒し輝かせ鈍る
隙を拡げて切れ込むように斜め深くの逃げる高みへ隠れるように裂くばかりで
は、な深みに請われるかな襞のせめて影でも見留めたい縁が窺われるしか無く
にも窺われないなら深みは窪みの底の窪みの見難さかな深みから逃げ去る向き
に裂かれた隙に沿って深み直しそれとも深みを拒むかで、孰れにしろ自らを断
つように深みは深みとこれ見よがしに深深と距たって距たり已まず、襞の影の
訪れの待たれる淡い翳りの匂いそうなその深みとの距たりの狭まりへ現れ拡が
る深げな色かを貫き透かし、それとも色に深みなど有り得ないなら色とは異な
る異なりの色の色で無さの深げな隅に隠された重みを掬い計り、計り鈍り、鈍
り逸れ、にも重みは計られる限りには重みの失せたより軽くに、な軽みが軽み
だけを孕んで残るなら何の軽みより重みでしか無くに重みな切りか、な重みに
は耐えらなくて重みでは内に孕まれた軽みも毀れ重みごと頽れようか、な頽れ

ようかなだけに懸かる重みなら重みでは重み異なるしか無くに軽みを背に沈む向きを向くその向きだけが重み異なりで、それでもその異なりのまた異なりの兆しが重みの向きを探り取れるか、な重みの重みでさえ無くにも重みへも重み異なりへも墜ちて消えて行く様の影かを深げな内へなら何処までも匿う狭く微かな徴、にしても確か過ぎて何の徴とも無くに一つ限りにそれ一つとの係わりだけを専らにして消えるも動くも拒む、狭さの内ばかりを向き逸って内へとだけ重い震えを畳み込ませて狭さを拡げる限りに拡げる奥の狭さの、広く周りの外を白ませる重さと紛う深みの匿われに行き着くしか無さそうなら、徴で無いとだけ標されるかな徴、な徴で無いだけの徴が何の徴でも無くなる成り行きが、徴の痕も残さずに徴の痕も残さない痕を残し果せて後は消えるしか無い姿を翳し尖り沈み暗ませる、その暗みに弾かれる弾みに暗みを裂くかに暗みより暗い暗みの底の光りに映し取られる有り得よう筈も無い色を様様に集め犇めかせ已ませる明るみは、有りもしなかった色の犇めきの替わりに、明るみの向く向きの果てに映さずには暗みさえ失うかな、明るみより暗く他の何の暗みより必ず明るい鬟の反り窪むように低く平らかに映る限りに遍く流れ拡がりめく様を眺め求めるしか無いながらに唯明るみ自らの暗みしか映せないなら、明るみごと鬟へと映り換わるかな有りもしなかろう動きに惑って、それともその惑いまでが明るみと知れてようかな惑い定まりの厚みに眩めば、明るみから未だ姿の無

い襞までの揺らめきの張り渡されめく乱れの奥まりは、その眩みに肖りまた少
しでも縮みたそうに震え逸れ、逸れ渋らされるなら震えを柔らかな厚みと浸み
通して微かに円みを艶めかせようか、な艶めきの円みに明るみがそっくり映し
換えられたか、そう望まれる流れの途絶えるだけで明るみはその艶めきの円み
に抛り棄てられてようか、に、却って明るみに抛り棄てられる艶めきの円みか
も知れない、な艶めきの円みの失せ痕らしきその明るみが明るみに眩んで薄く
低くへ明るみを暗みと流す、な暗みを暗みと明るませる明るみの在処なら、遍
く円みしか無かろうかな、にして遍く円みから独り低まって明るみの内に匿わ
れた様様な匂いを交え構えて厚ませた厚みの無さの打てば打った外を砕いて内
へとばかり躙る響くかな硬さを白み果てた音の欠片のぞんざいな積み上げかに
棘棘と静まらせる静まりかな、にしろ、な静まりの遍く円みへ透き通るのを防
げないでは明るみはその在処ごと明るみを抛り棄てるまでに溶け失せようか、
に、静まりの象りかな、な象りとは必ず異なろう艶めきの円みの、艶めきの円
みその儘に象られたその失せ痕が、その痕の失せを明るませる明るみから切り
離されて幅を利かせ、利かせ頽れ、その儘に象られ損ない失せ映え、さもその
儘から自ら身を躱すかなその儘に凭り掛かるかにその儘な儘をさも惜しみなが
らに失い、な失せ痕を等しく分かれて被う明るみと暗みの並びの狭さを厭って
輝くかに頑なに薄汚れた流れの境目の僅かに裂けて波打つずれに鋭く映し逸れ

る途切れない刃を延ばすような、何の汚れも激しく斥け滑るようなその平らかさと捩れ無さから逃れようと円みを求めるでも無く拒むでも無くに円みの円みである限りな円み異なりを確かな音さえ求めて切り裂きたいかな望みを円み異なりに切り裂かれるかに苦くも円み異なりの真ん中を透け損ない鈍って透けを異抜ける向きへ向き果てて已むしか無くにも已み際に留まる振りで円み異なりを異なり分ける先の円み拡がりへの暗みを振り切ったろう明るみだけが円みの内を円みの縁へと捩切り続けるかに狂い無く繰り返される、にも繰り返され已んで已み繰り返される、な、数えられる限りには数を拒む、数えられない限りには一つ限りの同じ数を繰り返してよう、に、な繰り返されを斥けその斥けが呼び込む微かな震えさえ拒んで閉じ開かれ尽きる弛みに換わるなら、な弛み映えの透けを透け濁らせて濃い深みを光りの穢れかに重げに投げ上げ損ね落とし落ち着かせて丸みの眺めかとも酷く温い、な、穢れを進んで纏えばずっと温（ぬる）かろう温みの縁はどちらへも丸まり込むのか縁と縁の際の隙を何処までも先を丸まらせるかに逃し逃し為、な温みの先使いばかりが映え汲まれるなら、先の丸まらせの虚ろさが先を使い果たし先の痕に窪み粘って粘りを粘りに粘り包（くる）ませる、な包ませのせいで襞なら襞の儘に爛れるかに輝く暗みを放って自らを匿い定めたい、自らの影を呑み尽きない尽き無さに縮み続けて幾らでも小ささを吸い上げ小ささに塗れ吸い上げに傷付く小さ振りが、僅かにも動けなく

て知り得ないどちらへさえ消えられない形（なり）なりに、な形（なり）など
をもきっと何処へか産み棄てたろう既に已んで汚げな輝く暗みの残り様それと
も残り無さとの距たりを虚ろに測り定められようか、にも虚ろでは定め尽きな
いなら尽き無さから僅かずつ滑り逸れるかに尽き無さそっくりに測り窄み、そ
の距たりの放たれた虚ろを突き抜けて暈けるしか無さの、狭さしか向かないの
は明らかな取り敢えずの大き振りを逃しながらも食い破り懸けては円みの綴じ
合わせかとも重なり果て、果てずれて、なずれのずれしか無さげに剥がれ頽れ
戻る繰り返しを、な繰り返しなど有る筈も無くに拉ぎ逸る遅さに撃たれ後先さ
え奪われ退けられるかに、呑み尽きない自らの影の尽き無さへ取り込み損ねる
しか無さへ追い込まれ、小さ振りの内深くの奥からの、な奥こそ尽きない虚ろ
の虚ろを向いた重く浮かれた柔らかげな撥ね回りかと、繰り返しの揺り返しが
狂い無く棘張りながらも取り敢えずも大いに怪しくなった大き振りを大き振り
故の暈けそのものかへと測り挫け探り淀む他に無いなら、な他に無さから無さ
の他の何かを汲み出せそうな兆しでも先には兆そうかな既に毀れ掛けてよう温
さの酷い儘と、虚ろの虚ろを向いた撥ね回りの柔らかげとが、嵌まり合うかに
溶け挑んで挑み果てるまで已まないかで、な、他に無さの見え過ぎの行き止ま
りかな狂いを含もう狂いと狂いの噛み合いの狂いそれとも狂い無さの、恐らく
は狂い無くぴたりと狂う、な狂い無さから、な狂い無さの内の狂い無さの内が

内故の狂いに狂う狂いから逃れ已まない狂い振りに弄ばれる、狂いそれとも狂い無さの揺り戻しの繰り返しが、汲み出せそうな兆しかに兆し向かって来そうなら来そうで兆し透け過ぎ、な透けの貫かれる向きが唯一つ限りに、一つ限り故に消えるしか無くに消え飛び跳ね、に飛び跳ね消えの消え無さの飛び跳ねが、そんなそれから飛び跳ね消えるしか無くに消えの襞を一つ目の襞の内に刻みその一つ目に刻まれた一つ目に繰り返し襞を刻んで襞は爛れるようにも狂い無く外を向く内へ一つ一つあからさまに剥き剥がされ已まずに襞で、に爛れようも無さをあっさり晒せば、飛び跳ね消えの消え無さは飛び跳ね已んで已み消えを一つ限りの向きへ翳し尖っては丸みを求めて俯くなら俯くで向き逸れるしか無い向きへ已み消え已み、な已みだけが独り抜きん出るかに一つ限りに丸みへ食い込み続けられる震えを際立たせられるかな振りで已み已んで、に已み果て切れ無さに留まり果てるかな已みの、已みの形（なり）でしか無いのも明らかで、にも、な已みの形（なり）では形（なり）なりにさえ已むか已まないかは形（なり）が形（なり）の儘な形（なり）を続けられるかどうかに懸かってようか、なり危うげな見通しに頽れる形（なり）を貫く振り裂け振りが已みの形（なり）に為り換わったに違いなくにも飛び跳ね消え、消え痕も残さないならその痕も残らなさの明るみも暗みも拒む酷く見易い眩しさに添って消えを一衝きに覆した覆しの映えが、消えへの一衝きの艶そっくりの一つ限りの已みを磨き上げる

かに自らを転げ現すなら、な已みはそうして何の形（なり）からも放たれよう、
と尚も危うげな見通しそれとも見通され無さにその儘な形（なり）を奪われた
ものが探られるしか無くに探られ淀み、な淀みなら暗みへ行き着こうかな奥ま
りの重みが奥まり異なって、薄みを剥ぎ現しそれとも薄みに剥ぎ翳される虚ろ
へかな一衝きの艶そっくりの暗みの覆され、にも、な覆されへの偏りの僅かに
傾く薄みなら薄みの清かに凍るかな拡がりばむ蠢き已み、かの兆す様の淀みな
がらもまるで危なげの無い已みなど知らぬげな一展べの流れ過ぎの狭過ぎる果
て無さに萌え映えるかな映えの已みの覆し、な覆しの映えも映え已めば、な映
え已みは、見窄らしさを輝かせる丸みに被さられてさえ力無く口を開けただけ
のような暈けた隙の淡く白けた奥まりの緩やかに傾ぐ深まりでしか無く、な映
え已みの深まり傾ぐ儘な先行きの徐に円みを求め重ねる畳み込みの濃い限りに
濡れるかな艶の脹らみは、見知らぬ古さに爛れ染まるかに頽れ、平たく更に隙
を鱗を剥ぐかに圧し拡げて荒みそれとも艶を新たに急ぎ塗り込め場凌ぎに触れ
られる厚みをざらつかせ、にも、な様をさらりと受け流し隙の平たさに清かさ
の揺らめきを暫し宿らせるなら、な清かさの揺らめきこそ始めから円みの確か
な姿かに明明とそれ一つで、なそれ一つ故の底無しの暗みそれとも先行きの明
るみ、な暗みと明るみは互いの影と影の失せまで潰し合うかにぴたりと同じで
有るしか無くに、な事では消えるも同じな同じさを堪え切れずそれ一つは暗み

それとも明るみから引き下がるように距たって消えたろう、に明明と、な消え
たろうだけが一つを一つで無いかに激しく騙し込むかに一つから泳ぎ離れるな
ら、始めから何の距たりも無かったに違いなくにな円みなら円みは円みを瞬く
間に消し痕も残さずに消し、な消しの映え一つが、その一つ限りに唯一つで有
るしか無いのかそうでも無いのか、にしろ消しの限りな有る無しとは何の有る
無しか、なあやふやとさえ定まらない拡がりそれとも拡がら無さの互いへの影
の移し合いが綾なす鬟の爛れそっくりな狭まりそれとも狭まりの浅はかな欺き
を剥がす切れ込みの鮮やかさ、に違いなくにも、な儘に鈍りくすんで淡くも淡
さに酔うかに失せ眩んで、な失せ眩みに囲われる限りでの鮮やかさ、の重みを
それを引き受けるしか無い己が身かに裂き、かとも、裂かれたのはどうにも己
が身の他に無い裂かれた身は裂かれても一つ身な儘にも裂かれたなら必ず某か
の身で無くてさえ二つで、な、にも重みは裂かれようも無くそれ限りならその
置き棄てられたかな重み限りに靡く消された円みの消しに靡く円みそれとも円
みで無さの二つで有る筈の無い一つで、にも、な一つが一つなのは二つで有る
筈の無さの映えの一つ限りの狂い無さに拠るしか無いのも明らかで、な事では、
な明らかさは重みなら唯重みだけの重みとぴたり重なるかに奥めいて明らかさ
の底に明らかさの尽きるのを探らずには端（はな）からくすむばかりで、にも、
一つ限りの狂い無さが明らかさの奥めきを裂くかし、くすみを失せさせ係り、

にも、くすみ端（はな）を追われても淡く散り散りと滲み拡がるくすみのなだ
らかなくすみ異なりへ向かう向きは一つ限りも離れ数を得誤ったろう細みな形
（なり）を様様な偽りの色合いを練り出してようにも一つ限りな纏まりを装っ
て翳し凝らしてよう、に、な煌めきを遠ざけるかに煌めき惑い鈍る細みは、数
えられる限りには果て無く数えられるしか無くにも数とは異なり数異なりの数
えられようさえ係わらなくて一つな、な一つからその一つ異なりへ換わりよう
も無くに、数えられる一つと初めから異なる儘の、唯一つと一つも異ならない
一つな形（なり）で脅すかなら何を脅すのか、な狂い無さを狂いと欺き紛わす
細み振りに圧されては一つが一つの明らかさの奥めきの裂け目いどは脅される
より先に疾っくに消え失せ、にしろ消え失せ痕を一つ限りの狂い無さが装い狂
うかに一つ限りに何の向きをも拒み捲って滑り拡がるなら、な狂い無さに撃た
れ細みは一つな形（なり）な儘に頽れるしか無かろうけれど、な様こそ数も一
つもその異なりも離れて独り、な独りに拠って独りで有り得ずに細みな限りそ
れとも細みな限り無さで、な限りか限り無さかな細みの、な細みが細み続ける
には狂い無さへと細み異なるしか無かろうに異なれない、避けようの無い狂い
映えの、にしろ狂いは狂い無さそっくりに僅かなら僅かな狂いの内への外へそ
の映えを翳し匿う匿い振りは翳し損なわれる度に繰り返されようか、にしろ、
狂いの内への外になど何の映えが映ろうかなささやかな程に棘のように鋭い疑

いこそ一つ限りな狂いに違いないかな狂いの外を顧みる向きへ墜ち懸かる透け
るような覚えが細みに縋りたいかに、細みの面影も無い細み振りに絡み付こう
と細まり逸れ揺らいで、狂いの内への外の内なら内に還り戻るかに靡いて細み
と狂いの互いの映り映えを照らし合わせ誤り鈍り、な鈍りの誤りが細みと狂い
の先から引き込まれるらしい光りに準えられた光り、なのでそれは光りで無さ
をも必ず光らせる、な準えな光りへの拒みを孕む細みの、細みを拒む細みが、
準えな光りの光りで無さを暴き晒したいかに、な光りで無さの上っ面から内深
くまでを裂き拡げる勢いの暗みの潰れを貫き反り逸らす、一つ限りな狂いの在
処をまるで見失ってまるで裸で、な裸に傷付く限りにだけ裸で、な様に凋み暈
けるしか無い透けるような覚えの覚えの失せた失せ痕が延びる限りに自らを裂
き抱え狭め、な裂き抱え狭めの繰り返しを強いられてようかに何処からか強い
られへの巻き戻しの企みを孕むかな重みを拒んで横を向きたげな窪みの、その
縁の淡く白んだ影の艶は、明らかに光りに準えられた光りを準え冷たく濡れる
ようで、な濡れは爛れるようで、な程に爛れた儘かに硬くぎこちなく爛れ頽れ
るようなら濡れから誤りかに白ばみ改まって覚えの失せた失せ痕の裂き抱え狭
めに圧し被さり懸かる光りに準えられた光りの準えは、その圧し被さり懸かり
に圧し被さられるかに準え異なって搾り出すように光りを全て吐き、と欺き損
なうかなら光りがそれを吐いたに違いない、の、それがそれで有る為にだけ有

る危うさの偏りに凭り掛かるしか無いそれは、なそれのそれで無さを抱えてそれ異なる向きへと吐かれた光りかに暗み潰れたい望みを煌めき隠し損ない暈かし、に拡がりめく狭まりに一筋走り鈍る爛れ頽れ痕の細みかな濡れに準えられた艶を追ってさも取り返しようも無くぎらついて古びてそうにもう一つのそれかと欺くかに爛れ ばみ、にも、な爛ればみの常な新たさは追う艶を絶えず映して熱く濁る厚みさえそれの奥から剥き出させそうで、にも、な厚みは、何の影をも恐らく遍く刺し貫いて穢れ果てた透けの偽りの影でしか無くに失せ、偽りも偽りで無いも無い透けが厚みに取って換わる換わり端（はな）に映える、微かな爛ればみもその濁った影まで消した爛ればみ失せを、濁り果てて澄んだ色を薫らす薄い食み出しかに微かにしかし狂い無く厚みをびっしり充たして脅すかに晒すばかりなら、な脅しこそ濁り果て澄んだ色の薫らす映えそのものならそのもので、で無いなら明らかにそのもので無いかにも、なそのもの限りの明らかさに荒げに窮まって、にしろ、な窮まりは窮まる程に窮まりの先を明るく指し開こうなら恐らくは何のそのものも消え失せ已まず、な已ま無さは動きを纏うしか無くに纏い已んで纏われた動きを窮まりの先を嫌う向きへと吸い取り彫り込み窄ませ綾を織るかに已ま無さの縁の狭い環に追い込もうか、な環など有つたところで揉み消されるしか無かろう、な揉み消しへの向きを自らの映えを明るませる為に仮にだけ穢れを棄てるかに欲しかった何にしろ消え失せ已まな

いそのものの已ま無さの軽みを舞わせ取り込むかに高みへ拡がるかな重みに擬えられた細みそれとも透け、それとも、な細みそれとも透けを透かし細ます明るみを標し暈かすかな眩みの徴へ向かおうとする僂さの欠片だけは数えられるかに僂げに数知れなげにもあからさまに数を匿う向きの崩れ昇り、懸崩れ昇りかみ滲み出される眩みが明るみを標し暈かすかな眩みの徴を溶かし窮けて崩れ昇らの向きが乱され妨げられさえするようなら、な動かされを動き窮まり已ませようと導く眩み、に違いなかろうけれど細みとも透けとも距たる、その距たりの高みの斜め裏の穢れへ回り込もうとする淡く砕け掛ける勢いの纏まりを断つ丸みかな艶と艶の隙の閉じ様の上を薄っぺらな虚ろを晒し掠め走り去ろうと艶との異なりを艶めかせる、な眩みの眩み窮まりへ誘（いざな）う一つ限りな向きの映えの弛み乱れて乱れの深み尖りを尖り鈍らせ競わせ角張り重ねて動きを取れなくさせる奥まりの乱れが、その重みばかりを残すかに細まりそれとも透け、にも、な細みそれとも透けはずたずたに破り裂かれる儘に奥まりの乱れの内に入り損ない逸れるしか無くに、小さ振りを強いられ瞬く間も無さそうに磨き出された眩みの円みの前しか向かない欠片の外面（そとづら）の狭過ぎるせいで円くにしか翳されない円みの虚ろな奥まり、な虚ろに穢され損なわれて奥まり異なりの凝り固まりに窮まり已むしか無い、な円みの虚ろな奥まり異なって唯円みの偏りを前のめりに翳し窮め已む円み異なり、に添い随って円みを

脅し続ける眩みの、眩みなら必ず眩む向きへの眩みの筈が、一つ限りな向きがその向きで無いのは狂い無く明らかでそれとも明らかな狂い無さが眩む向きを狂わせ一つ限りな向きから拒まれるしか無くに向き異なるしか無かろう、にも、それとも、かに、向きの一つ限りなを一つ限り異ならせる眩み、に、な眩みなら眩みでは無い、な、無さの眩みを抜け出そうと尖り裂けを繰り返したげな眩みの眩みとの距たりに射す明るみは、細み乱れるしか無くに明るみ暈かされ、一つ限り異なる向きに間近に滲み拡がり迫る穢れの清かさを薫らせる透けの厚みの揺らめきそれとも揺らめか無さな透け失せに乱れ奥まり、な乱れ奥まる明るみな限りに、透けの厚みの圧し迫りの透け濁り際に仄濁り頽れる色みを滑らせ流れ、に流れ已まないなら、な已ま無さの向かう向きの何処にか映えて向きの先をも明るみ暈かす勢いで乱れ奥まりを映し直し直し為、な映えの映ししか無い無さを厚みの透けと換えたいのか、にしろ、な換えこそ明るみより明るいかな振りに打たれるかに内に重みの虚ろを隠さなければ明るみを保てない明るみは明るみ明るむしか無く、な、しか無くで有り続けるしかない明るみへも明るんで映え窮まり、それとも窮まり逸れて暈け暗み已んで已み果てるなら、な已みに滑り浮き現れて已みを明るませないでは措かないにも独り自らの映え窮まりを逃げ去るかに崩し昇らせ、な昇らせ様の様が様から始めから遠い遠さの冷たさそっくりに冷え切るかに已みに淡く暈けて映る形（なり）を撫で回す振

りから食み出る円みな動きの断ち切られた仄濁りの欠片の数数の数数を貫く光りそれとも光りへの渇きそれとも何へとも無い渇きの揺り返ししか無くに光りでしか無い、に光りでしか無いなら狂い無く光りでも光りで無いでも無くな狂い無さの光り準えの一つ限りな準え異なりを迎える已み果て、な何が已み果てるかな何がを已ませる、な已みそのものなら必ずそのもので無くに已みな已みが狂い無く已みを已ませ静め、な静めの狂い無い已みの外なら外を弄り已まない透け鈍る輝きの細みの先に彩られ損なう狂い無さの犇めきの犇めき失せ痕しか接がれない、それともそんな失せ痕だけが無い、あやふやな無いの無さを、な無さが向く一つ限りな向きそれとも向きを向かない為の偽りを脅し誇る色か薫りの滑り崩れ裂けそれとも塞がり、に向かわせるしか無いあやふやさの明らかさの凋み暈ける形（なり）は形（なり）を為さないか為し過ぎたかで色か薫りの要らない偽りの汚げな薄みかな内へ圧し拡がったろうかな見通しに溶けて消えたろうか、な、兆す筈の無い兆しでも兆した徴を標した動き、それとも、な動きに動かされた動かされに惹かれるかな濃やかに色か薫りの幻だけが幻に抗う現の振りかな幻の透けそうな爛れに塗れたい細み異なりがあやふやな無さを潰し潰し為掛け、にも無さは疵一つ負わず艶めき逃げ果せるしか無い先に先など無いなら、な無さの犇めきを狂い無く受け容れる一つ限りでもどの数限りでも無くて一つか数かでしか無い動かされそれとも動かされの映されそれとも

動かされの映されに動きを止められ動くしか無く窮まる動かされ、の、な動か
されと係わらない暗みの戯れに撥ね逸れたかな重みのふとした弾みかな微かな
爛れの兆しそれとも兆さ無さに傾く窪み擬きな翳りだけが翳りの内の暗みを舐
めたいかに頽れるかに偏る偏りの、一つ限りでは無さを盛んに匂わす振りを消
し飛ばす、爛れを映さずには翳りに呑まれる恐れに潰されよう細みそれとも仄
濁りの確かな眩みへ偏ろうとする偏りへの狭まり、にしろ、な狭まりは失せ狭
まりに準えられたいかな失せた眩みでしか無いと失せの硬みを眩んで眩みな眩
みの眩み窮まれない向きを剥き出させて動かされに導かれたい偏り振りの一つ
限りでさえ無さの暈かされは暈かされ距たろう、に、な距たりから距たろうと
も距たり逸れ頽れるしか無い暈かされの偽りの眩みそっくりな狂い無さの軽み
に引き摺られるなら、動かされごと動かされるかに動かされは動かされ止まら
されようかな徴ばかりが充ち溢れる、それとも、な徴ばかりが失せに失せた徴
それとも徴の無さの果て無さが一つか数かでしか無くに、動かされ止まらされ
の先を尖り窮めようと徴な儘暈ける構えで徴だけが匿えるに違いない向きを溶
かし拡げるようなら動かされ止まらされは頑なに揺れ固まり、その先の乱れし
か無い乱れに映り移りたいかに乱れ奥まろうか、な見通しの見尽くされに沈み
隠れた触れれば触れられる爛ればみは裏返されたかで触れられない鬟の淡い影
にでも映し換えられ、にも、な触れられを触れさせるのは眩みの眩み窮まれな

い向きから来る、爛ればみも襞の影も隙なく圧し潰しその外の歪みも丸みも斥ける真っ直ぐに虚ろな触れられる厚みの艶めきの硬過ぎて姿を現せない内向きにだけ深く滑らかに拡がり果てる脹らみに違いない、かとも、な脹らみは形（なり）だけなら、な形（なり）の形（なり）だけが脹らみなら脹らみ脹らみで無いなら脹らみで無くに、そんなそれのそれでも隙の無い圧しの厚みの厚みの奥への透けるかに速やかな映り移りを促す、透けるかにな速やかさを貫くなら捩れるしか無い、に貫き逸れる逸れへの貫きの貫きから貫きへと接がれる、接がれる限りに消え懸かり消えない限りに細みな限りの細みを細みの危うさと晒して揺れる浸み通り、にしろ、な浸み通りも唯形（なり）だけへ急ぎ頽れよう、かとも頽れからの甦りへの望みをなだらかに揺らす揺り返しの平らかさに染まり拡がろうとする、に乱れを匿うなら乱れはどれも数を分けては分かれた数がどれも一つな細みの透けを紡ぐかな繰り出しかとも、な細みの拡がりめいて翳される平らかにしては狭過ぎて転がりそうな暗みの透けに映える、已みそのものなら必ずそのもので無くに已みな已みの尽き無さの小さ振りが打ち貫かれ懸かり、にも、の先に何の先も現れなければ貫かれは殆ど染み抜きされた影かで小さ振りは丸く途絶える淡い限りな厚みに散らかされるかに暈け脹らんで脹らみ鈍れば、な鈍みと何処までも距たろうかな已みそのものなら必ずそのもので無くに已みな已みしか無くに已みの縁から外へも脹らみ懸かる已みとの距たり

への偏りが距たりとの距たりを開き明かそう、な偏りの傾きの鈍み塗れに艶ばむ平らかさそれとも兆すだけの平らかさへの誘（いざな）われしか無い距たり振り、にしろその距たり振りの已みとの距たりとの係わりは測れなくて距たり振りを続けるしか無い、な、しか無さに映える細みが絡まり合うだけかな乱れなら已みとの距たりへの偏りをも偏り乱そうかな徴へ向かう兆しかの、偏りの距たりとの距たりを縮められるだけ縮めた、しか無さの映えを抑え鈍らせ抜け丸まり狂い無く逸れ外れる向きしか無さへ映し尖らせ暈かした奥まりの翳されを隈無く拡げ呑もうとする、な動きなら動き動き已みなら已みの縁の綻びかな乱れそれとも細みの仄頽れそれとも、なそれともしか無い奥まりの、奥まりなら奥まり已むしか無かろう見通しの明るみそれとも明るむ儘に違いない頑なに溶けたげな暗みのどちらも届かない向きに差す、な見通しとの距たりの向き現れを導く光りなら光り光りで無いなら光りで無いが、そのそんなそれで有るのを拒んで拒み切れたか知れ無さの映える映え已みへの眩みを眩み細ませ、な眩みは細みを光りなら光り光りで無いなら光りで無いに接がれ暗む円みへ眩み異なりを走らせようかな向きの畳み込まれに傷み頽れ崩れ、に殆ど失せた失せ痕に辛うじて匿われて眩みな眩みは、細みを拒める限りに拒むなら拒んだ振りで自ずと明るんで自ずさを儚げに顧み明るみ眩む内に滲まされるしか無い明るみに被われ隠され、にも、な眩みの眩みでしか無さに眩みでしか無い眩みは眩み

切れず眩み異なるしか無かろうかな、な眩みを延ばし歪ませ呑みたそうな奥まりを、眩みの眩みを拭い除いて狂い無く奥まりの姿をこぢんまり明るませる、匂いを自ら棄てて流れ揺らぐ影めく薫りの虚ろに満たされるようなら眩み異なろうにも、な奥まりの虚ろの虚ろなら明るみを逸れての揺曲がるしか無い捩れ曲がりの艶めきに匂いを失つた薫りが映ろうかな兆しの揺らぎ流れ去ろう動きを誘（いざな）う円みそれとも円みの欠片の斜め後ろへ去ろうとする姿への回り込み損ないな匂いを失つた薫りの移りが過ぎ向かう薫りそのものかな匂いの始めからな已みの尖り来る丸みの翳りの縁の彫り込まれるしかない狭さへ囚われ窮まり、な窮まりに薫り異なるしか無い薫りに先を越された身に眩みは眩み窮まり損ない窮まりな眩みの薫りへの余り無い移り着きに悉く無を投げるかに己を棄てよう、な棄て振りの細みそのものの果て無さかな狂い無い細みの、な細みでは円みの欠片を飛び移り墜ち移りするかに縋りたくも向けない向きを変え続ける形（なり）に成り済まそう、かにも、な細みそれとも細み異なりさえ省き越えて異なりを切り刻んで細みかな細みの細みの影も無さしか無さに戦くしか無い為の弛い拡がりめいた、狭まりすら無くて円みな、な円みの内への硬みが円みへの巻き返しを企む兆しへの円みに沿う平らかさに薄い限りに薄く乗る拡がりなら薫りそのものめいたそのそのものとの擦れ痕の薫りを貫いて映る映えな限りの硬み窮まる薫り異なりしか無い、なそれを已ませるしか無いそれ

に依ってそれなその円みごと円みを拒み抜け濁り薫る貫きに、それへ抗う徴すら奪われるせいで抗い継がれ堪えるしか無い濁り薫る貫きに添う影の虚ろの内を舐める虚ろの奥まらせに描き片寄せられる隅へ隅へと溶けたい形（なり）を晒して襞でしか無い襞の姿を詰め捌けさせる偏りが偏り眩むなら、な眩み越しに、な眩みを予め見透かし僅かな穢れの僅かな程に穢れて透けな透けを匿い養って濁り薫りとの距たりを距たり逸れ叛いて眩みと透けの絢い交ぜようとされる徴なら徴徴で無いなら徴で無いを限りなく充ち棄て閉ざして硬み果てたささやかな硬みを底無しの奥まりめいて支（か）う構えの尖り弛むしか無い汚れ沈みは如何にも揉まれたそうに優しげな薄い輝きを鈍り尖らせ、そのそれしか無さに貫かれる貫きを晒し翳して濁り薫り越しに先を切り開けそうな贋の徴を搾えそれとも贋な程に徴は徴と動かしようの無い、な、しか無さにしか無さは抗い潰され損なわれるしか無いなら濁り薫り越しに開ける贋なら贋の贋で無いなら贋を拭い去れた濁り薫りの映りの現れを狂い無く円みしか無さと捉える細み映えが浸み進むにしろ浸み渡れる何処も現れず細み映えの何よりもの硬さが暴かれるだけなら愈愈細みは細り映え渡れば何が細みか、な何も無さに置き換えられなければならないのは、な何がへまで浸み込むべき濁り薫りしか無かろうな兆しは一つで無いなら数限り無くしか無くに孰れは数からも棄てられ片寄せられ襞を描こうかな匂いさえ漂わせそうでも襞は襞なら襞を拒んで襞ではその

片寄せられない偏りに添うしか無さそうな濁り薫りの捩れを妨げる、鬟を拒む鬟の際で鬟を支える振りの重み、にしろ鬟の重みで無いのは確かなら何の重みか、な重みは失せるかしぶとく失せない振りで疾っくに失せたか、にも重みな儘に重みの失せ痕かな重みの細みへの頽れだけか、にも、な頽れが頽れるしか無い向きから向かい明るみ明るみの放たれめく、な向きともみわらずに始めて現れるかな異なり細まる細みそれとも細み異なりそれとも細みとも細み異なりとも係わらない明るみの放たれめきへ揺り戻る戻り鈍りに移ろうか偏濁り薫りの、な為に細みとの距たりへ明るみを入れるしか無い偏りしか無い偏りを透かし無くす平らかさの細みとの距たりを埋める明るみへの躙りらりそれとも、て躙り寄りなど余り無く遣り果せての薫りの濁りに違いないなら、な濁りは明るみへ窮まり果てるしか無くに濁りを剥がれ裸にされるかな薫り、な裸に剥かれる弛さなど帯びられる筈も無い薫りなら濁りは剥がれようも無く薫りの濁りな儘に明るみへ窮まり果てるしか無くに独り濁り異なる向きへ薫りを引き摺るその異なりだけが独り引き延ばされそれとも引き裂かれたかも知れない裂け口の奥が浅いだけ浅く鋭く切れるように平たく開いたか、にも薫りは薫り異なるしか無さそうな偏りに圧し迫られそうにも異なり鈍り逸れ懸けるなら先に待ち構えるのは濁りしか無い、なしか無さの内に匿われた濁りそれとも唯濁り独りな濁りなら狂い無く濁れよう濁り異なりの濁り無さの為に濁りなのかも知れない

濁り、に濁りなだけなら全く透けでしか無くに濁りなら濁りを濁らせるのは濁りの外にしか無かろうな濁りの外が、何からの外でも有りそうにも一つ限り薫りとの距たりそれともなたり異なりを余り無くその外の内へ放つ放たれの円みが円みを放ち離し傾れ距たって距たりを断つ円み異なりに隈無く侵されるなら侵されるようなら、な円み異なりの異なりは円みを内から破り抜け、にも内の外に現れるしか無い外をも破り抜けられるのかそれとも外を外異ならせられるのかな濁りも薫りも届かないなら、な破り抜け果てに覆い被り傾ぐ、にも濁り薫りな姿を装う他無くに僅かな震えを帯びて透けへの向きを向こうと逸る徴の現れを拠り処とするかな痛みを薄めて硬げな映えの酷くゆっくりな狭まりの一つ限りの繰り返しが、一つ限りでは繰り返しでも無くに狂い無くこびり付き、な繰り返しで無さの向こうから透け向かって来る円みそれとも円みそっくりな濁り薫り異なりそれとも濁り薫りをあっさり斥ける円み異なりの眩み頽れ擬きに向き合って、なそれの向こうへと延び向かおうと望むしか無い細みでそんな細みを暈かし窮める円みへの抗いの逃れようの無い危うさに犯されて細みで細み異なるしか無い様の、で無いそれへとそれがそれを置き換えるしか無い、一つ限りの向きがその向きを貫き破って抜けて行く他に無い見通しのあからさまな明らかさに、濁りを洗い落とせたかそれとも濁りを磨き上げたかさも独りめく薫りが向かい拡がりそれとも僅かずつ溶け傾れ逸れる、な逸れが必ず円みを

描くに違いない向きを現し翳し頽れさせるなら、な頽れの隙に薫り立とう恐らくは薫り異なりとも違う逸れ已まない円みに乗り懸かりそびれて嬉しげに滑る細みなら細みの透けに薫り立つ薫りそれとも薫りとも薫り異なりとも異なる、なそれなら細みがそれをそれと独り引き受けるしか無い微（かす）かな徴（しるし）の、何の徴かあやふやなあやふやさに覆い被さるしか無かろうな、やはりあからさまな明らかさ、と環を閉ざすかな丸みを頑なに晒す流れを導き入れる、一つ限りの向きとは必ず異なる濃やかな深みを匂わせ偏る向きから来る明るみの丸みを越えたかろう高みの拡がりの丸み、かにも高みは唯低みを欠くだけで少しも高みでは無いその向きの知れない光りの白みかな平らかさに隈無く晒されての丸み、を硬く閉ざす硬さに捻れる濁りの厚みに満ちた透けの何も無さへ入り込めたか入り込みようも無いかのどちらでも有るしか無い境目の無さの境に偏り流されるかに近寄り逸る明るみは明るみな儘なそれ限りに明るみ已むしか無いようなら、な已みばかりが丸みに接がれ接がれその圧し狭められた縁から爛ればんで爛ればみは更に圧し片寄せられれば失せた音の失せを響かすかで清かに穢れ已み、な穢れの清かさな限りな清かさの軽みが軽みより軽い高みと重なって透けを彩るかな厚みを浮かせ漂わせ、にも、な浮き漂いの他に何の跡形も消し去る静けさの汚げな鋭さの騒がしい限りな低みの硬みは疵を匿い溜め込み剥き晒すかに細かな程に粗く暗い尖りを太げに溢れ輝かせ、にも、な

輝かせは始めから無かったかに穢れ已みに潰されるのか、その潰され痕かを穢れ已みに撫でられるばかりでは裏返された丸みの欠片のぎっしり詰まる重みの繋がり已む已みの薄っすらとも重い濁りの僅かな円みをも殺すかな暗く白白しい平らかさは必ず、触れられる偏りの乱れを追うしか無くにその乱れの已みでも有るしかない已みに馴染み展べられ、白白しい平らかさを埋め巡り捲る色めく象りの連なりを描こうけれど、それらの重みさえ斥ける鈍みに沈みそうにも、なく沈みへの恐れの薄さに震え窮まるようなら一つ限りに見定められる震えの源を抑え損ない眩み、眩みを浅くしか無い苦みへと逃す向きは渦を断たれて断たれ目を舐めるかに震えの源を掠めてあやふやな苦みを震えに纏い付かせ弱るしか無くに震え異なりの偏りの已み難い平らかさを拡げ削げば削ぐ程に、触れられる薄さの触れられない微かな窪まりは唯の透けと見誤られる恐れを薄い限りに薄く伴い展べ拡がりめく狭まりに角張り収まろう中で、一つ限りな暗みと明るみの鬩ぎ合い振りに滲む濁り過ぎた薫りは一つ限りの奥へと奥まり消え盛(さか)り、盛り痕だけ残すかにも、な痕など消して薫り盛れば奥まりと狂い無く一つに墜ち果てるかに一つ限りで、にも、な一つ限りの限りない繰り返しめいた奥まりを切り刻む動きなら動きは、奥まりの已みへ濁り過ぎた薫りを導き入れよう、な已みに惹かれて薫りは濁り過ぎを濯ぐかに弛く響く様を甘やかに彩らせようかとも震え擬こう丸みを欲しげな兆しを薫り異なりそっくりに振り撒

くに違いなく、な兆しは何の兆しもそこに現れない兆しでしか無いのを晒して兆しで、な晒しを塗り重ねるかにそこをそこと硬く定め去り、な去り痕の触れられる薄さの触れられない微かな窪まりめいた已みが自らを展べ拡げ傾げて触れられる筈の窪まりを滲み浮かせ、已みと窪まりとは互いを覆い被せ被さり合い白白と薫りの濁りを流し下らせるかに、已み窪まりと窪まり已みの重なりに射す一るの艶程の光りの消え痕の明るみの鈍みが齎す距たりに、震えの源から汲まれ筋かな乱れを現れさせよう乱れの薄い限りな奥まりが微かな限りに捻れるしか無くに消えるなら消える先から消え果てて果てよう果て痕に何の痕も無く、かにも、な無さは、果て痕の向く先をあからさまに欺く為で、な無さの外こそ何も無いのを欺きのあからさまが静かに暴くにしろ、な外の無さの外は何の外でも無く、外で無い外を匿う内に隠る限りの外なら外、外で無いなら外で無いで、な内の外が外で有る無しを巡らせるかな円みそれとも乱れの奥まりさえ透けそうかにも、円みと乱れの奥まりは恐らくはそっくりな姿を無さの外で内に隙無く晒し溶け、な隙の無さに向き向かう隙が必ず呼び込まれるなら円みはそんな隙と反りが合う筈も無い程に乱れの奥まりはそんな隙に疾つくに滑り落ち入り浸ってよう、と剥き出されようかな円みと乱れの奥まりの、距たるには必ず繋がってようし繋がるには必ず距たってよう、な距たりそれとも繋がりの必ずどちらか一つは、な一つを酷く荒ぶらせては、円みを拒む程な僅か過ぎる窪

衝ずかのせなをえり知せ無まのら透濃ま
きれ定儘痕い磨のにられくり狂深けやり
上るめにに象り繋幾ずばすにいみのかの
がし難象兆り減がら望痕かひにの暈に暗
りかいりすへらりでんににた擦無け埋い
盛無揺で筈のしのもだは舞すりさ染め薄
るいれしの懸て兆そ先円いら替そみてみ
かか動か何けはしのをみ散縋えれが平を
になき無の渡磨が一向とるろらと欺ら上
もらをい狂りりそつけ乱しうれもきか辺
已襞拒乱いの減の限てれかかる深降にに
みかんれ無動ら映りよの無なしみろ均流
そにでばさきさえをう奥く偏かのすすす
のもはかもにれを易、まにり無無深暈そ
も象拒り狂移た貫易かりもにくさみけの
のらみがいる徴いとなし失頽にののる拡
のれ已奥無しのて殖弛かせれ狂深狂限が
向よみまくか映已やみ残る惑いさいりり
きう馴り已無えませをらしう窮の無に偏
へに染とみくになる弛なかしま窮い暈り
ともんの果に厚い触みい無かるま窮けめ
流象で距てもみ徴れの筈く無のらま染く
れりはた損徴をがら淡がにくも無りみ狭
、に馴りなは与、れいそもに為さ無るま
な付染にっ徴え徴続影の偏狂らに、さ透り
流きみ奥てのてばけが欠りいな、そけを
れ物已まは徴一かる覗片続とく狂れに僅
ののみる、まつり象きもけ狂ていと隙か
頑偏、の厚で一でり込無、い円無も無な
なりながみ奪つはかむいか無みさ窮く窪
にを已何のわ異片なかなにさとはま覆ま
円拒みの映れな端厚ならもの乱狂りわり
みむは奥え徴りかみ一そ偏見れい無れも
をな転まがの已らのつれり境の無い、さ
匿らげりそ失ま徴映限は失を奥さななも

うかな映えが硬い乱れ染みて已みを貫くなら貫くで貫かれたかな已みは暈け暗がる程に厚みを増しては乱れの奥まりと一つな已みに違いない、な違いない限りには一つ処に留まらない已みの狂い無さがその先へ開き拡げるそれとも已みの狂い無さを崩し呑み逸り却って已みの狂い無さに呑まれその先を塞ぎ覆い占めるならそれ自らの重みにそれ自らを映そうかな円みと乱れの奥まりの重なる、重なるからには重なり損ね、始めからずれ已まない、な、徴を拒む現れな限りに一つ限りな、にも一つ限り已む已みを呑んでその已みしか無くに已みを貫き鈍る円みと乱れの奥まりを知らず狂い無く先へ圧し斥ける現れ無さの已まない限りな已み現れ、なら現れは始めから棄てられてよう、に唯已みでも無い、な一つ限りな已み、にも、な一つ限りな、には一つも限られない、な已みが已みを貫き鈍っての已みの貫き鈍みの象られようとされ続けても象られないそれとも象られようとされ続けを拒んで鈍みに重みを映し損なえる、映し損なえ映えこそ一つ限りの証しと偽り逸るかに貫き鈍みを貫く貫き映えだけが、恐らくは偽り逸りを偽り逸り振って、振り切れるかに、円みか乱れの奥まりかそれともそのどちらともまるで違う先への、恐らくは貫けたところで貫きようの無い已みそれとも已み異なりそれとも已みと已み異なりとの、一つ限りか知れなさの円みなら円みを剥き晒して一つ限りに誘うかな、円みの失せ痕の偽りの脱け殻とでもなら象られようとされ続けられよう、ひたすらに先しか知れない貫きが

映え開かせる距たりを窮まり無く匿うかな閉じた裂け口を映したい望み独りが、独りでなど有り得よう筈も無くに、な無くに、には狂い無く独りに、な狂い無さに挫かれそれとも奮い立たされそれとも望みと狂い無さには何の行き違いも有り得なくて互いを明明と映し合うしか無くに涼やかに打ち消し合う、な後に残るなら残る独り閉じた裂け口から締め出されたかな望み無さそれとも望み無さとも異なる異なりの貫きを唯独り投げ出すかに先立たせ、な独り映えを圧し通そうにも圧しも通しも為らない已み異なりの成れの果てかな已み異なり已みの圧し通しを強いられてよう、な強いられ已みの已み塞がりに仄かにも荒ぶり映る円みへの兆しのざわめきかも知れない偽りの円み拡がりをさも一つ限りかに狭めそれとも始めからな一つ限りに狭めさせられ、にも、かも知れない兆しのざわめきは円みを置き残してざわめき已めば、な已みを欺く円みを映す已み塞がりは円み異なりを探し求める向きへと透け開かれよう、な透け已みに始めから円みそっくりに円み異なりは緊く平らかに薄い限りに張り渡され、ざわめき已みを欺き円みを脱ぎ捨てる振りで異なりだけを尖らせ損なわせるかに異なりを崩し流し始め、で異なり已みを切り開きたいかな置き残された円みへの揺り戻しの淡い企ての先を越す張り渡された円み異なりを打ち砕く置き残された円みの透け已みへの円みその儘に狂い無い貫きが行き過ぎようと、な貫きの一つ限りなら行き過ぎ已む儘では、な已みの已みで有る為の已みへの行き過ぎを

救い出そう向きに向き向かう已みに匿われ映るかな透け已みな儘な汚げな円みは円みの細長く小さな隠され続ける影を次次に産み流すかに円み已む向きへ偏り染みた動きを内へ映し盛らせるしか無く、にもそれは、な映し盛りの円み已みとの距たりに覗く円みの縁から裏へと偽りめいた弓形に切れ込むかな暗みへのひたすらな奥まりの乱れの奥まりそれとも円み已みに失せ果てる暗みに僅かにも取り返しよう無く引き摺られようか、にも、その静か過ぎが激し過ぎて果ての無い裂け目かな頭越しに、透けにぐるりと囲まれた円みそのものが引き摺られるようなら引き摺られるのは、円みそのものの偽りの暴かれた円みの失せ痕に唯引き摺られる為に引き摺り出される、なそれの已み向かう向きへのそんなそれの奥まりそれとも奥まりを容易く埋める平らかさの内を向きたげな円みへの渇きの徴、にしろ、な様は瞬く間に乾上がるかに失せるしか無くに、後にはその、しか無くに、な痕しか無くに、な痕の為す儘な痕との距たりを測る円みへの透けが奥まりの粗くも滑るように濁り果てた艶かに延び、塗り拡げられ、な、かにな艶ではざらざらと頽れるしか無くに、な頽れを頽れる儘に貫く透けの内の有るか無いかの円みに凭り掛かろうとする乱れる筈の向きへ向かうその向きを断ち切る企ての已み難さに苛まれる後の無さだけが、その無さに孕まれた動きに随い進んで、後を後に出来たか振り返れない進むしか無さの硬さに動きを奪われたかにそれとも狂い無く唯動きを奪われ、その取り返しよう無く剞

り貫かれた痕だけが後に残るかな、にも、な痕には替わりに覗けば覗くだけの奥まりが新たに孕まれたかな虚ろを際立たせる重みが影との境目かな縁から立ち上がり、な棘棘と何処からか来たか知れない新たさの酷く独り切りな上辺に傷付く既に進まれて仕舞った向きからの透けを請う一つ限りな揺らめきそれとも一つ限りなら揺らめきへの拒みが圧し迫り、圧し迫るからには逸れ、新たさ擬きな窪まりそれとも窪まりの底に滓のように溜まる触れられる硬い厚みに包み込まれた細かく切り刻まれ固められたかな尖るだけが取り柄の薫りを悉く打ち消し、かとも打ち消したかどうか、な打ち消されない痕それともそんな痕の無さそれとも始めから薫りなど薫る筈も無いのに薫らせた新たさの圧し迫り逸れの擬きを剥いで触れられる厚みを蓄えた窪まりから窪まりの底へまでの巻き返しに新たさ自らが新たさを異ならせた、唯新たさを撃ち貫き新たさの上辺の独り切りを破り裂く勢いの、欠ける事の無い円みを象る向きしか向けなさそうな、な有る筈も無い欠ける事の無い円みに欺かれる喜びに縋って常に外へ拡がる弱みを抱えた危うく強過ぎる明るみの明るみ尽き已ま無さは、な儘に窪まりの底から新たささえ置き残し、にも、な置き残されの暗みに弱みを内へと押さえられるかに置き残されを引き摺り明るみの幾らかを掠め取られながらに、暗みに紛らすかに僅かずつ透けへの眩みを増し進ませ逸れるなら、な逸れの内の逸れようの無い偏りの消え已まない先が消え已まない偏りより外へ尖り翳されて、向き

の消え已まない向きを向くしか無くに偏りの内を貫き抜ければ、それとも貫き抜けようなど易易と拒まれ、唯、なそれがそんなそこでそれを止めるなら、の、止められたにしろ何がそれで何処がそこか、な何がも何処がも問いごと弾かれる弾かれの、その向きの凡ゆる向きを向く静まりそっくりの、円みすら撃ち斥ける力の内向きにだけ虚ろな果ての無さそれとも果ての無さはその儘に果ての果てで何の無さも無ければ果て已んで、な已みに呑まれる虚ろな果ての無さは已みより脹れ已みを押し破って果ての無さも失われれば虚ろなだけが已みへと已んで已みに溶けよう、な継がれ殖える強張りに貫かれる虚ろなにとも已みにとも抛り難い、それを重く覆い尽くすのが円みなら円み、円みで無いなら円みで無い、な様が様を弾き破る力の危うさに張り渡される様の、な様との一つ限りなり異なりの、已みへの已みさえそっと静まり返り弾き斥けて独り明るみを眩む、已みを唯の狂いへと追い遣ろう狂い無さの果て拡がり已ま無さが、それともそんな事と異なるとも異なるなら、そんなそれとも何の係わりも無さが、弾き斥けた筈の已みに頑なな静かさを突き破られて薄く硬く覆われそれともそんな覆いを消し去られ、に、已みへの偏りを拒む唯一つの向きへ向き向かう徴に一つ限りに貫かれ、にしろ徴を貫くのもその徴でその貫き貫かれの已み難さの偏りが向かう先に望まれる已みの、望みの叶わないなら失せ痕に、いや失せる儘に痕では無い、痕異なるとも異なるなら失せだけがそれまでに無い新たな形

（なり）を、な形（なり）だけで失せさせ、な失せの失せそれとも失せの失せ異なりそれとも、な異なりの失せ痕の痕で無さを侵す失せの失せに拠る形（なり）は、疾っくに失せなど忘れ去られたかに失せばかりを独り荒ぶらせ、それとも鎮まらせ、にしろ、もし鎮まらせられるなら独りとはまるで違う形（なり）に為り換わって行くしか無かろう、などと何処を顧みられる筈も無いなら、な無さを虚しく滑り去らせる、な形（なり）を映して形（なり）を溶かし消して映された映されだけの明るみそれとも明るみへの眩みそれとも、な眩みを眩み異ならせる形（なり）の溶かされ消されが準え導く奥まり、にしろ映される奥まりの先行きは映されに流されるしか無さにな無さな儘に消され、それともそうして独り消されるからは独り眩みをも食み出し現れ渡り翳され、かにしろその独りなのは独りとの異なりに拠ってならそれは独りに準えられただけか、にしてもそのように独りに準えた独り異なりの独りとの係わりへの繫がりは現れようも無さそうでは、翳されるそれの何がそれなのか、な空回りすると分かり切った疑いが掠めればその翳されの、奥まりの先行きの映されとの係わりも断たれそうで、かとも、断たれようも無くそれらが匿う明るみの奥まりを眩みを裂いて微かな揺らぎへとも導けようかと企むのは独り異なりの独り準えを斥けての、独り、独りの徴を標せない独りしか無くに、にも、な独りに拠る限りにしか翳されの明るみの奥まりへの企ては吹き消されよう、な通りかにそれは吹

き消されそれとも恐らくは、な企てなど独りの虚ろさに毀されるかに要らなくなれば、何の翳されも衝き越えられ、あからさまに剥き出された明るみの奥まりの荒れ狂うか鎮まり狂うか知れない乱れの窮まり已まない已み果て無さに弾かれるか呑み込まれるかを独り選ばされるかな厚みの圧しの透けに囲まれ、にも直ぐに、な圧しの透けの裂きようも無い眩みに擦り換わり際に、明るみの奥まりも自らの重みにか潰れそれとも自らから流れ出すかに解き放たれ、奥まりの底が暴かれ奥まりそのものがそのものから溢れるような明るみかなら明るみは細切れにされ懸かりそれぞれの底を裏返すかに尖らせた奥まりに貫かれ暗めば暗みばかりが見境無さげに激しく接がれ捲って眩みの重みに撃たれるかな、明るみの散り果て痕かに象られ損ない窮み眩む、向きを向くのを拒みながらの透けへの貫きにしろ、却って向きに向きを拒まれ透けに届く筈も無さそうなら内に象られへの拒みを硬く満たし尽くし、に、向きを失うなら必ず独り切りに違いなかろう、な、違いないかでないかの揺らめきの透け過ぎて頑なにも柔らかげに揺らめきようも無かろうか、透け過ぎの内の暈けた縁を暗く辿る独り切りに描ける輪を求める止め処無い揺らめき已みを匿う静かさそれとも小ささの、そんな儘では消えるしか無かろうかならその有り無しと必ず係わらない向きを、透け過ぎの内の縁ばかりかその奥までの暈けを食い進むかに拵え明かし、にしろその明かしはその明かしには何も明かせないのを明かしてようかになけ

なしの向きを頽れさせても頽れるなりに向きは向きで、と明かされれば向きはあっさり消え失せ向きと異なる悉くを静かさそれとも小ささへと向かわせて来ようけれど、静かさは透け過ぎの厚みへ小ささは揺らめき已みの匿いへと為り換わって向き異なりの悉くは何処へか行き過ぎ、な行き過ごされた何処へかと真向かって、透け過ぎの厚みに潜り込む揺らめき已みの匿いだけは、揺らめき已みの向きを静かに指し暴いて暴き鈍れば揺らめき已みもその鈍みに犯され痺れるかに暈け失せそうで、にも、な痺れるかに暈け失せそうはそっくり揺らめき已みを向くしか無く、な一つ限りの向きなら向きなど要らない一つ限りの向きの要らなさが要らない向きから導き開き丸みを拒むかに丸くに丸みの影へと浮かせ映そうと重く暗む、けれど、な重く暗む様など現れようも無く暈け失せの他に何も有りはしない、に、そう有りはしなくて必ず一つ限りに無くてはならない、暗過ぎと重過ぎをぴたり重ね過ぎて直ぐ側に僅かに距たるにしろ触れようは無くに浮くかな儘に閉じ已まない虚ろが虚ろに重なり互いの虚ろをぴたり匿い合うなら虚ろは上辺でだけ打ち消し合おうその先の眩みへの、斥けたい虚ろへの焦りを密かに隠す躙り寄り振り、それとも、な振りも許されず唯その先の眩みへ痺れるかに暈け失せそうごと抛り投げるしか無い無さ、に無さは疵付こうか、にも、な疵など見出せない痕に疵付きたい望みの兆しが兆しを暈かし失せさせ、丸みの影だけが痺れた儘に取り残されるかに独りで無くに翳され、

な独りで無さが独りで急ぎ開き逸らなければならないならならなさは丸みの影に潰されそうにも潰されから逸れるかに衰え、にも、な衰えは衰え鈍って已まずに却って丸みの影を砕け散らさせそうな、と影が失せれば衰え鈍りは影の失せ痕に投げ出され影の後を追うしか無さげにも衰え果てようかな危うさを抱けるなら危うさを鈍りに混ぜ込む徴でも掴み取れたかに、暈け失せた筈の痕に疵付きたい望みの兆しの甦り、かにもで無くに、な甦りの有り得無さを知らせる独りで無さを匿い暈ける狭さの流れそれとも淀みの傾き、それとも直ぐに傾きは捻れるなら始めから傾きで無かったろう向きを定めない向きを向く微かな騒がしさそれとも騒がしさが指し示す静かさの向きに叛く向きへの逃げ去り、と、な逃げ去りだけが逃げ去りに至ったまでの様様を映し移して置き換われるかに、かになだけなら置き換われずにも置き換われなくてはならなくに、逃げ去りは、な置き換わりに吹き流される影かに潰され消され、な消され痕が痕の影も無くに残るなら残る、残らないなら残らない、滑るばかりかに、なせいで偏れない、偏れなさに偏る偏りが引き破れて奥を覗かせるなら覗かせる奥が奥を奥異ならせて開け、と奥異なりを開く奥か奥で無いか知れない偏れない偏りの形（なり）をして形（なり）を引き破る、偏りの形（なり）の失せた失せ痕に、いや、失せ痕なら失せ痕にしろ、失せ痕、に、では無く、失せ痕、を、な、を、に失せ痕を切り開こうかな、奥まりな形（なり）が偏りを断ち已ませ、な已みに自ら

を匿い延ばす形（なり）だけな奥まりの、形（なり）だけに縋ってそれとも縋
り異なって形（なり）を突き抜け奥まりだけの奥まりに穢れ果てたかな奥まり
に至る、それとも至るにそっくりな形（なり）の、已みを匿い開いて尽きない
小さ振り、か、な小さ振りを拒めば開かれ匿われるしか無い、小さ振りを打ち
棄てる振りを荒ぶらせるかな已みの已みそれとも已みのこれ見よがしな已み振
り、に何の振りも失せてようなら匿い延ばされた已みばかりが已み已ま無いで
は、な已ま無さが已ま無さを向き直るしか無かろう円みなら円みそれとも明ら
かに偽りの円み振りの兆しの騒がしさなどが微かに距て定め損なわれ、な損な
いの確かさが硬い奥行きへ向けて暗く翳す円みの兆しの乱れそれとも乱れに舞
つて乱れを斥ける有りはしなくて無くてはならない円みへの眩み、な眩みこそ
一つ限りに縋れる細みと距て定めるしか無い無さが無さを延ばし眩ませる為に
細みは直ちに呑み込まれたろう、な細みの細み異なりに違いなくも細みへ還る
しかない丸みへの向きなら向きの窮まり染みた短さそれとも向き已んで向き已
みばかりが已みへ戻りたいかに向かい已む已みの窮まり、のいかがわしさは覆
い隠しようも無い、にも、な無さがそのいかがわしさを吹き流すかに覆い隠せ
ば隠したで、な隠されだけがあからさまに晒され仄明るみさえ滲み兆させ、に
しろ、な仄明るみの在処は影すら無く揺れもせず知られずに円みの遠い先なら
先へ、有りはしなくて無くてはならない明るみを探しに行く切り疾っくに消え

果ててようか、かな推し量り痕だけが吹き流されてだけ姿を翳すかに、独りその儘に居られた眩みの内から湧き起こるようなら起こり果て、な果ての鋭さ硬さにそっと裂かれ開かれよう、眩みの内から拡がり狭まる眩みの外の内に滞る眩みは、仄明るみに何処からか撃たれるかに眩みを棄てるしか無くに外の内に抗い、抗い切れず、な抗い切れ無さが眩みと仄明るみの共には有り得ない筈のその内と外とを柔らかく擦り換えるかな貫きそれとも互いに頑なな貫かれ無さに眩み果てるかに内と外との距たりを距たりのあやふやさに引き摺られて乱れさせ、な乱れさせに真向かって真っ先にそれに巻き込まれ損なう仄明るみの微かな現れそれとも現れをあやふやに拒んで仄明るみの内を侵したげな奥まりへの躙り寄り逸れて真つ直ぐにばらけ暈けるしか無さを喜び匿う望みは、必ず何処へか貫かれて行くしか無かろうな徴を棘棘と撒き散らし損ないそれとも損ない異なり、な損ないと損ない異なりの距たりにしか一つ限りに貫かれは転げ運ばれるしか無いかなら望みは疾っくに果たされ已んでようか、に距たりを埋めるかな奥まりが確かな奥まりな形（なり）を虚ろに明るませ偽りに艶めかせ、にも明るませと艶めかせは互いを打ち消し合おう内の外に硬く拡がり閉ざされる奥まり異なりそれとも異なりな形（なり）だけに形（なり）を奪われ異なり異なりへと閉ざされ拡がるしか無い無さの已みへの誘（いざな）いを匂わせるかな暗みの底に長らく見棄てられて居たかな細みそれとも細み已んでの細み、

な細みの已みを貫き逸れるかな細みそれとも細みを棄てて独り、独りで無さへ真向かおうかな一つ限りな貫き、の、一つ限りで無くて一つ限りで無くてはならない、かとも、な、ならなさを跡形無く拒み、（二〇二二年九月二十八日）

（拒み已んだ已みに…）

　拒み已んだ已みに悉く消えたい貫きの已み難さの、虚ろさを支え支え難さを貫こう虚しさの影なら贋の影で張り渡すかに独り限りに独りで無さは、独り限りを力無く棄てれば棄てられた独り限りの独りで無さに醒め迷う迷いに潤い、独り、独りで無さを棄てられれば自らに独りな筈が、尚も独りで無さに纏わり付かれ独りは独り失せるしか無かろうかとも独りを失せさせる失せさせに独りで無さは匿われて居ようなら居よう儘に、な儘では唯では済まなかろう向きへと吸い落とされて頽れ懸かり、にも懸かり頽れ殖え懸けるなら、な殖え切れないで頽れ断たれるかな頽れ殖えが根を重く下ろし根に匿われた暗みの絡み合いを沈み揉ませよう、な沈み揉まれに眩み頽れる頽れ殖えでは殖え失せるしか無かろうかにも頽れ鈍り懸かる鈍り懸かり振りの已ま無さが独り、独りで無さを

低く流れ過ぎる兆しに流されれ懸かろうにも、な振りに振りが自らを眩ませ殖や
し、その儘に殖やし頽れさせる兆しの流された痕かな低みの底を、必ず丸みを
晒し現す重みで舐めるかに流れ淀みそれとも流れながらに流れ拒んで拒み巳む
しかし無い、にその巳めさせに添おうと拒み巳みを棄てる向きを探りながら探り
損なうそれとも探り異なる異なりに添うしか無い振りを翳し、な翳しに沿って
添い翳される必ず一つ限りで無い眩みの巳み難さの巳めさせへの貫かれ、かに
も、な事らは悉く疾っくに知らされ尽くされたかに疾っくさも傷んで圧し流さ
れ、にしろさもその儘かに異なり映され現れて更に圧し流され直され果てた振
りばかりが振り翳される翳されに眩んで眩み窮まり損なう損ないの低みそれと
もな重みかにも低みでも重みでも無さのあやふやな貫かれの狂い無さを狂わせた
いなら狂い巳み、な巳みの思い通りな柔らかみと温かみそれとも尽きない柔ら
かみが切り開く温かみの奥の冷た過ぎるならさも触れられない冷たさそれとも、
なな冷た過ぎに知らず触れて仕舞ってようかな巳みの狂い無さに侵されて低みを
断たれる重みの巳むとも巳まないとも無い、重みが匿った丸みを頽れさせて暈
け拡がる脹らみなら脹らみの冷た過ぎを過ぎたなら過ぎた冷た過ぎ巳みに眩ま
される、な眩まされに巳み向かって巳まない眩みなら眩みは、流れ過ぎたくて
も低みを断たれては儘ならない重みへ映され現れて向かうしか無い向きに拒ま
れるなら拒まれそれとも拒まれ異なり、にも、な異なりを冷たく貫けるなら貫

き已み、な已みへ眩む眩みなら眩み已みへと独り、独りで無くに映され現れるしか無かろう振りをその振りへ映し現し損ない、な損ないで、直ぐにも頽れ脹れようにも、な兆しも無くにな無さに狂い無く映され現れる、已まない狂い無さの貫きなら貫きが、その貫きの映され現れでしか無さを拒み、にと、な拒みを拒んでの拒みでしか無いなら拒み已まない儘に貫きの映され現れを貫くしか無くに、な無くにへ映され現れ已まない限りには限り無い拒みでしか無かろう無さに貫かれ蝕まれても拒み異なれずには、拒みは何の拒みとも拒みとも無くに拒みかに拒みで、に拒み已むか已まないかの微（かす）かな徴（しるし）さえ拒まれよう、に、な透けるなら丸みの固く暗む確かな高みを、丸みを深く重過ぎる程に重過ぎの透けを過ぎて越えられるかに望んで、丸みを翳らす窪みの溶ける底近くの偏りの指し示す拒みの隠れ様に艶めく細身の脹らみの高みの裏への傾れ已みと已み切れ無さが裂き拡げずらし狭める、にも、な脹らむ程に細まる艶めきの活き移ろいに煽られ晒される眩み更には眩みを貫いて貫き已ませる已みを匿い眩みの外へ運び映そうかな透け延びる弛みは、その向かう向きから向き向かう眩み異なりの圧し迫りに忽ち濁り尖って尖り鈍る薄っすら滑らか過ぎる影に沿おう淡い円みの映り現されへ溶けて弛み新ためくなら狂い無く弛く円み弛まり、な弛まりの円みは向かい迫る圧しの暗みに挑むかに眩み異なりなら眩み異なりへと緊く張り裂け留まり拡げられ、円みの毀され尽き痕に滲み

脹れて円みを舐め損なうかに透け艶めく醒め迷いを導き昇らせ落とそう、な向き向かう向きへの円み痕を越え砕く、円み振られた距たりに明るむ動かされの荒ぶりなら荒ぶり鎮まりめきなら鎮まりめきそれとも荒ぶりと鎮まりめきの闃ぎ合いを貫き抜ける透けを貫き抜ける明るみの新ためきの硬みなら硬みそれとも、な硬みを貫き抜ける奥まりへの硬く響くような乱れの裂かれが、ただ裂かれな限りに違いなくに、眩み焦るかに狂い無く狂わなければならない為の更に奥まりを孕む厚みを孕み、な孕みの外ばかりへ奥まって内の無い無さを柔らかい限りに柔らかく逸らせるしか無くに、円み尽きない内の無さへと外を侵し込ませるなら侵し込ませたで必ず、な無さは明るみに隅隅まで満ちよう箸な姿が固まる程に僅かに揺れ、かに、かにな揺れの僅かな程に、な姿の狂い無くあやふやに硬く固まり染みる危うさに激しげに揺れようけれど恐らくは激しげ過ぎ鈍り戯れ、揺れが揺れを殺し殺された揺れが先を争い揺れ異なり切ろうと異なり切れずに切れ無さの穢れが淀み溜まり掛けようか、な塊を脹らませようばかりに丸みと厚みの綯い交ぜそれとも丸みからの食み出しと厚みの無さの閉じた距たりの汚れを艶っぽく裂きたげに、裂きたげなら、な通りに裂いたろう、に汚れをその儘に残せるなら、な通りに斥けそれとも斥け損ない、汚れ塗れな儘を淡い限りに鈍り窮まらせ澄み延びる限りに延びる透けを透けの儘に映し匿う透け已みの消え懸かるかに丸み脹れよう姿を砕き弾いて散り暗む先への明るみ

の圧しを寄せ拡げる、に拡げられるなら先は失せ、な失せが先で、な失せな先
を再び散り暗ませる明るみの圧しは爆ぜ縮む限りに眩みを呼び込もう、に朗ら
かげに明るみ損ねて失せ、な失せを侵す眩み擬きが円み擬きに擬えられるしか
無いなら無いで円み眩んでそれとも明るみに嬉しげな軽みを差し出すしか無く
に潰され、にも眩みも円みも何処へ映し移れようかな映され無さのそれ限りな
拡がりの硬みの内を拡がりを強く支えて満たす透けに匿われる円みそれとも円
みの失われが暗みと戯れ明るむ明るみに晒されるに違いなく透け鈍り貫かれ
損なわれ、に何処へ向かう貫かれ損ないかの透けばかりが延び貫かれ、な透け
を貫くばかりな貫きの何処へも映し移れない独りその強みに貫かれて貫き已む
已みは透けを求めるしか無くに已みを貫き呑もう、な貫き呑みの已み難さに映
る、貫かれも呑まれもしない透け異なりの小さ振りが狂い無くも狂いたそうに、
な映されを棄てるなら棄て、かにも、な、かにもは直ぐに溶け、にしろ、な溶
けの内に、かにもを求める向きに透け異なりの小さ振りは事も無げかに自らを
翳し逸れ尖って尖り已み、な已みの暗みでしか無い円みへと明るみ拡がる姿を
已みへ映し移す企みに囚われる儘に小さ振りの手前へ已みの尽き無さの在処を
知る一つ限りの明るみを纏って退く形（なり）を隠し暈け晒し、な暈けの円み
への向きは已み難く硬く何処へも映らない艶を象ろうとも艶は艶へ映り込んで
象りを円みの向きへ圧し立てるしか無いなら無いで、な圧しに洗い晒される内

も外も一艶でしか無くに内向きにそっと激しく円みを透けるかに淡く折り畳み匿って、な内の窮みから暗みでしか無い外へと向き返る、明るみの届かない弾みの奥へと潜り潰れ爆ぜて円みを異なり抜ける透け異なりの解き放たれで有りながらの眩みへの縮み円みが独り、一艶を貫き潰す一象りな静か過ぎる爆ぜ様を圧しを圧し返すかに映し、な直ぐに薄れる映り限りな一窮まりを窮まり逸れ損なうなら損なうで一艶から一窮まりまでの一連なりを潰し貫きそれともそれらは自ずから潰れ消え果て、な消え果て痕を探す向きとも向きを違える眩みへの縮み円みの、その独りで無さへの覆りの企ては為ったか為らなかったか、為ると為らないの僅かな重なりの偏りずれて、なずれは潰され或いは潰されを逃れ弱り、なずれのずれ繋がるならずれても無さそうな裂け口の形（なり）をした距たりに弛く震えるかな透けの襞を襞の儘に透け消し潰して消しを艶めかせ、にも襞などに艶に映り淀み濁る艶の綾でしか無いと透かし映され現れれば、な現れの何も映され無さを探り失う撓みの縁、更にその縁から向こうへ欠け落ちるかに真下へ流れ逸れる、綾を固め潰して厚く柔らかげな硬い艶を縁沿いに濃やかに盛る、円みへの欠け無く行き届く繋がりを求めるかな小さく閉じた重みの滞りそれとも滞りを静かに棄て去る円みへの明るみめく円みの滅びを映す一つ限りな誘いへの惑い、な、その円みへの惑いなのも明らかな明らかさの明るさが拡げ映す円みの円みを匿う、隅隅まで狂い無く暗みを斥け滅ぼす拡がりそれ

とも、な拡がりを拡がらせた眩みの果ても無さそうに果て窮まるかな、硬い艶に淡く塗り込めらよう奥まりなら一つ限りに奥まりの外を奥まりかに映したかな奥まりでしか無かろうかにも、それも円みの滅びを映す一つ限りな誘いでは無いのかな惑いを拭えない儘な奥まりへの在り来たりな疑い、それは奥まり異なりを一つ限りに映し去って円み窮まるかに滅びない艶の在処でも求めたいかな迷い、にしろ醒めてこその迷いに凭り掛かるその重みの重みを開く明るみは、掴み出して掴み出し損なう円み已んで尚已みの奥まりに円みを匿い翳す振りを已めない已め無さの現れを現れさせる、な現させの現れが已め無さの現れを呑み已ませて穢れないかに穢れ塗れな円みに接がれそれとも接がれるしか無かろうかな振りだけを円みの僅か手前に接ぐなら、その僅かな隙の在処を曝け出したい望みに貫かれる重みの明るみは閉じた重みさえ内に映し移して、な望み自らを呑むかな振りでそれとも明るみよりあからさまに呑み込んで、な望みとの距たりに醒め迷う醒め迷いに迷い知られ果てて朽ちるかに醒め窮まり、な醒め窮まりの迷いそのものな姿に迷いながらも迷い窮まれない無さを何処へ送り届けようか、な何処が求められる一つ限りな向きを剥き出そう迷い窮まれない無さの姿に苛まれるかに、な向きを静かに貫き、な静か過ぎにたじろぐのは静か過ぎばかりに違いなくに、な向きを静かに貫き過ぎて明るみ一つ限りな醒め迷いを身に纏えたかな身など始めから虚ろと決まってような、円みを遠ざけるな

ら一閉じな丸みに醒め迷いを閉ざす振りであからさまに閉ざし損ない、にも一閉じにも違いなかろうな違いなさが易易と抜け過ぎるかに、な広みを潰し呑んで狭（せま）み至る向きへと際疾く投げ出されようかにも、な向きの狭み至りが直ぐにも失せるなら向きも失せようにも、な失せる向きに向き向かう向きが、その向こうとは異なる向きからそれとも始めからそれは向き異なるなら失せた向きからかも知れずに現れ失せ、な現れ失せを映せる醒め迷いが匿う狭くも広くも無い、さも柔らかげに硬い平らかさが向きの現れ失せを支え受ける為に求められように、な求められは空事から丸みを匿い晒す向きを直向きに拒んで平らなだけな平らかさを残して流れるなら平らかさは窄もうにも却って空事げな様を映そうか、とも求められの流されに流されて映す先の無さを映すだけなら、な無さは、狭み至り窮まりたいかに潰し呑んだ広みを平らかさを越える振りで吐き散らかし、で平らかさの偽りは暴かれよう、な暴かれも偽りを引き摺って、で空事げごとその匿われ晒される儘な丸みに平らかさは呑まれた振りで平らかさの尽き無さを狭み至る拡がりに逃がし消したかそれとも平らかさが平らかさの汚れで平らかさを汚し鈍るにしろ鈍り逸れて汚れに潜む真っ新な艶を丸み拡げ晒すなら晒すで平らかさを裂き、裂き重ね粘り転がし狭み至る丸みを向くなら向いて、な有るか無きかな向きの危うさを圧し紛わして狭み至りな、狭み至り続く先へなら先へと明るみを明るませない儘に送り接いで先の裂かれ重なり

に迫る振りでその振りへ溶けるしか無かろう平らかさを離れ、な溶けてさえも平らかさなら平らかさを、映される先の無さは映すか映さないかも置き棄てるしか無くに、な無さを映す先は何の先でも無くなり、向きの失せた広み圧されの自ずと円みを汚げにも危うげに危うげの艶で汚さを拭うかに滲まそう軽い限りな偽りそのものかの奥まりの微かさばかりが微かさで掴み取り損なわれる逃げもしなくて逃げる淡く磨き研がれ厚みも無い端めいた迫り逸りの中に狭み至り、熱い色を匿うかに届かない丸みを乞うかに満ちる触れられるなら触れられようよう厚みを現し荒ぶらせようか、迫り逸りをも狂い無く輝かせる円みの接ぎ重なり擬きな鬟なら鬟の内へと動き続ける塊の行き先の無く溜まるばかりな勢いが、勢いな限り失せるしか無くにも失せ已んで、な失せ已ませを映して映すからには映さない無さが、無さな限り無さで有り得ないにしろ失せるのも儘ならなくに、落ちられる限りの何処とも異なる、無さを已ませる已みへ落ちるしか無くに落ち異なるなら吸い寄せられるかにも吸い出されるかに無さと無さの已みは溶け合うにしろ無さの已みの強さが恐らくは無さの弱さを衝くかして、已み已ま無さを已みに映せるなら映せよう狭み至り異なる異なり已みの拡がるなら拡がるしか無い拡がりに流れ逸れる、それとも、かに映るだけな、な映されに映るか映り倦ねるかに、映さなさを映し移すなら映さない無さは無さの限りに纏えるかに触れられる円みを失うしか無くにも、な失われる円みを酷く距て

纏うかに現れさせる、な現れさせの在処の有り得なさを現させたいかに円みへの向き限りな貫きに貫かれ、かとも、な貫きの透けて頽れ果てれば貫きの失せ嵩を映す頽れ果て痕には円みな限りな円みの、内に匿った筈の円みを侵されるかに映り込むのから逃れようは無く、な無さを限りに円みな限りな円みから解き放たれるかに解き放たれ已み、貫きの痕さ圧し斥ける距たりの果てに唯そのものな現ればかりなら窪み翳される、必ず円みで無かろう円みの硬さが香り尖って尖り偏るのも為らずに独り、独りな躍り様を晒すのも有り得なげに静か過ぎる静かさに静かさが戦くかに尚も円みの偽りを暴いては硬い圧し迫りの透け嵩に囲まれ逸れようか、とも独りなら無さを已まさせてようかに無さは無さの已ませを呑み込みながらに貫き抜けるかな形（なり）を匿い晒すしか無く、な匿い晒しの触れられ無さの厚みか香りがさも後へ後へと勢いを付け失せて偽りの円みの偽りこそが隅隅まで円みを張り渡すかな隅ばかりが脹れ透け爆ぜ凋めば、な強張り撓る痕に後の無い円みの痕が円みの厚みか香りそっくりの影を隅隅まで映し取るかに、な、映し取るかに、を遥か遠くなら酷く硬そうに映す円みそれとも円みの失せに惹き付けられるしか無くにも少しも何も動かずに、な動かない何も、などはどれも動くだけの何でも無いへと失せ転げて却って硬い渦の縁が擦れる鬟かを磨り潰しては遠ざかり隙なく動くも動かないも無い何かなら何かな限りの何かを硬く閉ざし丸める振りにのめり込んでようか、な距た

りそれとも触れられない程に荒ぶる近さに裂かれ剥かれて円みの内へと閉ざされよう、と疾っくに閉ざされたに違いなくに、な違いなさに戦ける何も無いのに戦くのも叶わずに、な何も無さに包まれ匿われるかな一つ身の影も無さの透けが、円みの失せの徴（しるし）かな内向きに虚ろな鬓にぐるりと塞がれる塞がれに塗れ濁り、な濁りの濁り窮まる清かさばかりな現れが唯そのものな儘に虚ろな鬓の圧し迫りを裏返しそれとも裏返る筈も無さを暴いて潜り抜ける振りを翳すかして、痕さえ失せた円みとの距たりを逆さに纏いそれとも纏い損ない、纏いと纏い損ないを貫いて貫き已めば、貫き已みそのものが独り、独りを貫き已められずに、濁りの清かさに棄てられてきっと汚れ果ててよう虚ろを請うかに虚ろの現れの前と後とを定めたげな振りで自らを丸め誤るのか、贋の虚ろの狭さそれとも贋な限りな果ての無い広さの内へ縮み窮まる明るみへの貫きと貫け無さと向かい合い、にも、貫け無さにだけ誘われ抱き込まれるかな醒め迷いそれとも醒め已みと迷い已みへの明るみ窮まる円みとの向きの失せた距たりの、向きの失せれば円みとの、真ん中でしか無い、真ん中でしか無いなら円みも失せ無い儘に失せるしか無い、距たり已みに閉ざされ、閉ざされるなら解き放たれるしか無い、な解き放たれと醒め已み迷い已みに溶け込み、溶け込むなら引き裂かれるしか無い、引き裂かれるなら塞がれるしか無い塞がれに醒め迷い固まり、な固まりの静けさの触れられ無さ過ぎる触れられ、な触れられの何に触

れられるのかな知れるか知られないかのあやふやさにもあやふやな形（なり）を失い弱る醒め迷いだけが塞がれ放たれる儘に、な儘そのものに自らを貫くかな強まりだけを侍んで円みを近寄せられるだけ近寄せ失せさせ、にも、な自らに失せさせられた円みに自らを失せさせられて迷うだけな醒め已みが、張り裂けるかに内へ向き果てるかに内の裏返りへ明明と醒め迷い、と、な明明さの敢えない衰えに潜り込んで円みを掴み取ろうともし掛かる透ける限りに明るみを内に匿う強まりの吐かれ尽きるかに近過ぎる円み已みへの触れられが、惑い已みそびれるそびれ際の明るみへ逸れ向かう僅かな内向きの断たれ猛る窪みな形（なり）で透けに透け、にも、透けに先の無いのは明らか過ぎて透けは已むしか無かろうかに窪みな形（なり）の頑なさに挫け晒され、なそれは必ず尽きない已みの已み際の暈かされを目指してよう、な暈かされを匿うなら匿う、それとも、なの暈かされの有る筈の無さが導きぎらつかせ鈍らせ窪みな形（なり）に浸み抜けるかな兆しを平らかに翳させて内へとしか反り向かわない縁の奥まりへ集まり暈け霞む明るみの重みを匿い纏い晒す、それもそれなりに窪みな形（なり）を引き継いでよう強まりを匂わせるなら、な匂わせの匂わせ無さへ向く強まりの独りその先へ渡り向かう形（なり）なら形（なり）が窪みな形（なり）を頽れさせそれとも磨き透かせて先の先へさえ映る勢いを弾ませて強まりの向きを円み已みかに内へ向かせるか、にも、それらを圧し詰め棄てるかに、棄て

るかになら狂い無く棄ててよう、な、で裸を晒す晒された裸の皮を剥かれるかに独り残る形（なり）の、形（なり）なりの円み已みを已めさせる高み振りで深み振りの狂い無く縦に柔らかく貫かれるそれとも、な貫かれの頽れ急く徴が同じ徴の真上からさも真下へ冷たげに注がれるのを促すかなさも深みからかなそれ自らへの立ち塞がり、にしろその止め処無さにそれを越えるかな薄みの立ち昇りだけが際立ち過ぎて深みからの円みの強まりだけを顧みたい顧みの形（なり）が棄て放たれるかに自らを顧みようか、な強まりの深まりの透けてあっさり埋められ、埋められの重みの全て吐き出されて苦し紛れに高みを越えようかな振りに凝り固まるそれとも高みの頽れに撫で回されるその度に還り戻るしか無い薄みの硬みの立ち振りに突き刺され、にも刺されそびれ、還り戻りからさえ食み出し還り戻るかに柔らかげに深みを狂い無く失う失いの薄い限りに鋭い明るみに削ぎ晒される埋められの薄みの円みを独り向く向きの円みに薄く自らの狂い無さを架け渡そうかな、架け渡そうかななら狂い無く架け渡されたその独りな向きの向けられを独りの外から暴き曝して円みな形（なり）を見下ろせられるなら見下ろせば、それはそれのそれへの顧みに違いなかろうな淡く狭く疾っくに消えたかな陰へ隠れるかな望みそれとも望み無さそれとも望み無さへの望みの窮まり損ないを後ろの高みを裏へ向けて越えさせる向きの重みを、知らず望んで居たかに失い弾み、弾み舞うかな低過ぎて高みな重みと重ね合わせ

損なうなら重ね戻りへ還るしか無い無さを放ち棄てさせられ、かにも放ち棄ててようけれど何を、な、何をの無さの、何、なら何とも有ろうかな無さの無さを巳ませる、何をの、を、の重みの虚ろに剳り貫かれたかな、な、かな、の巳み難さそれとも巳み巳むしか無い狭み至る明るみへの奥まりの恐らくは捩れて奥まれ無さが、そのさも独り染みたあからさまな向きを厭うかに暈け固まり、固まりを暈かし拡げ固め直し損なうなら損なうであやふやに奥まりを斜めだけには低い高みへ浸み進ませようか、にも、かにもな円みの向こうへ逃げた艶の痕を舐めさせられるかな、高みを奥へ押し遣る振りの重みにのめる偏りが偏りを拒みそれとも偏りの痕も消して直し為ては偏り得ない向きへ偏る偏りの、軽みを纏って昇る勢いの重みを撫で延ばして後を追い縋るかに拡がり挫け、何の無さも匿い潰し消そう試みの直しようの無い偏りの拡がりの、失われた窪みな形（なり）を探して掘り起こそうかな狭み至る薄みが窪みな形（なり）の失われへと圧し迫り、にも、な圧し迫られた失われの醒め迷いめく窪みな形（なり）それとも、な形（なり）の裏向きな艶の匿われの、な、それから逃げようとするなら逃げられるかな望みが圧し迫られる儘に平らかに漂い、漂う儘に望みの断たれる姿に望みを繋ごうと、繋げる限りな形（なり）を探り取る為の予め向きの砕けた動きの徴を鏤めたなら鏤めた自らを顧み損ない、なり損ないに続く偏りの先なら先の尖り暈けた狭み至りに僅かにも望みを放ち臨める向きでも傾け

られたかに震わせられたなら、な震わせに繫げられる形（なり）なら何なりと望みを孕んでよう狭みの裏向きな拡がりの潰れ固まる様を見渡せる辺りに独り離れた予め向きの砕けた動きの徴それともその刳り貫かれた虚ろな痕それとも、な痕の予め向きの砕けた動きの徴の、徴より徴めいた艶が現す、何へとも繫げようかな形（なり）の、形（なり）な儘にも蠢いて形（なり）の定まらない様に惹かれ蹌踉めいて平らかに窪みな形（なり）を仰ぎ見ようかな振りで自らを戯れる醒め迷いの狂い無い取り留め無さの、高みと低みを知り分けられるのを誇るかに一山と一谷の危うく繫がる波な形（なり）を圧し震わせ色めきかせ、な色めきに透けでしか無さの、触れられるなら触れられようかに触れられから擦り抜けそうな淡い厚みめいた仄明るみの触れられの纏い現れ、淡い程に薄さを拒んで脹らもうとする、にしろ少しも脹らめずに淡い、望みが望んだ儘かな、窪みな形（なり）を敢えなく消し去る向けない内への円みだけを向いた姿なら姿、姿で無いなら姿の兆しを孕む姿へのさも儚く消える限りの偽りの懐かしみそれとも唯必ず触れられなければならない狭み至りを裏返したかな剥き出しの、にしろ、な剥き出しを厚く確り纏った、何とも繫がらなくて円みへの偏りへの仄柔らかみを匿う事で触れられるなら現れとして独り居処を得て安らい沈むかな、透けと透けで無さの鬩ぎ合いからそっと身を退くようなら眠り込んだ儘に透け果てる先の現れと重なる、かにも、な現れとの重なりを透け已む振りで重

なり抜けて現れへの拒みな現れを仄柔らかみの現れでしか無いかに晒すしか無くにも、な晒されをそれ自らで包（くる）み込んで、それとも、な包み込みの内向きかな仄柔らかみそれとも柔らかみの打ち消しの痕の仄かさだけの丸まりを距てるなら包み込みを接ぎ抜けられよう明るみそれとも、な明るみで明るみを失う眩みの仄柔らかみへの向きの剥き出しに包まれる剥き出しに沿えるなら添う、な、かに、失われた明るみのその明るみを匿い続ける振りの、姿の無い明るみの失われ痕に、より温（ぬる）げな少しだけ違う向きに支えられる明るみめいた淡い彩りが見出されるなら誘（いざな）われるしか無い明るみへの微かな渇きを現してようのさの窪みな形（なり）なら窪みな儘に窪みの厚みを逆さに溶かし過ごし、その居処を間違えたかな姿の失せた形（なり）の底辺りに偏る窪みな確かな姿の、あやふやにも明るみでしか無い無さの逆さを突き抜ける明らかさが、な自らの際立ち振りに凭り掛かるならあやふやさも硬げにも柔らかく引き裂けようかな望みの平らかに暈けて行き場の無い危うさに震える淡い重みに拉がれる眩みなら眩みの消し去れ無さを衝いてそれとも衝かれて、偽り翳される丸みを帯びた艶を延ばし離して幾らか重く冷たげにも尚も狂い無い取り留め無さを弱弱しくも磨き出され続けるからに変わらず溢れさせる醒め迷いの透けるような微かな限りの微かな圧しは、明るみをすっかり内の裏の温（あたか）みに取り込んで望みの平らかさの先に眺められる筈の高みを穢し削ぎ低

みを清かに流し落とし高みとも低みとも重なるひっそりとも明け透けを極める遠くへ逸れて行くかな内の裏を逆さに透かし濁らせ映す、倒され損ねて突き出され平らかな丸みの内の虚ろを有りもしない外を探すかに脹らませ脹らむ先を先に断ち切られて危うそうな程に淡く曇る内なら内の内向きな明るみそれとも明るみへ眩む、内向きな明るみの有りもしない、その無さの丸まらせる丸みに偏り沿う艶の湧き出すのを望む薄い限りに薄い震えの薄さを震わす醒め迷いから狂い無く一つ丸丸抜け出しては醒め迷いの震えの薄さを冴え艶めかせ、な艶めきの内へ、内こそ外かに、な、かにな外な震え限りを侍んで自らの内の震えを震えの抜けた底から虚ろへとも湧き出させようとさせる確かに内からでは無い微かな震えの、な震えが震えからその震えを厭う余り細かく分かれ続けて震え続ける限り無さの恐らくは有り得無さへの揺らぎ、かにも揺らぐなら一つも揺るがない揺るがなさに揺らぎ留まるしか無い揺らぎの避けようも無い浸み通りを、内へかに内へかにな向きから逸れて外へばかりに流し溜め溜め深め流し流し損ない余りの重みを溜め流し揺さぶり溜めては、溜めと流しをそのそれぞれな儘に入れ替えさせ、にも、な入れ替えの振りだけの騙し合いの重みなら重みを、偽りの影も無いなら偽りでは無い丸みを置き棄てて来た直ぐ後ろのその薄っぺらな後さえ消された軽みへ凋ませ、な揺らぎの浸み通りを隠し切り隠し損ない却って隠されもしないなら要らず隠し切られようかに、内も外も知らな

い向きなら向き、向きで無いなら向きで無い無さの拡がり窄まり閉ざされ開かれる円みへの渇きかな明るみそれとも明るみでは無い悉くから独り逃れられた震えなら震え、揺らぎなら揺らぎ、震えでも揺らぎでも無いならそんなそれの痛みより痛みに傷んで苦し紛れかに清かな、小さい限りに触れられる内も外も無い厚みの触れられようの無さが、な無さの限りを尽くしたくも尽くせない粘り着いて執濃い渇きを砕き溶かし、触れられようの無さへ浸み通るかに、無さとの異なりを淡く必ず裂き開こうその固く隠れた静かさに撃たれる震えでも揺らぎでも無さを異ならせ、な異ならせは内へと満ちるかな尖った重みを犇めかせようかにも、な様をそっくり触れられる厚みに移し映す、に映されたそれに円みに充ちた円みを恵み与えたい尖った刃のように鋭い望みの尽き痕の、押し黙られた行きずりかに行き成りな僅かな厚みの触れられようの無さとの距たりを測る距たりからの向きの影の傾きの震えに描かれ映し直される、偽りを翳し誇る円みの欠片の兆しの暈けの揺らぎを限り限りまで含み呑んで砕けた丸みの見掛けを脅すように丸み尖らせる見過ごされたかに大まかな彩りは、淀むようにも酷くゆっくり過ぎようならゆっくりの内に犇めく速さに衝き動かされ閉じた儘に剥かれ曝され傷そのものかに傷付き、傷塗れな奥の虚ろかに傷は剥かれ曝され、に身を捩るかに閉じ切れない輪を描き続けるようなら、その必ず直ぐ奥に拡がり果てる目眩く速さの失せない円みの触れられる厚みを追うかに走る

ようで、走るようなら独り走るとも知れず間違いなく走ってよう、に、それはその儘な速さを匿い晒すしか無くに、その硬さそれとも硬さより硬い響き重なるかな柔らかさの薄さへの繋がりの切れ目無さ振りを振り翳し、にも翳し損ないの欠片かな触れられる厚みのどれも半ば隠れるように傾げられ小さく角張って転げる程に直ぐに窮まる深みの暈ける限りを易易と撤き散らし窄める浅み、にしろ深みは彩りから離れず汚げにも深みな儘な、な触れられる厚みの変わらない酷く旧くからの切り口を装う彩りの尽き痕を擬える影の、深みへの鋭い切れ込みようは接がれてはずれずれては放たれ丸みを接ぎ描こうかに彩りの尽き痕の擬えの暗みを細ませる細みに隠無く覆い綴じ伏せられ、そうして細みばかりが細みの内へ逃げ込む傾きを保って暈け果てるのを目指すかに走り回るしか無いなら、それらは予め映され淀み濁って丸みからさえ拒まれ汚げも顇れたかにさえ重なり凭れ合おう様を晒す映されの底の底ごと迫り上がって丸みをねじ伏せたかな尖り挫けた勢いをその姿と偽る偽り振りへと爆ぜるように根を張り拡げるようにしろ、ようなだけで、にも張り拡げ異なる兆しさえ現れないでは張り拡げな形（なり）を虚ろに晒し置き棄て損ない、な損ないの直ぐ裏を晒して透けたげな深みを満たす、彩りを厭う暈けの暈けが暈けを暈かす穢れ振りそれとも辺り構わず虚ろの汚れた匂いを嗅ぎ集めたいかな内は無く、なら内が内な外な、あやふやに脹れるばかりな丸みの崩れて愈愈丸みに塞がり延びる、そ

の偽りを脅すようにひけらかす丸みの平らかさへ諂う様を押し並べて翳りを呼び込みたいかな犇めきは犇めきな儘に自らの濁った響きの連なりに妨げられ平らかさに拒まれくすむその奥に、それとも奥は唯犇めきの響きと同じに虚ろに濁るだけなら、な奥とは異なる、な異なりが響かせるなら響かせてよう、にも響きなど戯れにも要る筈も無くに、にも戯れかに戯れ異なり戯れ懸ければ要るかも知れずに、な事とも異なる、何事とも異なるかな異なりの奥との異なりへの流れ出しそれとも失せ拡がりな形（なり）の、形（なり）との異なりしか現さない現れの、現れとの異なりそれともそれとの異なりな、そんなそれならそれが失せて失せ已むしか無いなら無いで、な已みの現れ無さを隠らせよう辺りの何処でも無さを半ば取り込むか取り込み損なうかな円みの穢れそれとも穢れ無さそれとも穢れと穢れ無さの変わらなさの狭間を滑る清かさそれとも清かなの失せ果てを兆す、円みの温げに直ぐ外のそれとも円みを撫でて円みを円みに留め棄て懸けてよう、円みを孕んで円みの欠片な形（なり）を晒すしかない狂い無く穢れた奥まりの果てようの無い襞の重みを失って襞の儘に襞とは違う覗けない穴のような重みに引き延ばされる平らかさの上っ面を滑る、それでも襞な濡れるような重みそのものかな艶の、な艶なら艶の窄んだ姿の欠片でしか無くに艶な、艶の失せた濁りと変わらない変わらなさを自らの窄んだ姿から引き摺り出して欠片の姿を研ぐように突き出すしか無くにも直ぐに突き出し尽きれ

ば尽き果てた先なら先に、先で無いなら無い先に塞がる覗けない穴の先めいた
奥かに、円みの欠片かも知れないかな形（なり）の穢れなく唯穢れなく清かで
も無い虚ろな拡がりそれとも狭み至り窮まる光りに満ちた暗みの果て無さをさ
も卑しくあざとそうに装う、円みの欠片も無さ、のせいで、な無さの外を隈無
く円み塗れに潰してようとな圧しの円みそのものな触れられるしか無くに触れ
られないに違いなく暗みの果ての光りに満ちた距たりを厚みめくなら触れられ
る厚みに置き換え已まずに動き続けるしか無さそうに動きようも無さをひけら
かし、なひけらかしの尖った先の微かな丸みの裂け目の奥に縮み過ぎればその
硬さの匿われの静かさが大き過ぎる大きさをその外へ投げ刺して裂け目を剥が
し切り裏返したげに狭み至る重みだけの、在り来たりめく常に欠ける処の無い
円みかな、な有り得無さの吐き出したくて吐けないあやふやな虚ろさが求めて
よう重みだけの狂い無さ、なら重みの外は狂うだけ狂って狂いを擦り切らせて
狂い無く狂うだけな、な外など始めから無くに失せ、なら無くにな儘に失せる
筈も無く、に失せ已めば外は外な限りに外との異なりに侵されるか濁りを濁り
の儘に透かせ澄み渡らせて馴れ合うかしか無くに、さも行き戻れそうな処を探
そう探し振りの途切れるしか無い戻れようの無さの無さだけを振り返れるかな
外それとも外との異なりそれとも、な外こそ失せて失せ已まないなら異なりは
已むしか無くに、な異なりの已みへと外なら外の無さを一巡りして行き戻れよ

うかな狭げな兆し塗れを楽しめない、な楽しめなさだけを楽しみ傷み挫けて居たいかな楽しみの刺刺しさの周りを巡り逸れる輪を重い限りに描き掛けては輪の丸みそれとも丸みの滞りに躓く、躓きの先の躓きに断たれ損なう、触れられる厚みを貫き抜けたなら抜けて先は無いかに透け果てるたいの失せた失せの失せへ透け戻るかな、小さくも硬みを撓らせて磨き出されて勢かな偏り、にしろ円みそっくりな艶のたたく走る濁りを惑わすだけな鈍い幻めいた暈けた透けを満たす濁りの抉り出平れるかな硬みの弾けようかな、偏りに匿われた偏りからの戻りの撥ねの重みさ偏りを食い破る破れ目の奥に暈けて乱れる細切れな艶の数知れず犇めく奥まがの透けの小さ過ぎる、にしろ何より小さ過ぎるかのまるで知れなさの、と知りなくさせもする、奥まりと狂い無く距たって奥まりを裸に剥いて奥まりの奥を表しか無くすかに覗くかな、小さく尖る程に尖り過ぎを大きく揺らし、にも、な揺らしが揺らしを揺らし転がし窄めれば小ささと大きさだけが骨の洗われるかに窄まりの縁へも転げ出ようかな為だけの擦り切れた窪みの砕けた跡かな暗がりが沈み閉じる辺りに漂い香る振りの、尚も揺らしを孕んで奥まりへの繋がりの徴を静かに翳し隠らせたそうな細く曲がり捩れ失せそうな擦り傷に似た透け果てた粘りの直ぐ際に伸び上がる小さな高みの暗みへの向きが探られる、な探られが高みを暗い向きへ柔らかく圧し狭める動きを招くかなら高みの頽れる替わりに高みを引き摺り降ろし果せて滲み出そう向きの探

られへの諦めそれとも諦め已んで現れるなら現れる狭み至る向きを探るかにな向きへ滑り向かい続ける奥まりへの繋がりの徴を貫きたい諦めそのものかな望みなら望みの、知らず乗り越えられた高みのその先からの眺めを眺め毀して望みもまた毀れるしか無くに狭み至り固まった狂い無く真下へ向かってだけ細く窄まり続ける向きを覗き差し下ろす、漂う香りに擬えられるなら擬えられような真下の向きに被さる真下へ奥覗きを塞ぐかに架け渡される、直に知られるようでも未だ在処の知られない拒まりの乱れを知らず暗みの窮まりかに尖る限りに細く映し取れたかな、艶は、んで贋の窪みな形（なり）を隠し揺蕩う向きを失い已まない透けなら透けの、その重みへの真下にだけ深い安らいの墜ち振りが真下を逸れて裂き示し開く、覗かれるなら必ず奥まりに違いなかろうその裂け口に纏わり付く奥まりの奥まりから逸れて要らない匂いばかりが畳まれる底に埋もれそうに暗みの窮まりに微かに残って仕舞う硬い石礫かな香りの走り去りの冷たさを追う、暗みの窮まりさえ柔らかに歪ませ香りを煌めきに変えよう醒め迷いへの唯迷いだけの向きの一流れ限りの細みの濃やかに裂けて真下を避けながら揺れる脹らみの脹らみな為の脹らみとの距たりを厭い弾け流れる外を引き寄せ偏らせ、な偏りこそが距たりの始まりに違いないのが唯脹らみな為の脹らみの為に晒されれば、な歪な輪を描き挫けるかに掠め去り已まない外の暗みが齎そう丸みを掠め用いて、誤りかな、な、かなを転がし喜んで楽しげに易

易ともその窮まりを拒む細み已みの明るみが暈けの内の暈けの硬みを象ろう象りに滑るように背き弾け狭み至りへの至る限りに外を馴染み弾き斥けて象りそのものかに彩られる現れに満ちて細み已みの明るみへ必ず立ち戻るしか無い、さも円みの奥を奥こそ表かに薄過ぎる程に確かな硬さの欠片かに晒そう、に晒される円みの奥の狂い無く向きを内の外へとだけ定めて揺るがない、な揺るがなさに眩む程に明るみを増す細み已みは、已み続ける程に細みを孕み匿い外ばかりで内を抜き取られた外を離れ囲む明るませへ弾き現し際立たせようけれど、細み已みの明るみの細みに真新しげに撥ねられ、何処へも立ち戻れようの無い帰り着けたかな安らかさを振り撒いて、な様へとその自らな儘に混じり込み、外を囲む外の明るませから、な様を距て廻し、な廻しの内を向こうと外を掠めるかに内と外との係わり無さを偏らせる丸ませの明るみそれとも暗みを、何処へも立ち戻れようの無い安らかさとして振り撒き直せたか直し損ねたかな狂い無く底無しかなあやふやさに投げ出し、そうして、な狂い無さに明るみそれとも暗みを丸ごと投げ入れ、な投げ入れに追い付こうとする細み已みの明るみを濃やかに揺らし煌めかせようか、にも、な明るませそれともそんな明るませの已み果てが已み果てと重なる硬みから滲み拡がろう向きを奪われた明るみ、なので明るみな儘に何とも触れ合えず凍るように固まるしか無い奥深さの果てなさを幾らでも置き回せる平らかさの上辺を滑って奥深さに戯れ懸かっても奥を

明るませる深さの明るみに断たれ、に断たれる限りな明るみは、戻るまでも無
いかにまた、窮まりを拒む細み已みへ傾れ込み溶け舞い、細みの限りを現し尽
くすかに、にも、かになだけなら暗みを細み已みの直ぐ奥の平た過ぎて触れら
れない厚みに奥とは違う向きの外へと貫かれた透けの拡がりへと呼び入れて仕
舞ってよう、な暗みの暗み已むに任される任されの凍った渦を数知れず転がす
かな荒ぶり冴えて透け果てる平らかさの行方の定まら無さはその無さを独り思
う儘に自らを切り刻んで暗み已みを破り棄て、にも、な破り棄てを接ぎ已まな
いかに、明るみでも暗みでも無い、な無さとの異なりが異なり已む振りで却っ
て凍った渦に準えて荒ぶり冴えるかな兆しを冴え渡らせる徴なら徴は、一繋が
りかにも撒かれ乱れ舞うようかにも失せるなら失せ、な失せ痕に徴なら徴な儘
にこびり付くかに徴の荒っぽく剥がされた影を濡らすような様を重ね重ねさせ
て穢し、かにも、な穢れなど敢えなく呑まれようけれど何に、な疑いから穢れ
磨り潰されるならされるで、な疑いごと、疑いへの疑いでも匂わせそうな徴で
有るにはぼやけ拉がれ過ぎた霞むような剥き出しの触れられ無さを翳し鈍る垂
れ下がりな形（なり）を色を消すかに色めかせる傾きの塊それとも塊そっくり
な虚ろの重みを剳り貫いた淡い軽みへ溶け消えるそれとも固まり現れる、かに
も、な様に様が滑り過ぎるしか無い過ぎ行きの先の無さの、な無さの先を見通
せるかな丸みなら丸みの傾きに凭り掛かるなら戻る向きへ立ち戻るしか無い傾

きからの逸れへと傾れ込み、な勢いの拡がりそれとも狭まり果てを迷い偏らせる流れなら流れに流れの向きの暗みを絡み纏うように流され、疑い無く磨り潰された戯れの繰り返しかな疑いの痕を撫で摩る動きでも望まれそうな如何にも小さげな暈け過ぎて明るみさえ暗みな暗がりの消え痕の奥まりに擬えられて迷い偏りを易易と偽りにだけ打ち砕く様に囚われ、な囚われを囚われた儘に裏返すなら、そう裏返した徴もまた徴な儘に徴から裏返って徴異なるしか無かろうかに、な徴異なりへの向きが向きを探るかに求めるしかない外なら外、外で無いなら外の無さに刺し貫かれた、さも細み已みを偽る、偽りな儘にも偽りは偽りだけを偽り、な偽りさえ紛わず細み已みで有るしか無い明るみに打ち消されるしか無い、な明るみの有り得無さそれとも、な有り得無さを貫いてだけ明るみを明るませよう明るみの明るませが、な形（なり）を形（なり）なりに貫いて拒めるなら拒もうなら、な拒みこそ拒まれようかな明るみと明るませとの距たりを埋めるに違いない細み已みの、な自らの形（なり）を拒んで明るみと明るませとの距たりを弾き砕く虚ろを真似るかに虚ろな勢いの、無い外に拒まれるかな狭さの奥まりへの一途な向きの断ち切られるしか無い無さの拡がりに圧し包（くる）まれる狂い無い乱れ、な程に乱れるばかりな狂い無さの奥まりそれとも奥まり異なりへの投げ出されそれとも投げ出されに擬えられて明るみを明るみ異なりかに取り戻す、現れようの無い円みを匿ってだけ眩む眩みは、細

み已みを已み限りには已ませようかとも、な振りだけを翳し、恐らくは磨り潰されたかな暗みのせいで円み剥き出しな眩みの外へ明るみを弾き距てて明るみ異なりに匿われる円みを暴きたいかに細み已みの細みは暈かし散らして已みだけを透かし、に透かされる已みを細ませる細みの已ま無さに侵される明るみそれとも明るみ異なりに交わり馴れるしか無かろうかに明るみ已む兆しの欠片を繋ぎ繋ぎして明るみを偽る振りで明るみを鈍らせ円みの裏かへ逃がす様だけを際立たせ損なう明るみのあやふやさを衝くかに、な透かされを眩みが眩みな儘に透かし通せば、、透けは透けな儘に眩みでしか無くに斥けられるしか無くにも、な透けの斥けられの痕に蔓延る眩みも眩みに貫かれ、な眩みを貫き抜けた眩みは独り、眩みを透かし果てて果てに円みを求めるしか無い拡がりへと圧され抛られ狭まりへ浸み通り逸れようかな逸れが求めても円みへ至れない奥行きを塞がれ果てた奥まりへ逃げ込むようなら逃げ込め逸れようかな逸れの向きとの僅かな距たりに導かれ、それとも、な距たりを砕き散らした痕なら痕の、な痕からら逸れて行く、さも円みを映せそうな偏りの暗みが流し晒す艶擬きな窪まりに狭く囲まれて濁り煌めく虚ろの艶擬きの拗りを透け抜け、映された円みの虚ろなだけの姿へ接がれる虚ろにしろ確かに艶な流れの虚ろを押し分ける重みの運ばれを艶の振りで越えられそうか確かに越えたかそれとも越えるまでも無かったかに、眩みは眩み已んだろうと眩み独りでそう分かれば分かり已み、眩み異

なりそれとも眩み異なりとも異なる、その深みを測りたい望みが望む虚ろなら虚ろな儘に虚ろ已むしか無い、円みの何処にも映らない無さだけが拡がりを断たれ狭み至ろうとも悉く狭みも至りも除かれ、除かれ已んだ痕も無ければ何の無さも無い無さへ身構える向きが向きだけで立つしか無かろうかに敢えなく失せ、失せ已めば、な已みこそ失せて已みようの無い無さが、な無さの已みを求める向きを剥き出させたくも向きは震える筈も無く、な筈も無さに震えるしか無いかに向き已んで、な已みだけが残るようなら已みは已みで無くなるしか無くにも已み異なりへ至れもせずに、なら、な儘にも已み已んで、な已みを呑んで呑んだ已みに呑まれようかに捌き越えれば越えたでそれでも已み異なれようも無くに、な儘に已み已むしか無い無ささえ無さ異なって、な異なり已まなさの異なれなさ独りが独り異なれば、な異なりのそれ限りな狂い無さだけが、円みを限りなく距てる明るみそれとも暗みそれとも明るみでも暗みでもない狂い無い乱れそれとも狂う限りに狂い果てる乱れ無さそれとも、な乱れ無さの無さの乱れを乱れさせる、円みを抜けて円みの外に触れられる暗みを映す暗みでしか無い明るみは、な明るみの円みを厭いながら、な厭い振りに引き回され随うしか無くに円みとの距たりを暗みで埋め、埋め果てれば、な果てから拒まれ、にも、な果ての他には果て已めないなら已まないで、に已まなさを已めさせるしか無くにもそれも為らず、な為らなさを独り纏う儘に已まなさを抜けて抜け

已んで、な已みの、自らを鏡に映したかな明るみと、明るみと明るみとで向き合う限りに明るませ合う果ての明る過ぎる闇に刺し貫かれ、明るみ已みを自らの明るみとは一つかに、一つ限りの円みに遠い限りにも暗く包（くる）まれる様を明るく映す狂い無さ一つが、で、な一つは円みを撫で廻そうかな映されの有り得なさを確かめたいかな揺らぎを揺らぐ端から削いで削ぎ已まないなら、な已ま無さ一つが円みと明るみを向き合わせ、向き合わせるなら透かさず溶け合わせ、溶け合うなら映し合って刺し貫き合おう硬み一つの一つが一つを唯硬みとだけ映し、に独り映し映される硬みが匿う明るみの在処の知れ無さに惑うかに、な惑うかにな一つ限りに眩んで眩み已まないなら、な已ま無さは乱れるしか無くにその已ま無さは揺らいで揺らぎ已まず、にも、な已ま無さの已むか已まないかな揺らぎは已みようも無くに已む已まないから離れるかに唯戯れるでも無く弱げに斑に掠れるように乱れるようで、な乱れるようなのを乱れ無く映すのは、それとも乱れ無くには何も映せない、な映せなさを丸まろうとし損ない窄まる一塊な触れようのない厚みと触れない儘に掬い取るかに映すのはその映せなさしか無かろう、な無かろうな無さの及ばない向こうにあからさまに消える淡くに濃い暗みとの距たりが拡げる狂い無い乱れの窮まる、な窮まりの窮まり無さを拒んで拡がりを狭まりへ映し移し投げ返そうかに翳され薄みを際立たせる他に現れようの無い奥まりそれとも奥まりの円みそっくりな断ち切ら

れに断ち切られる円みとの距たりが齎す眩みなら眩みは、円みとの距たりの距たるだけで測られ知られる鮮やかささえ明明と食い破り円みへさえ侵し暗む明るみに匿われる縮み果てた円みの、円みとの距たりをほんの微かにも極め撃つ小さい限りな泡の一粒のような一波の消え去りを見逃すまいと、撃たれた円みとの距たりへ根刮ぎ傾れる流れに重げに沿い墜ち懸け、な流れなど眩み自らに映る、薄みに耐え切れず裂ける奥まりの影と見抜けば見抜いたで影は重みと厚みを冷たく幾らでも孕み増そうと奥まりの姿を粉粉に散らし逸れるなら、な逸れに乗るかに円みとの距たりとの距たりを捩り回し回し損ねても距たりから円みまでの見通しを切り開き潰し呑む向きの勢いの有り得無さを貫いて貫く先の有り得無さを掴み取るかな形（なり）を円みとの距たりへと偏り曝す向きの擦り切れながらも延び続ける徴への繋がりを探ろうと捩り回し損ねを隠し潰し繋げては距たる先の円みを映そうと試み続け、にも、な徴との距たりの重みに墜ち果て醒める眩みの眩み自らを映すか映さないかなあやふやさに迷うばかりで、それとも、な迷いばかりなら迷い醒めるしか無かろうな映された眩みの向こうに向こうなど無くに奥まろう、円みが円みの厚みに触れて狂い無く乱れる乱れの狂い無い円みの円みが円みに沿い遂げる窮みに窮み抜ける、明明とも薄みを撒き散らし果てそうで窮み抜けを貫き接いで乱れの狂い無さを絶やさない円みなら円みの、にしろ眩みの向こうの奥まりが棘棘しく障りで円みな筈も無い、

舞い散り薄み殖える戯れに乱れる形（なり）を振り撒く振りで狂い迷うかな色めきを消し現し、現しの硬みを柔らかげに尖らせ溶かしては、柔らかげにも狂い無く決められた急くような間（ま）を丸く舐めるようにゆったりと取りながら円みな筈の無い円みに沿うなら始めに短く尖っては、な尖りに溶け煌めき現れ続け消え絶えるしか無い明るみの繰（く）り放たれの、眩みの向こうの奥まりよりさも遥かかに距たり戻る戻り果てに立ち昇る透けて暗い暗みの艶に映り鈍る、薄みの跳ね飛ぶかに舞い潰される平らかな向きに並ぼうとその明るむ姿の繫がりに望みを繫ぐかにも波打とうと、な並びな限りの狭みへ明るみ果て、消え明るもうとの企みを接いでは後ろ向きかに進む危うさの薄さに乗り偏って、それとも偏る振りだけかに流れ進めそうにも敢えなく暗みの艶の深みを覗いて戻れないかなる縁の狭みへ散り掛かる危うさの途絶えに戯れ懸かられる虚ろさに丸みを孕む暗みの果て無さかな望みそれとも望み無さを抛り戻し呑み損なうしか無い姿の失せた細みなら細みに小さい限りに絡み、な絡みの小ささを傾げ霞ませる、何の大きさも計れないなら小さくさえ無い小さ振りが匿う細み已みならされ已みを覆す、眩みの外から失せた眩みの外の失せた眩みの外からの狂い無い乱れを孕み隠らせ尽きない細み已みの痛み拡げよう眩みの外の失せへの細みの甦りそれとも甦り已みそれともその磨り潰し合うかにどちらでも無いなら、な無さを跨ぐかな痛み固まり丸まり窮まる細み異なりの異なりように限られた細

みなら細み已みに貫かれ細み異なりを異ならせる眩みの外を狭み至り求めるし
か無い無さの細みなら細み已みでしか無い、な已みの細みでは有り得無さの、
細みの失せた失せを操ろうかな、な、かなの外からでも無いなら、な無さの外
からかな細み失せへの円みの冷たく濡れた艶の剥き向かい挑むような圧しの重
みな限りな、な重みを細み已みまで引き戻し、な已みを裂くか剥くかして圧し
の重みを重み異なりへ換える圧し已みの已みの圧し異なりが貫くそれとも貫か
れる、な何に貫かれるも無くに圧し異なり異なる、な細みなら細み、な痛みな
ら痛み、で無いなら無いが無い儘に向き合うしか無い、な向き合いとは異なり
果てるそれとも異なり已まない、にも眩みは眩みなら眩み異なれようか、な眩
みの眩みを踏み越えようとする構えに眩み直り逸れて失せる眩みを甦らせるか
な眩みの眩みを眩みから眩み異なりへ換える振りの痛みとさえ換えられるかに
その濁る縁も鮮やかに鈍り現れ延び、断たれ、断たれごと眩みの外まで貫かれ
る虚ろさそれとも虚ろ擬きな、圧しを衝き貫こう向きを求める狭み至りさえ後
ろ向きに引き抜こうかな引き戻りへの望みなら望みの重過ぎて望み自らに圧し
鈍り潰さるれ、な圧し潰され独りが圧しを衝き貫こう向きの下で、な向きを見
出すなら見出す見失うなら見失おうかに、な向きとの僅かな距たりの僅かさへ
浸み接がれ圧し已むしか無い已みの静か過ぎる静かさの過ぎればこそ静かさでは無
い無さを圧し潰そう兆しの研がれた鈍みの、兆しなだけでは已まない触れられ

るしか無いかな冷たさの薄みを拒まれ圧し出される厚みそれとも厚みと擦り替えられ尽きない、虚ろな細みの丸みを目指す向きの定まらない能う限りにしろ僅かな重みを含み匿い爆ぜ隠らせる動きそれとも動け無さそれとも始めから動きとは異なる、にも動きを動かす動きそれとも動け無さに向き合う動きの脇の動かしを静まらせる外の、外な限りなら外な儘に外の内でしか無い内へ差し込まれその薄さを貫き抜ける抜けの薄さを丸めるかな動きの細みの細過ぎるなら細みとの異なりの剥き出されの已ま無さが静か過ぎの内に満ちる激しさを呼び招いて剥き開き窮める円みとだけ現れる円みとの異なりの、その異なりとの異なりを狂い無く晒されて失せ果てる異なり痕へ貫き戻る円みの剥き開き窮みの薄みと直に触れる、何の圧しからも冷え逸れて果ての無い円みの内か外か内も外も無いかの揺らぎの凍るような重さとの異なり果て始まりは、果て始まる限りに重さを鈍り逸れるかに縮み尽き、な尽きの縮み已みに弾かれ掛かる硬みを爆ぜ散らそうかな兆しも爆ぜよう、にも散り果てようも無いなら、な果てようも無さの明るみの欠片を集め固め捩らせたような硬みの、硬みの痕を滑らかに衝き煌めかせるかにも硬み已まない柔らかみそれとも、な柔らかみに浸み通る眩みの霞み鈍りを顕わな限りに剥き晒し、剥く儘に晒し切ろうか、な剥き晒しの已ま無さの窮まりと行き成り触れられなくも隙なく向き合うかにも衝き合わさるかにも静まり凍り至る狭みに捩込むようにそれとも捩込みようもないよう

に凝り拡がる平らかさの窪まりの反りの僅かな奥まりを測り損ねるしか無くにも、測り損ねの重さとの異なりを狂い無く静まり凍る限りに艶めかせて窪まりの反りを窪まりの反りに密かに裏向きに映し移したかにも、な映し移しの見せ掛けに過ぎ無さに付け込む振りの円み始める狭みの拡がりに、な拡がりを透け溶かす艶めきを探すかにも、浸み渡ろうにも重さとの異なりと僅かにも距たるようなら、その隙の凍り尽き果て已みの顕わな重みの冷え切った生生しさ擬きそれとも生生しさを凍らせる震えにでも侵されるしか無くに窪まりの反りの裏向きに表向きな望みを繋ぐ振りに望みとは裏腹に拘らされ、な裏表の裏が表と現れられる限りな反りの反り異なりへの向きの縮み窮まる奥まりが一つに縮め纏められ損ね損ねて影も無さそうな裏表を小さい限りに匿う明るみそれとも明るま無さの始めから凍り尽きる、な凍り尽きを貫く反り已みの、反りを外して已みばかりな已みに溶け、にも溶け固まるしか無いなら、な溶け固まりから逸れるかに、な逸れるかにを抛られるようなら抛って抛り逸れ、にも、な動きも揺らぎもしない逸れは逸れな儘に已みばかりな已みを突き抜けてような硬く厚い暗みの切り刻まれて数を殖やし尽きない細かな欠片のような、にしても塗られたように煌めくかな徴に眩み溺れ窮まる、な窮まりなど唯の透けの虚ろが虚ろの重げな濁りを映し賑やかせただけに違いない、な映し賑やかせの狭い限りに丸みを孕み掛ける奥まりそれとも奥まりの裏返しかな、な裏返しな限りにだ

け冷え冷えと僅かな厚みの傾き窄まる小さな艶を丸まらせる、な丸まらせの傾
き窄まる艶から逃れる向きなら向きからの、尽きない尖りの先の波立ち、その
波を消すような溶け煌めきの溶け接ぎ合いが描く、消え果て尽きない輪を匂わ
すだけの眩みへの流れ向かいそれとも掠りもしない行き違いそれとも流れ向か
いと行き違いの暗みな限りかにも、な限りに触れそうにも触れずに躱し暗みを
逸れ切る僅かなずれは、何のずれかも明かされず唯ずれの儘にずれが辿るしか
無かろうその細みを活かせる限りに活かす細みが匿う細みより細い眩みの、拡
がるばかりな、その拡がるばかりに拠って取り返しの付かない窄まりように淡
く渦を巻き始めそうな兆しに弱弱しく墜ちるしか無い、にしろ墜ちるならその
墜ちるだけ昇るしか無く、昇るだけ墜ちて昇るしかないならどちらが墜ちるも
昇るも無くに、その儘漂うのも儘ならない儘に根を張るように、な根にしろ唯
透けた窪まりを抜け塞がらせただけな細みより細い眩みの、な眩みとは異なる、
な異なりに眩み已ま無い眩みの、な眩みとの異なりを呑むと呑み損なうの間に
呑まれ断たれて挫け消える、な消えの窪まりの行き成りな脹れと暗みと重みを
殖やし溶かして塞がり抜けるのは窪まりを映して窪む限りな先も後も無い貫き
の他に無くにも、な窪みから窪み異なれば何の異なりも何の事でも無くに失せ
ようか、な失せ痕の何も失せて無いなら失せ痕では無い無さが先も後も無い無
さに映ろうと湧き上がるにしても、な無さの湧き上がりの有り得無さそれとも

有り過ぎて無さを弾き定め消す様は、唯、な様な儘に、な様を貫き果て、な果てが果てを貫くなら、な貫きの透けるに任されるしか無くに貫き果ては突き破られようさも閉じ固まった眩みかな徴の、その消え際の辺りの微かな窪まりへの向きの、直ぐに尽き果てる暗みの透け塞がる、塞がりの細みに接がれるしか無くにも貫き已もうか、な已みに眩む眩みに眩んで眩みを狂い無く消し去る明るみへの徴それとも明るみへの徴を拒む明るみの暗みな限りな細みの明るみの有り得無さを映し消し尽きれば明るみへの徴の無さを、映し消し尽きを裂いて露わに縮め剥き晒すしか無い、真下への仄かな重み擬きな裏返った明るみの撥ねる縁の鋭い偏りが透け衝き上がって、な上と下との互いを打ち消す映り合いかな透け塞がりの触れんばかりな震えを拡げ昇らせる艶の円みへの渇きそれとも艶が艶の儘に円みの縁の偏りの縁で行き止まる、虚ろの潰れ失せた失せ痕の淡く透ける微かな厚みに薄げに沈み溶け失せ掛ける虚ろの重みめくそれとも重みの無さめく、なそれがそれにだけ触れられる触れられの、行く先に潰れ失せたなら潰れ失せる事も無い虚ろそれとも、な虚ろの破れ目の奥に覗く虚ろを探るかな内を向き過ぎれば縮む限りに透ける小ささに包み塞がれた、かにも、な塞がれはその儘に塞がれの貫かれな、塞がれとも貫かれとも係われ無さそうな、虚ろ自らとさえ係われない虚ろなら虚ろの探り出され始めよう掻き出されたような艶それとも艶めくばかりでその艶めきを内から呑み被さり、な被さりの艶

の無さに直ぐ先かにも距たり果てた虚ろの艶なら艶を映しそうな崩れ零れ続けるる姿を傾けては丸まろうと真下を向く色に凍るように湿っぽい重みを含ませる一震えそれとも、な一震えに厚みを吹き込もう磨かれ柔らかそうな重みと虚ろの重なりが造る影なら影の脹らみそれとも窪まりそれとも脹らみと窪まりの重なりが匿い偏らせる昇り窄み失せ掛ける、な昇りに懸かり捩れ、にも、な捩れを直ぐに直す勢いの儚く消える消え際の儚さの薄い限りな厚みそれとも、な厚みを軽軽と置き去りにして虚ろの破れ目さえ取り払ってその破れ目の先の虚ろの失せ痕も予め除かれたかな狂い無い揺らぎでも狂う限りな揺らぎ無さでも有るに違いない、隠し身を隠し窮めるかに暴き隠す現れそれとも現れの影だけかな現れの隠される、な隠されを隠した、なら、な隠されと僅かに距たろう恐らくは、な隠されと何も変わらない隠され異なりの姿なりが現れそうな微かな色でも掠め去ろうかなゆっくりな限りにゆっくりとその先なら先へ延ばされようそれとも延び切り断たれよう徴は独り、にしろ、な何が独りなのか、な独りなど辺りに影も無いのを行き成り確かめさせられるなら、な徴は、な徴でだけは無い徴なのを晒すかにも却って勢いを増すかにも潰れ失せ、失せ捩揉まれ延び、延び戻し引き弛み裂かれ懸け、な裂かれの延び埋められ暈け偏る向きだけが滑らかな限りに溶け開かれ、開かれ窮まれば、な窮まりの窮まり無さが取って代わろう行き止まりかな、な行き止まりかな、な向きに逆らい引き延ばされる限

りに延ばされる延ばされ弛み果ての、向きの涸れ尽きるかな硬く凍る円みの暗む流れの凝り滲む淡さの溶け貫かれる、向きの無さへの引き延ばされ尽きる尽き痕が尽き痕を舐め回す触れられるかな円みの暗みが匿い隠らす、独りなら止まるしか無い揺らめきかな、何の徴も呑んで徴の無い徴そのものの、円みへとさも遠回りに阿るかな一震えそれとも、なそれともが探られるしか無い儘に探り切れずに引き延ばされる限りに縮み竦み果てよう、円みに抗えるなら抗う眩みの暗みを偽り色めかせ転がし逸らせるかに円みの奥へ滑り転げる勢いの消える丸み帯びを楽しむかな軽みそのものな重み振りの淡く消え懸かる奥まりそれとも窄み果ての果て無さばかりの眩みの小さ振りが錐揉もう窮まり尽き無い尽き無さの窮みの暈け眩みそれとも、な眩みの眩みようも無さが唯その狂い無さを曝し極めるかに縮み振る限りに小ささを孕み隠す円みそれとも拒まれながらも動かない円みの残り滓かな窪まり振りの窪まら無さの無さを狂わせ続ける一震えの蕩け固まるかな偏り艶めく丸み帯びを厭い逸れ懸かる流れの、な流れから距たるしかないその流れそのものの眩み已む已み際に研がれ擦れ切り出される端なら端の切り出され振りに映る、に映り込んだその映り込みの映り込み振りの何も映さないかに、な映されを映す限りに映し込む狂い無さの無さばかりを狂わせる限りに狂い無い奥まりの裏返りかな円み果ての小さ振りの限り無さそれとも、な、それともだけがその儘に切り出される姿自らに溶け淀んで淀み

沈めばその基に傾ぐ暗みを乞う、円み果ての小さ振りに匿われそれとも小さ振りから逐われ磨かれ、な磨かれ振りに映り鈍らされ括られる円み帯びを擦り抜けるか逃げ回る明明とも姿を眩ますかにその在処だけは有り得ないかに示される円みに拒まれ消え失せるなら、な消え失せの姿に自らを見出そう虚ろなら虚ろの移ろわなさを貫くそれとも、に貫かれる眩みの眩みへの眩みなら眩みな、な様への狂い無い偏りの現し出そう眩みとの異なりの兆されるに違いない、円みを凌ぎ越え消えるかな頑なな昇りに掛けられる限りな重みを掛ける傾きそれとも傾きが傾きを呑んで傾き越え損なう損ないも失せれば昇りも淡く弛み溶けよう溶け振りの振りが急き拒まれ毀され除かれる先行きしか現れないかな唯眩みでしか無いと見通されながら、な見通しの濁り果てるしか無い無さが無さを無くすらしい徴の徴を消し暴いて晒される失われた先行きめく、やはり唯眩みでしか無かろう奥まりなら奥まりを掠め触るなら、な触りに映るか触りが描き出す艶自らに厭われ拒まれ独り放り出されよう艶めきそれとも艶めき痕に擬えられる、な擬えへの掠め触りの向きにも為らないにしろ向きを象るしか無い艶めきの消え無さの徴が、な徴に集る、集るだけの徴に傷み窮まるなら却って、な徴限りな象りを徴に映る徴との異なりかに徴に集る徴の外へと含み翳して已まない已まな無さに阻まれ抱かれる、にも、それとも、かにも、な、にもとかにもとの距たりに消し散らされ引き裂かれ延ばされる、円み果ての小さ振りが映

す、それとも、円み果ての小さ振り異なりから、さも映し映されの外からかに
映され逸り逸らされる、な逸らされに消え失せた徴しか映さないかな映され無
さの流れ断たれるかな一震えに掠め触れられたかな擦れ痕かな、かにも、な痕
など影も無かろう、な無い影の在処かを直ぐ早くに探り押さえ浮かび偏る、な
偏りだけに測れそうな姿の無い円み果てそのものとの距たりの濁りを映すなら
映す、円みを乞う限りに奥まり脹れる小さ振り染みた、それとも偽りの小さ振
りを楽しむだけかな円み乞い擬きな、映し映されの外をさも匿うかな内が内を
隠らせる限りに内な内をひたすら外へと接ぎ飛ばし晒し捩らすかにもその重み
に従って滑り墜ちる、な滑らかな跡の消え痕の穢れ燻んだかな匂いを消し損な
う暗みなら暗み、それとも、な暗み故に暗み異なりを強いられそうな、抉られ
た様を翳し浮かべ潰し傾げ揺らし、揺らし已む、窪まりの象りの偏りに窪まり
窮まる真下への向きから逸れ偏る硬み限りな窪まりその儘に象られた硬みなら
硬みは、な硬みな限りには傾げ揺らめくしか無い無さを纏い、な無さと戯れる
かに舞い凝り散り懸けようか、な舞いばかりへの揺らめかせを専らにするなら
硬みは溶けようかな真下への向きの弛みを揺蕩わせる、にしろ、な事らの外か
ら照らされるに違いない窪まりを底へと覗く縁の丸まりに沿う明るみの細みか
な暗みの揺らぎを苛んで現れ出されよう、かにも、な現れ出されようをひたす
ら内へと巻き転げ回らせる、外の恐らくは有り得無さから炙り回される眩みな

ら眩み、にしろどれも欠けるか疵付けられたかな眩みなら眩み異なりかも知れずに眩みな、な眩みではばらけ散って眩み已むしか無かろうかにも、な、かにもに纏わり付いて揺らぎ凝るしか無くに眩み窮まるなら、な眩みを貫き抜け、眩み異なりとも異なる形（なり）を圧し拡げ破り反り吊り回し丸まり暗んで細みを求め損ない漂う、にも、な損ない漂いに寄り縋るしか無さげに怖ず怖ずとも硬みへと凝り滲み崩れ懸けたそうに硬みと弛みを混ぜ潰し眩ませるかな、丸まりの吊り回されが示し頽れ香らせる高みと低みの溶け交わりを柔らかげに平らげ揺らぎ凝らせ、な高みと低みに影が有るならその有るならを約めるだけ約め窮め損なう細みの偏りなそれな儘に、それ自らから逸れ沈む形（なり）を失い現す、な失いと現されそれとも失いな現れの消え失せない為に求められる、な形（なり）なりの一震えの、な形（なり）の微かにも明るもう兆しを粘り走らせる片側の滑り失せる辺りに映ろうかな微（かす）かな徴の幾つもの噴き上がりの拉（しだ）かれ窄まされに沿う丸み帯びそれとも丸み異なりの帯びさせられと刺し違えそうな磨かれて温（ぬる）げな傾きの、にも一震えを守り貫く丸み異なりとの異なりを探る低まりの底を細みの偏りの重みに圧し拉がれては彷徨き回るしか無い消え現れそれとも消え現れに擬えられる狂い無く丸み帯びそれとも丸み異なりの帯びさせられとの距たりを測り已まないで円み果てを乞えるなら乞おう衝き項垂れ仄霞む明るみなら明るみ、にも、な仄霞まされを拒

む構えで明るみの丸まろうとする向きを辛うじて躱す、消え現れへ戻ろうと消え已み現れ已むその始まり端（はな）を震える儘に掴み裂き、に裂かれ端（はな）の縁の裏を返すかに巻き込まれようとする、淡い限りな暗みに翳され絶え弛んで独り置き去られるのを望む望みを望み定め、な望みに自らを匿わされて消え現れようとするしか無い、消え現れな儘に已みようの無い、にも、な已みの始まりの明るみを細い限りに映し滲まそうと尚も一震えな形（なり）に異なる形（なり）を繋ごうと、形（なり）の消え現れへ向き已まない確かな乱れの切れ目を隠す切れ目の脹らみに似せ沈ませた、見付けようの無い虚ろからかの遡り退（すさ）り已みなら已みを、　消え現れの始まりかも知れない眩みの端くれの疼きと換えられるなら換え、　自ずと含み込むなり尖り逸れる、（二〇二二年十二月三一日）

断片　二〇二二

著者　u_

© 2022 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published